
バカとテストと転校生

ガルGC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと転校生

【Nコード】

N8818U

【作者名】

ガルGC

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣の二次創作です。

アメリカの技術者であり、試験召喚システムの開発に貢献した

『風見 星』は文月学園に転校する。これは、バカと技術者の物語です。

第1話（前書き）

初めての投稿です。

感想やコメント、意見があったら送って下さい。

第1話

とある人物は学校の前に立っている

そこには…………『文月学園』と書かれている

文月学園……………新・旧二つの校舎があり、1Fは職員室&各実習室、
2F～4Fは下から順に一年生、二年生、三年生となっている

ここまでなら他の進学校と大差はない……………が、この学校にはある
システムが

導入されている

その名も…………『試験召喚システム』

試験召喚システムは、革新的な学力低下対策として文月学園に初めて導入している。

そのため、数多くのスポンサーが存在し学費が安く抑えられている
しかし生徒を大量に取り入れたことから近隣の高校からは目の敵に
されている

また、試験校のため運営が世論に左右されやすく不祥事をあまり大
っぴらにできないという

問題点がある

その人物は今、『学園長室』の前にいた

（side???)

トンッ！トンッ！

「入っていいよ」

「失礼します」

ガチャッ！

「久しぶりだね、どうだい調子は？」

「まだまだ日本の生活は慣れませんか。」

流石に一週間で慣れるのは無理だと思いますけど？」

今私の目の前にいるのは、文月学園の学園長にして試験召喚システムの開発者の『藤堂カヲル』がいる

……噂では、妖怪やババアと呼ばれることもあるらしい

「それもそうだね

アメリカから日本に来てばかりだし

実験ばかりに付き合わせて悪かったね」

「いえ全然大丈夫です

私も開発者として責任がありますから」

「はあ……あんたみたい生徒がいたらいいのに

最近はガキどものせいで評判が下がる一方なのに……」

「……私も含まれていますか？」

「いや、あんたは別だね

実験のデータも見たが中々じゃないか」

「一週間実験しましたからね

……勉強の方はあまりできませんでしたが」

「振り分け試験はこの後だけ大丈夫かい？

一週間勉強してないんだろ？」

「わかりませんね、アメリカと日本では違いますから」

「まっあんたら大丈夫だと「トンツ！トンツ！」向かいが来たようだね」

「失礼します、学園長」

ドアを開けたのは補習教師の『西村宗一』先生だ

なんでも、趣味はトリアスロンとかなりパワフルな先生である

「西村先生、おはようございます」

「おはよう、試験の準備が終わったのですがよろしいでしょうか？」

「構わないよ」

「わかりました、荷物を持って補習室に来るように

失礼しました」

バタンツ！

「振り分け試験がんばってくればいいさ」

「はい！失礼しました」

ボタンッ！

「ふう、あいつのお陰で次の清涼祭はおもしろい事になりそうだね」

……

……

…

「では、今から振り分け試験を始める」

「わかりました」

「それでは………始め！」

パサッ！

振り分け試験………試験召喚システムに対応した学力試験である
通常のテストと異なり点数上限が存在せず、時間内であれば無制限に
問題を解くことができる
また、点数の結果よってA〜Fクラスのどのクラスに入るのかが決
まる

「それまで、では次の試験を始める………始め！」

………

……

……

…

時間が5時を指したところで……

「試験終了だ！……結果は明日職員室で教える」

「わかりました、お疲れ様です」

「明日の結果を楽しみに待つように」

私は補習室からでて家に向かって歩き出した

～翌日～

私は今、職員室で試験の結果を聞きに来たのだが……

「西村先生、私のクラスは？」

「あー………大変言いにくいのだがー………」

言にくい？テストが自分の思っていたよりも悪かったからか？

だとすると………CかDクラスか？

悪いと言ったらそのぐらいだし

「お前のクラスだが……」

西村先生から一枚の封筒を貰う

CかDかな？それとも…… Eクラスか？

とりあえず私は封筒を開け中から折りたたまれた紙を広げ……

「…… Fクラス？」

最低クラスだった

「お前は確かに答えは合っていた、合っていた…… が！」

合っていたのにFクラスどういうこと……

「…… 全教科を英語で答えるな！！」

うっかりミスだ！

「日本語に直したら答えは合っているが間違えは間違えだ！

お前は、FクラスがBクラス戦を終わった後で紹介する」

「わかりました」

「はあー…… お前をあんなバカがいるクラスいれたくないんだがな」

「いえ、私がミスをしたので自業自得です」

「まあー…… Fクラスの影響を受けないように頑張るんだぞ」

「???よくわかりませんが頑張ります」

そのころFクラス対Bクラスでは……………

……………

……………

…

「^{サモン}試獣召喚」

□ Fクラス

土屋康太

V S

Bクラス

根本恭二

保健体育

4 4 1 点

V S

2 0 3 点

□

Bクラス戦が終結していた

第2話（前書き）

今回の話

Bクラス戦を終えたFクラスの話です

第2話

side 明久

Bクラス戦は大変だったな……

壁を壊すのも楽じゃないや、姫路さんの手紙を取り戻すこともでき
たし

根本君に仕返しすることもできたけど……職員室での先生方の指導
はとても疲れた

「おい、明久

どうかしたか？」

僕に声をかけたのはクラスメイトであり1年からの仲の……

「おはよう雄二」

クラス代表で悪友である坂本雄二だ

「朝から考え事か？珍しいな……今日は雨でも降るんじゃないか？」

「僕が考え事をするのがそんなに珍しい事？」

「……済まない、明久」

「雄二がそんなに速く謝るなんてどういう……」

「雨じゃなくて隕石でも降りそうだな」

「訂正しろ!!」

まったく雄二はいつも僕のことをバカ扱いするんだから

「お主ら朝から何をやっておるのじゃ?」

ん?この独自の言葉遣いは……

「秀吉、おはよう」

「ん?秀吉か、おはよう」

「おはようじゃ」

僕のクラスメイトの一人で、友達の木下秀吉だ
ぱっと見る……じっくり見ても女子と間違えそうな可愛らしさである

「明久は先ほどから何を悩んでおったのじゃ?」

「大方昨日のことだろ?」

試召戦争だからといって壁を壊したからな
教師達から指導を受けたんだろ?」

くっ!何でわかるんだよ!

先生達の指導は2時間もあつたんだから!

あれ?そついえば……

「明久、どうしたのじゃ?」

「うん、昨日職員室に見覚えのない生徒がいてね」

「へえ〜……どんなやつだ？」

「えっと見た感じ………女の子だったよ」

「………明久、詳しい話しを聞かせろ」

僕の目の前にカメラを持った不審者が………って

「ムツツリーニいつの間に？」

カメラを持っていたのは、寡黙なる性識者ことムツツリーニ！

………じゃなかった、名前は土屋康太
僕たちのクラスメイトである

「………最初からいた」

気付かなかった！

「………それよりも女子の話し」

「あれ？どうしてムツツリーニが知らないの？」

「たしかに、ムツツリーニが情報を知らないなんて変だな」

「ムツツリーニよ、お主が分かっていることはないかの？」

情報屋のムツツリーニが知らないなんて変だしね

「……………転校生の話なら」

「この時期にか？ちよつと変わってるな」

学校が始まって一週間しかたつてないのに転校生か……………

「どうして転校したんだろうね？」

「んなもん俺が知るかよ」

それより速くいかねえと遅刻するぞ、明久」

「もうそんな時間？」

思ったより長く話していたみたいだ、急がないと鉄人が！
僕たちは走ったことでギリギリ教室に着くことができた

「アキ、おはよう」

教室に入ると最初に聞こえたのは、Fクラスでは少ない女子の声
ドイツで育った帰国子女の島田美波、去年のクラスメイトでもある

「おはようございます、吉井君」

次に声を掛けたのは、男ばかりのFクラスの中では女神ともいえる
存在の姫路瑞希

成績は優秀だけど振り分け試験で熱を出してしまい無得点扱いとな
ってしまった

「おはよう、美波、姫路さん」

「4人とも遅かったわね、どうしたの？」

「ちょっと来る途中話してたら遅くなっちゃって」

「そうなの？」

「もうすぐ最初の授業が始まるわよ」

「え？もう？」

時間を確認したら、もう始まる時間である

「吉井君、早く席に座った方が……」

「そうだね」

早く自分の席に……自由席だけだね

少し待つと……あれ？鉄人？1限目はたしか化学の布施先生だった
ハズだけど……

「今日は布施先生が風邪のため、私が代わりに担当することになった」

げっ、朝から暑苦しい鉄人を見なきゃいけないなんて最悪だ！

「そして、転校生を紹介する」

転校生？昨日見たあの子かな？

このクラスだったんだ、仲良くできたらいいな

「風見、入ってこい」

「（ガラガラ……）おはようございます」

「自己紹介を頼む」

「はい、風見^{かざみ} 星^{せい}です

「1年間よろしくおねがいします」

『『『うおおおおおおおおおおー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』』』

あつ、昨日職員室で見た子だ、風見さんって言うんだ
小柄の体で秀吉ぐらいの身長かな？黄色い髪に肩まで揃えられている
うん、どっからどうみても美少女だね！何でムツツリーニが気付か
なかったんだらう？

「風見はアメリカからの帰国子女だ

「日本のことで変な誤解を出さない様に！」

へー……帰国子女なんだ、美波と同じだね
知らない人にとってFクラスは常識の範囲外だからね
僕は常識人だから誤解なんて絶対だすわけがない！

「特に吉井は変な誤解を出さない様に！」

「先生！どうして僕なんですか！？」

「それは、お前がバカだからだ」

くっ……！否定できない

「鉄人、質問していいか？」

雄二が鉄人に質問？転校生のことについてかな？

「西村先生と呼べ、何だ？」

「何で風見は……………」

雄二！言っちゃだめだ！それ以上は……………

「……………男子制服を着ているんだ？」

「男だからに決まっているからだろうが」

『『『チクシヨオオー……ッ！』』』

（side 畢）

私は、西村先生の言葉の意味をやっと理解した

第3話（前書き）

今回の話

風見がFクラスに入り主要メンバーとの自己紹介の話

第3話

（side星）

私は今Fクラスにいるのだが……

『坂本！俺たちの期待を潰すな！』

『貴様！我々の思いに何てことを！』

『事実だ！あきらめろ』

『『『チクシヨオオーーッ！』』』

……どうしよう？

「貴様ら……！静かにせんか！！」

西村先生が怒鳴ってくれたおかげで静かになったけど
み、耳が痛い！先生……私は先生の横にいるから耳がすごく痛い！

「風見、空いている席に座りなさい」

「……………はい」

耳が痛いせいで少し返事は遅れたけど

さて、空いている席は……… あった、一番右奥の一つ前だ
席に座って………

「………先生、質問してもいいですか？」

「………何だ？」

西村先生が困った顔で返事してくれたけど………

「座布団の綿が少ないんですが………？」

「我慢しろ」

「………卓袱台の脚が折れそうなんですけど？」

「後で、木工ボンド支給するから自分で直すように」

「窓が割れていて寒いんですけど？」

「………セロハンテープとビニール袋で直しておけ」

「………はい」

何なんだこの教室！机が卓袱台でイスが座布団なんて………いろんな意味で驚いたよ！

アメリカでは、少なくともCクラスかBクラス並みの設備はあったのに！

とりあえず最初の授業を受けるか………

日本での初めての授業だけどアメリカの授業とそんな大差はないな

今は昼休みか………どうしようかな？
本を読む？勉強？ん〜………さて何から………

「おい」

「ん？」

考えている途中にいきなり声が聞こえたので振り向くと………
そこには髪が赤く、たてがみの様な髪型であり意志の強そうな目の

………

「……………ライオン？」

「ライオンじゃねえ！」

間違えた

「雄二がライオンって……………」

「明久、グーの正しい使い方を教えてやる」

「痛った！今、本気で殴ったよね！？」

決して正しい使いかたではないと思う

「俺の名前は坂本雄二だ

このクラスの代表だ、よろしくたのむ」

「雄二！どうして僕を無視するの！？」

「こちらこそ」

「ねえ！二人して無視しないでよ!？」

「他の奴も紹介するから少し待ってくれるか？」

「わかった」

「ちょっと!？」

少し待つと代表が何人が連れてきた

「皆、自己紹介を頼む」

「まずワシが言うかの

ワシは木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておく

よろしくたのむの」

見た瞬間女子と思ったけど、男子の制服を着ているから……男子かな？

演劇部か見てみたいな……ちょっと頼んでみよ

「次はウチね

ウチは島田美波、ドイツの帰国子女よ

よろしく」

同じ帰国子女の人がいるのは少なからず嬉しい
日本の生活はまだ慣れていないから後で、いろいろ聞いてみよう

「……………土屋康太、よろしく」

口数が少ないけど人見知りかな？懐から見えるカメラが気になる盗撮とかしてないよね？何かしている気がするけど……………

「私は、姫路瑞希って言います
よろしくお願いします」

姫路瑞希って、たしかAクラス並みの実力を持っていたはずだけど……………
なんで、Fクラスにいるの？後で聞けばいいや

「最後は僕だね？」

僕は「学園一のバカ」の……………って雄二！邪魔しないでよ！！」

学園一のバカ？もしかして……………！！

「吉井明久？」

「待って！どうして僕の名前がわかったの！？」

それは……………

「アメリカで有名だから」

「待つんだ明久、窓から飛び降りようとするな」

「離して！僕は死んで新しい人生を歩むんだ！！」

「明久、死んでもバカは治らんぞ？」

「離すんだ秀吉、このバカを殴らなきゃいけないんだ!」

「すごく騒がしいけど……楽しいな」

「ある意味このクラスでよかったかもしれない」

「私は、風見星です」

「一年間よろしくお願いします」

『よろしく』

「明日は一体何が起こるのか楽しみだな」

「そういえば風見はどうして僕を知っているの?」

「星でいいよ」

「実はね………」

『実は………』

「隣の人が吉井……」

「言わないで！」

『どうして？』

「答えを聞きたくない」

吉井の顔が若干涙目になっていたのが印象的であった

第3話（後書き）

次回はAクラス戦を書きたいと思います

第4話（前書き）

今回の話

FクラスがAクラスに宣戦布告する話です

第4話

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です、他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』
(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがあります

風見星の答え

- 『(1) 河童の滝登り』

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね

吉井明久の答え

『(2)泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか

〈side星〉

「まずは皆に礼を言いたい

周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは

他でもない皆の協力があったとのことだ、感謝している」

今朝、代表である坂本は今日Aクラス戦をするために作戦の説明をしている

「ゆ、雄二、どうしたのさ、らしくないよ?」

「ああ、自分でもそう思う

だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

らしくないんだ

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい
勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現
実を

教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そっだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

勝負の前に皆の士気が上がった
だけど、AクラスとFクラスでは点数差がありすぎる
どうするつもりだろ？

「皆ありがとう、そして残るAクラス戦だが

これは……………一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

『どいうことだ？』

『誰と誰が一騎討ちをするんだ？』

なるほど、一騎討ちならまだなんとかなるけど……………

『それで本当に勝てるのか？』

勝てるかどうかは別だ、作戦があるとは思っけど……………

「落ち着いてくれ、それを今から説明する」

坂本が机を叩いて皆を静かにさせた

「やるのは当然、俺と翔子だ」

翔子？Aクラスの代表の霧島翔子のことかな？

代表同士の一騎討ちは分かるけど、どうやって勝としているのだろうか？

「馬鹿の雄二が勝てるわけなあっ！？」

考え事をしていたらいきなり私の卓袱台にカッターが突き刺さっている！？

「すまない、当てる気はなかったんだ」

「別に大丈夫だよ」

抜けばいいだけだしね

それよりも吉井の頬が少し切れたのが気になるけど
殺すつもりはないよね？吉井と坂本は友達だよね？

「次は耳だ」

あの二人は友達ではないのだろうか？

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い

まともにもやりあえば勝ち目はないかもしれない」

わかっているのならカッターを投げないでもらいたい

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？」

「またもにやりあえば俺たちの勝ち目はなかった、今回だって同じだ

俺は、翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる、俺たちの勝ち揺るがない」

Dクラス戦やBクラス戦も坂本の作戦のお陰かな？以外に策士だね

「俺を信じて任せてくれ

過去に神童と言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおおーっ！！』

士気が最高潮になったね、全員が坂本の言葉を信じている

「坂本、代表同士の一騎討ちの内容はどうすの？」

「ああ、一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

日本史？霧島さん日本史が苦手ってこと？

「ただし。内容は限定する

レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり

召喚獣の勝負ではなく純粹な点数勝負とする」

注意力勝負になるよね、たしかに勝ち目はあるけど……

「でも、同点だったら、きつと延長戦だよね？」

「同点だったら問題のレベルも上がって、ブランクのある雄二には
厳しくない？」

「確かに星と明久の言うとおりじゃ」

勝ち目があるかもしれないけど、分の悪い賭けだ
これが坂本の切り札なのか？

「おいおい、あんまり俺をなめるなよ？
いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言
うものか」

「??それなら、霧島さんの集中力を乱す方法を知っているとか？」

「いいや、アイツなら集中なんてしていなくとも
小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろ」

「だったらどうするつもり？」

「それはある問題が出れば、アイツが間違えると知っているからだ」

「ある問題？」

「ああ、その問題は 『大化の改新』」

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？」

「そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

「そんな問題が出てくるかな？」

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない
もつと単純な問いだ」

「単純？」

「単純というと 何年に起きた、とかかのう？」

「おっ、ビンゴだ秀吉」

「お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺たちの勝ちだ」

「大化の改新の年号？」

「大化の改心は無事故《645》の改新だったよね？」

「大化の改新が起きたのは、645年」

「こんな簡単な問題は明久ですら間違えない」

「吉井が顔を背けたのは気のせいだろうか？」

「だが、翔子は間違える、これは確実だ」

「そうしたら俺たちの勝ち、晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

「なるほど勝算があるんだね」

「さっきから1つ気になることがあるけど……」

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとは、その……………仲が良いんですか？」

確かにAクラスの代表を『翔子』や『アイツ』って呼んでいたし

「ああ、アイツとは幼なじみだ」

「総員。狙ええっ！」

「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと！？」

……………何この状況？

「星よ、呆気にとられてどうしたのじゃ？」

「目の前の光景が……………？」

「いつものことじゃ」

「いつもなの！？」

おかしいな、クラスのほとんどが一人に対して上履きを構える異様な光景が見える

「あの、吉井君」

「ん？なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ……美人だし」

「……………」

「え？なんで姫路さんが僕に対して攻撃態勢を取るの！？」

それに美波、どうして君は僕に向かって

教卓なんて危険なものを投げようとしているの！？」

「……………木下この状況はどうにかならない？」

「そうするかの

まあまあ、落ち着くのじゃ皆の衆」

パンパンと手を叩いて場を静めてくれた

「む、秀吉は雄二が憎くないの？」

「冷静になって考えてみるが良い

相手はあの霧島じゃぞ？男である雄二に興味があるとは思えんじやろつが」

……………どうしよう？全然状況に付いていくことができない

「むしろ、興味があるとすれば……………」

「……………そうだね」

二人の視線が……………

「な、なんですか？」

もしかして私、何かしましたか？」

……………姫路さん？姫路さんが何かされるの？

それにさっき、吉井に攻撃態勢を取ったから何かはしたけどね

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

嘘を教えた？

「アイツは一度覚えたことは忘れないほど頭が良い
だから今、学年トップの座にいる」

なるほどそれを利用するのか

「俺はそれを利用してアイツに勝つ！

そうしたら俺たちの机は……………」

『システムデスクだ！』

「一騎討ち？」

「ああ、Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

これが宣戦布告か

今Aクラスの前に坂本を筆頭に、私、吉井、姫路さん、木下、土屋たちで来た

「うーん、何が狙いなのか？」

目の前にいるのは木下の双子の姉の木下優子さん
木下も女子の格好をしたら同じ姿じゃないかな？

「もちろん俺たちFクラスの勝利が狙いだ」

「面倒な試召戦争を手短に終わらせることができるのはありがたいけどね

だからと言ってわざわざリスクを冒す必要も無いかな」

「賢明だな」

予想道理だけどどうするつもりなんだろうか？

「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題も無いし」

AクラスがCクラスに勝ったんだ、当り前かAクラスの方が点数上だしね

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……、昨日来ていたあの……」

あの？

「ああ、アレが代表をやっているクラスだ
幸い宣戦布告まだされていないようだが、さてさて
どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから
三カ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよね？」

確かに負けたクラスは三カ月の準備期間を経ない限り自ら
戦争を申し込むことができない、これは負けたクラスが再戦をしな
い為の取り決めだ
ただFクラスの設備は変わっていない

「知っているだろ？事情はどうあれ
対象的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっていることを
規約にはなんの問題もない…… Bクラスだけじゃなくて、Dクラ
スもな」

だから設備が変わっていないのか

「……それって脅迫？」

「人聞きが悪い、ただのお願いだよ」

なんだか坂本が悪者に見える

この交渉の仕方、ただの悪役だよな

「うーん……わかったよ、何を企んでいるか知らないけど

代表が負けるなんてありえないからね、その提案受けるよ」

「え？本当？」

吉井が驚くのも無理はない、意外とあっさりとした返事だから

「だって、あんな格好をした代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……」

…… Bクラスの代表がどんな格好をしているのかが気になる

「でも、こちらからも提案

代表同士の一騎討ちじゃなくて、そうだね、お互いに五人ずつ選んで

一騎討ちで五回で三回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

「う……」

流石に、きっちり警戒している

「なるほど、こっちから姫路が出てくる可能性を警戒しているんだな？」

「うん、多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて

姫路さんが絶対調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし」

「安心してくれ、うちからは俺が出る」

「無理だよ、その言葉を鵜呑みにはできないよ
これは競争じゃなくて戦争だからね」

その通りだな

「そうか、それなら、その条件を呑んでも良い」

「ホント？嬉しいな」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う
そのくらいのハンデはあってもいいはずだ」

そうやって交渉を進める気なんだ

科目の選択をできなくては坂本の作戦も使えないからね

「え？うーん……」

この交渉によって仲間全員の立場が変わる可能性があるから、悩む
よね

「……………受けてもいい」

「うわっ！」

吉井が驚いた声が聞こえたけどどうしたんだろう？

「……………雄二の提案を受けてもいい」

突然現れたけど……………この人が霧島さん？

「あれ？代表、いいの？」

「……………その代わり、条件がある」

「条件？」

「……………うん」

あ、やっぱり霧島さんなんだ

「……………負けた方が何でも一つ言うことを聞く」

こ、これは、姫路さんのピンチ！ど、どうしよう！？

「……………（カチャカチャ）」

「ムツツリーニ、撮影はまだ早いよ！

負ける気満々じゃないか！」

土屋……………盗撮してたんだ、犯罪だよ

「じゃ、どうしよう？」

勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる、二つはうちで決めさせて？」

全ては譲ってくれなかったが妥協案が得られた

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！何を勝手に！

まだ姫路さんが了承してないじゃないか！」

「心配するな、絶対に姫路に迷惑はかけない」

自信満々に言っているのだから、勝利を確信しているみたいだ

「……………勝負はいつ？」

「そつだな、十時からでいいか？」

「……………わかった」

霧島さんの話し方がなんだか土屋と話し方が似ているな

「よし、交渉は成立だ、一旦教室に戻るぞ」

「そつだね、皆にも報告しなきゃいけないからね」

交渉を終了し、Aクラスをあとにする

もつすぐ、Aクラスとの試召戦争が始まるうとしていた

第4話（後書き）

次回はAクラスとの勝負です

第5話

問 以下の英文を訳しなさい

『 This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
y. 』

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

風見星の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

正解です、きちんと勉強していますね

土屋康太の答え

『これは

』

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか

吉井明久の答え

『 x

』

教師のコメント

できれば地球上の言語で

〈side 畢〉

「では、両名共準備は良いですか？」

試合の立会人はAクラス担任かつ学年主席の高橋先生が務める

「ああ

「……………問題ない」

一騎討ちの会場はAクラス

こちらの方が広く、畳があるFクラスじゃ締まらないからね

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

向こうは木下の姉である木下優子さん、対するこちらは……………

「ワシがやるっ」

こちらは弟である木下秀吉が相手をする
自分から行ったのには何か作戦があると思っけどうまくいくかな？

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？姉上」

「Cクラスの小山さんって知っている？」

「はて、誰じゃ？」

CクラスってAクラスと戦ったクラスだね

「じゃーいいや、その代わり

ちよつとこつちに来てくれる？」

「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするつもりじゃ姉上？」

廊下に連れ出して何をするんだろ？壁に耳を当てて……………

『姉上、勝負は　　どうしてワシの腕を掴む？』

『アンタ、Cクラスで何をしてくれたのかしら？どうして

アタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているの
かなあ？』

『はっはっはっ、それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して

あ、姉上！

ちがつ……………！その関節はそっちにはまがらなっ……………！』

……………聞いてはいけないものを聞いた気がする

この学園には必ず血が流れるの？……………ものすごく怖い

ガラガラガラガラ

扉を開けて木下さんが戻ってくる

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ、代わりに人を出してくれ
る？」

「い、いや…………、ウチの不戦敗で良い……………」

にこやかに笑いかけながらハンカチで返り血を拭っている木下さん
こっちを見ると近づいてきて……………

「何か聞いたかしら？」

「（ブンブンブン）何にも聞いてません」

目が笑ってない…………

私は首を痛めるくらい首を横に振った

「そうですか

それではまずAクラスが一勝、と」

高橋先生がノートパソコンを操作することでディスプレイに結果が
表示された

『Aクラス 木下優子 VS Fクラス 木下秀吉
生命活動 WIN DE
AD』

木下の生命活動が！？やばい早く救出しないと！

「（坂本、ちょっといい？）」

「（ん？どうした？）」

「（木下の救出をする）」

「（わかった、早く行くんだ手遅れになる前に）」

「（行ってくる）」

「では、次の方どうぞ」

さて、教室から出て木下は……いた、

……かなりのグロテスクで、これはやばいな……
すぐに処置をしないと……

……

……

…

「助かったぞ、星

危づく危ない川を渡るとこじゃったぞ」

危ない川は、三途の川だと思っ

「助かってよかった」

「すまぬ

星、今試合はどのようになっておるのじゃ？」

「まだ、Aクラスで試召戦争をやっているけど、どうする？」

「まだ姉上の折檻の痛みはあるがワシは戻るぞ」

「それじゃ行くか」

木下を治療してAクラスに戻ってきたが、坂本と霧島さんがいない

「吉井、坂本と霧島さんは？」

「あ、おかえり星」

「ワシもおるぞ」

「あれ？秀吉、帰ったんじゃないの？」

「用事がなくなったので、戻って来たのじゃ」

詳細は言えないからね

「それで吉井、二人は？」

「今最後の勝負をしているよ、ほら」

吉井が指さした方を見ると

ディスプレイに二人がテストを受けている映像が流れていた最後の勝負つてことはこのテストですべてが決まるみたいだ

ディスプレイの下に出題問題が出ている

『次の（ ）に正しい年号を記入しなさい』

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

なかなか出ないな……

なかったら勝ち目がなくなってしまう

（ ）年 鎌倉幕府設立

まだか？まだでないのか？

（ ）年 大化の改新

「あ……………！」

思わず声が出た、大化の改新が……………出た！

「よ、吉井君」

「うん」

「これで、私たちっ……………！」

「うん！これで僕らの卓袱台が」

『システムデスクに！』

Fクラス皆の言葉

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

『うおおおおおおおっ！』

耳が痛くなるほどの歓喜の声

『日本史勝負 限定テスト 100点満点』

『Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄二 53点』

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった

さよなら一日だけだったけど、バイバイ……………私の卓袱台

「三対二でAクラスの勝利です」

高橋先生が締め台詞を言うと

私と木下、姫路さん、島田さん以外が視聴覚室になだれこんだ

「……………雄二、私の勝ち」

「……………殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「吉井、落ち着くんだ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

私と姫路さんが一緒に止めているが吉井の勢いは落ちない

「だいたい、53点ってなんだよ！

0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと
「

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーっ！」

なんだろ？どんどん坂本を庇うのが難しくなってきた……

「アキ、落ち着きなさい！」

「アンタだったら30点もとれないでしょうが！」

「待つんだ、島田さん！」

いくら吉井でも30点以上はと」「それについては否定しない！」「……」

吉井も庇う必要性がなくなってきた

「それなら、坂本君を責めちゃだめですっ！」

「くっ！なぜ止めるんだ姫路さんに美波と星！」

「この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて死刑です！」

「それ以前に犯罪だよ！」

どうしてこのクラスには犯罪者が多いの！

「……でも、危なかった、雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けていた」

「言い訳はしねえ」

図星か

「……ところで、約束」

あ

「……………（カチャカチャカチャ！）」

土屋がカメラを構えて……………って早！吉井も手伝っているし

「……………それじゃ」

霧島さんが一度姫路さんに視線を送り、再び坂本を見ると

「……………雄二、私と付き合って」

と言い放った

……………へ？

「やっぱりな

お前、まだ諦めてなかったのか」

「……………私は諦めない、ずっと、雄二のことが好き」

えっと……………告白？これが日本式の告白なの？

「拒否権は？」

「……………ない、約束だから今からデートに行く」

「ぐあっ！放せ！やっぱりこの約束なかったことに

」

ぐいつ　つつかつか

霧島さんは坂本の首根っこを掴んで教室を出て行った

「……………」

「……………」

「……………」

教室に沈黙が訪れる、あまりの出来事に言葉が出てこない

「さて、Fクラスの皆

お遊びの時間は終わりだ」

後ろから野太い声が聞こえたので振り返ると
そこには生活指導の西村先生が立っていた

「あれ？西村先生どうしたのですか？」

「僕たちに何か用ですか？」

「ああ、今から我がFクラスについての説明をしようと思ってな」

え？我がFクラス？

「おめでとう、お前らは戦争に負けたおかげで
福原先生から俺に担当が変わるそうだ、これから一年死に物狂いで勉強できるぞ」

『なにいつ!』

Fクラスの殆どが悲鳴をあげる

生活指導の西村先生が担任になってくれたら……

「…………… やつと、Fクラスがまともになるんですね」

「風見、お前も苦勞しているな」

西村先生に同情された

「いいか、確かにお前らはよくやった、Fクラスがここまでくるとは正直思わなかった

でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡って行く上では強力な

武器の一つなんだ、全てではないからといってないがしろにしていいものじゃない」

流石は西村先生だ、もつとこのFクラスに常識を叩きこんでほしい

……………特に男子に

「吉井、お前と坂本は特に念入りに監視してやる

なにせ、開校以来初の『観察処分者』とA級戦犯だからな」

「そうはいきませんよ! なんとしても監視の目をかいくぐって

今まで通りの楽しい学園生活を過ごしてみせます!」

「……………お前には悔い改めるといふ発想はないのか」

友人にカッターを投げられている時点で楽しい学園生活ではないと

思う

「とりあえず明日からは授業とは別に補習の時間を二時間設やろう」

「二時間も！？学園生活の放課後は大切なんだ！絶対に逃げ切ってみせる！」

言い切った！？学生の本分である勉強を逃げると言い切ったよ！？
どれだけ勉強が嫌いなもの！……………西村先生からは逃げ切れないと思
うけど

「さあ〜て、アキ

補習は明日からみたいだし、今日は約束通りクレープを食べに行
きましようか？」

「え？美波、それは週末の話じゃ……………」

「だ、ダメです！吉井君は私と一緒に映画を観に行くんです！」

「ええっ！？姫路さん、それは話題にすら上がってないよ！？」

まったく吉井も抵抗しないで、二人とのデートを楽しめば良いのに

「……………吉井」

「星！助けてよ！」

「……………諦めが肝心だよ？」

「チクシヨオオオツ！こうなったら、西村先生！」

明日からとは言わず、補習は今日からやりましょう！思い立ったが
仏滅です！」

「『吉日』だ、バカ」

「そんなことはどうでもいいですから！」

「うーん、お前にやる気が出たのは嬉しいが」

西村先生は言葉を区切り、吉井たちを見て

「無理することはない、今日だけは存分に遊ぶといい」

ニヤニヤした笑顔で西村先生は言った

「おのれ鉄人！僕が苦境にいると知った上での狼藉だな！

こうなったら卒業式には伝説の木の下で釘バットを持って貴様を
待っ！」

「斬新な告白だな、オイ」

斬新過ぎる上に絶対に西村先生に返り討ちにあうな
その前に吉井が忘れている可能性が高いかな？

「アキ！こんな時だけやる気を見せて逃げようたって、そうはい
かないからね！」

「ち、違つよ！本当にやる気が出ているんだってば！」

「吉井君！その前に私と映画ですっ！」

「姫路さん、それは雄二じゃなくて僕となの!？」

「???坂本君?なんのことですか?私はずっと前から吉井君のことを」

「アキ!いいから来なさい!」

「あがあっ!美波、首は致命傷になるから優しく」

優しくの前に、やめるように言った方がいいんじゃないか?

「ほら、早くクレープ食べに行くわよ!」

「わ、私と映画に行くんですよね!」

「いやああっ!生活費が!僕の栄養があっ!」

吉井が二人に連れられて教室から出ていく

「木下、どうする??」

「そうじゃの、ワシらも帰るとするかの」

「そうだね」

こうしてAクラス戦は無事に終結した

第5話（後書き）

今回の話で原作1巻が終了です

第6話

（復習問題）

問 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい

- （ ）年 平城京に遷都『
- （ ）年 平安京に遷都『
- （ ）年 鎌倉幕府設立『
- （ ）年 大化の改新『

姫路瑞希の答え

- 710『
- 794『
- 1192『
- 645『

教師のコメント

正解です、小学校の問題の復習ですが簡単すぎましたかね？

風見星の答え

- なんと見事な平城京『
- 鳴くよウグイス平安京『
- 良い国作るう鎌倉幕府『
- 無事故の改新『

教師のコメント

それは覚え方です

吉井明久の答え

『鳴くよウグイス』

『白紙に戻して遷都しよう』

『意欲に燃える』

『鳴くよウグイス』

教師のコメント

すべて間違いです、あと、忘れたからっといって同じ答えを書かない様に

）side星）

「うーん………」

私は今悩んでいる、今日着ていく服を選ぶのに

「どっちがいいかな？」

私が何故悩んでいるのかは、それは昨日のことである

く回想く

私と木下はAクラスとの試召戦争を終え帰宅する時のことであった

「星は日本に来てどのくらい経つのじゃ?」

「だいたい十日くらいかな?」

「なんと、十日でそんなに日本語がうまく話せるのか?」

「日本に行くのがわかっていた時点で勉強したから……一週間勉強したな」

「星はすごいのがう」

「木下だつてすごいじゃないか

演劇部のホープだよな?声真似も本人にそっくりだし」

「あれも演劇の一つでの、練習したらすぐにできるようになったのじゃ」

それはないと思う

「それに星も演劇部に入部したばかりじゃが

演技がなかなか綺麗じゃったぞ、何処で習ったのじゃ?」

私は自己紹介の後に、木下に演劇部を観たいと頼んで演劇部を見学した

木下に一つお題を出されて、やってみたら意外にうまくいってしま

つたため
見学だけのハズがいつの間にか入部されていて、放課後に参加している

「初めてだよ、なぜかうまくできたんだよ」

「む…そうなのか？習ったような動きに見えたぞ？」

「んー……なんでだろ？」

話をしていたら、いつの間にか木下の家についた

「お、いつの間にかワシの家の前じゃ」

「此処に住んでたんだ、私の家と近いね」

「星は近くに住んでおるのか？」

「そこの角を右に曲がって、その突き当りにある」

「そうじゃったのか……今度遊びに行ってもいいかの？」

「遊びに来てもいいよ、まだ荷物の整理が済んでないけどね」

「そうなのか？明日手伝いに行ってもいいかの？」

「明日は買い物をしなきゃいけないから無理かな」

「買い物じゃったら演劇の小物をまだ購入してなかったの？」

演劇部では、劇の小道具などは決められた担当が購入しなければならない

今回の担当は、木下と私であるから、購入しなければならない

「だったら明日一緒に買いに行かない？」

「ワシはかまわぬぞ、今日の礼をまだしておらぬからの」

「じゃあ明日、私の家で集まってから行く？」

「うむ、了解した」

「明日の10時でいい？」

「わかったのじゃ、また明日じゃ」

「また明日」

〜回想終了〜

そして、今現在にいたると

今パジャマなのだが、着ていく服で悩んでいる

どっちにすれば……………

ピンポーン

ん？チャイム？ふと時間を見ると約束の時間であった

流石に、この格好で出るわけにはいかないからな……………しかたがない
アメリカで吉井さんに教えてもらった服を着て出てみるか

木下がいるであろう玄関のドアを開けた

side 秀吉

「ここが星の家なのじゃな」

家の大きさをいえばワシの家の2倍以上はあるくらいはあると思えるのじゃ

星の家はお金持ちかの？とりあえず呼び鈴を……

ピンポーン

すぐに出てこなかったが、しばらくしたら扉が開きそこには……

「待たせてゴメン」

謝りながら現れる……メイド服を着た友人の姿

……

「……………どじしたの？」

「何でメイド服を着ておるのじゃ！」

「何でって……………日本の服はメイド服じゃないの？」

「違うのじゃ！日本でも普通の服なのじゃ！」

星が日本のことで何か勘違いしておる

「おかしいな……………」

日本では『Fujiya - ma、Tempo - ra、メイド服』が
フジヤマ テンポーラ
日本の文化って聞いたよ?」

「それは絶対おかしいのじゃ!」

どうして『富士山』や『天ぷら』をつまく言えておらぬのに
何故、メイド服だけきちんと発音されておるのじゃ! いったい誰
に聞いたのじゃ?」

「む………… 失礼な

隣に住んでいた、人から聞いたから間違いないよ!」

「その人自体が間違っておるのじゃ!……………ん?」

そつえば時間は……………もうこんな時間なのじゃ!

「星よ、急がんとバスに遅れるぞ!」

「えっ!? わかったすぐ着替えるから少し待って!」

星は急いで家に戻ると1分もしないうちに戻ってきた
…………… 今度は流石に普通の格好じゃった

「早く行くぞ!」

「わかった!」

……………

……

……

…

「ふうー、間に合った」

「ギリギリじゃったぞ」

バス停に人が多くて助かったのじゃ

「木下、此処からどの位かかる？」

「そうじゃの……30分くらいかの？」

今向かっておるのは、デパートじゃが
すこし遠いところなので、バスで移動しているのじゃ

「そのデパートって大きいの？」

「うむ、最近できたばかりじゃが、街では一番でかいらしいのじゃ」

「へー……そうなんだ」

最近できたばかりなので気にもなっておったのじゃ
バスで移動して30分後、しばらく歩くとようやく目的地に到着じゃ

「でかいね……」

「そつじゃの……」

思っていたよりもでかくて驚いてしまったのじゃ

これだけでかいのなら、良い小道具も見つかるかもしれんの

「さて、行くかの」

「良いもの買えるといいね？」

「そつじゃな」

そして、デパートに足を踏み入れた

〈side 星〉

日本に来ての初めての買い物だな

引越す時にいらぬ衣類全部リサイクルに出したら殆ど無くなった
今着ている服と制服とメイド服しか家にならね、買い物しないとキツイんだ

「木下、服売り場は何処にある？」

「その壁に書いてあるの……… 4階みたいじゃぞ」

「わかった、私は4階に行くけど

木下は先に演劇用の小道具を探すの？」

「いや、ワシも少し服を買おうと思っ
てのそれと頼まれていた服を買わん
といかん」

「たのまれた服？」

「そんなのあつたけ？」

「うむ、この紙を店員に渡せばわか
ると言っておつたのじゃから大
丈夫じゃろ」

「とりあえず紙は店員に渡して、服
を買いに行く？」

「そうじゃな」

二人で4階の服のエリアに着いたが……

「……………広いね」

「想像以上に服がたくさんあるの……」

私と木下は驚いた

見渡す限り、服、服、服、たくさん
ありすぎて視界には服しか見え
ない

「さて、服を探すか

良い服見つかるといいな……」

「これだけあれば見つかるじゃろ

紙を店員さんに渡して、ワシらは服
を探すのじゃ」

「そうだね」

さて、服を買いいますか……………

……………

……………

…

「買いすぎだね」

「うむ、小道具も良い物が多くてたくさん買ってしまったのじゃ」

私は服を木下は小道具を買いすぎた

だって良い物がたくさんあったし、店員さんオススメも断れなかったもん！

「帰る？」

「そうじゃの、これだけあれば当分困らんじやろ」

木下は次の演劇の小道具も買っていたため荷物は多い

「さて、バスは……………ん？」

「どっつしたのじゃ？」

今、視界の端に吉井の姿が見えたような？

「なんでもな「秀吉に星！なんで此処にいるの？」……………」

見つかってしまった

しかも、後ろに姫路さんと島田さんもいるし！

「明久に島田と姫路よ、何をしておるのじゃ？」

「実は「この豚野郎〜！！」っやば！二人ともこっちに！！」

吉井に強引に引つ張られ草むらに入れられ、外の様子を見ると……

「この豚野郎！何処に行ったのです！殺して差し上げますわ！！」

すぐく、怒ってるよあの子

「吉井、また何かしたのか？」

「僕は何もしてないよ！

美波のクレープを貰おうとしたら襲われて……………」

それが原因じゃないか！

「明久よ、それが原因だと思っただけじゃが」

「皆ゴメン！ウチの所為でこんなことになっちゃって」

「島田さん、それよりも此処から移動しないと」

あの人物は危険だ！

「けど、どうしよう？」

清水さん全然動く気配がないし……」

「ならば明久よ

今此処に演劇部の衣装があるのじゃが着替えてみるのはどうじゃ
？」

「それだ！流石は秀吉！じゃあ早速………」

………只今、着替え中です、しばらくお待ちください………

「よし！着替えたよ！」

そこには………ウエイトレス姿の吉井がいた
違和感がなぜかないのが驚きである

「秀吉、何でウエイトレスなの？」

「部員がワシ用と言っておったから、てっきり男物だと思ったのじ
ゃが」

何故か木下もウエイトレス姿………何で、着替えた？

「あー………可愛いです、吉井君」

「なんだろう、この敗北感？ウチ女なのに」

姫路さんと島田さんはトリップしている

「そこかー！見つけました！この豚や……何て格好をしているのですか？」

清水さんが飛び込んできて

吉井の姿をみて、少し引いていた

「そんなこと聞かないで！」

「不潔です！不潔です！」

女の格好をしていればお姉さまが振り向くと思っただら大間違いです！

「いや、違うから」

吉井に同意

「ウチは普通に男が好きなの」

島田さん、ドンマイ

そして再び吉井達が逃げて清水さんが追っている

………何で、私たちを巻き込んだんだよ！

「ワシはどうすればいいかの？」

「とりあえず、着替えようね？」

流石にウエイトレス姿と一緒に帰るのはキツイ

その後、着替えた木下と一緒に家に帰った

第6話（後書き）

アニメ第3話の一部参考

次回は2巻に入りたいと思います

第7話（前書き）

まだ、二巻じゃないよ

第7話

問 以下の文章の（ ）（ ）に正しい言葉を入れなさい
『光は波であつて、（ ）（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

風見星の答え

『粒子』

教師のコメント
よくできました

土屋康太の答え

『寄せて返すもの』

教師のコメント

君の回答はいつも先生の度肝を抜きます

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです

〈side星〉

今日は試召戦争を終えた次の月曜日

この前の休日のように、騒ぎに巻き込まないでほしい
さて、早く学校に向かうため少し速めに歩こ

「おはようじゃ、星」

「ん？おはよう、木下」

学校に行く途中に木下に会ったので、一緒に行くことになった
校門のところ、クラスメイトの姿が見えた

吉井に西村先生？……………変わった組み合わせだな

「どっしたのじゃ？」

「いや……………吉井と西村先生が一緒だから不思議だなんて思って」

いつもは逃げると追いかけるの二人が一緒にいたら不思議に思う
さらに、吉井が朝からいる時点でも不思議だ……いつもは遅刻ギ
リギリなのに

「明久は観察処分者としての仕事をしているようじゃの」

「観察処分者としての仕事？……だから、西村先生がいるんだ」

召喚フィールドを出しているのだから雑用をさせているのかな？

観察処分者の召喚獣は物に触れられるし……教師の雑用をさせら
れるが

召喚獣つて以外に力があるから吉井の点数でも力は人の数倍はある
からね

「あのままならHRホームルームが始まるまで

やるじゃろうから、先に教室に向かうかの」

「そうだね」

先に教室へと向かった………

………

………

…

「工藤」

「はい」

「久保」

「はい」

吉井がチャイムと同時に入って来た
本々ルム
HRが始まるギリギリまで雑用をやったみたいだね

「近藤」

「はい」

「斎藤」

「はい」

今日は平和だな。こんな日が続……………

「坂本」

「……………明久がラブレターを貰ったようだ」

『殺せええっ！』

突如、平和が崩された

「ゆ、雄二！いきなりなんてこと言い出すのさ！」

坂本は小声で言っているのにクラスのほとんどが聞き逃さなかった
みたいだ

「どういうことだ！？吉井がそんな物を貰うなんて！」

「それなら俺達だって貰ってもおかしくないはずだ！自分の席の近くを探してみる！」

見つからないと思う

「ダメだ！腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない！」

教室がカビ臭くなるので早く捨ててほしい

「もっとよく探せ！」

「……出てきたっ！未開封のパンだ！」

何を探しているんだ？しかも全部パンだし
未開封でも賞味期限は切れていると思うからそれも捨ててください
皆は吉井に妬みや嫉妬の視線を送っている

「お前ら！静かにしろ！」

西村先生の一喝で教室は静かになった

「それでは出欠確認を続けるぞ、手塚」

「吉井クロス」

「藤堂」

「吉井コロス」

「戸沢」

「吉井コロス」

返事が恐ろしいことになっている

「皆落ち着くんだ！なぜだか返事が『吉井コロス』に変わっているよ！」

「吉井、静かにしろ！」

「先生、ここで注意すべき相手は僕じゃないでしょ！？
このままだとクラスの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！」

「新田」

西村先生が吉井の発言を無視した

………西村先生、だんだんとFクラスに染まっていますか？

「吉井コロス」

再び

「布田」

「吉井マジ殺す」

「根岸」

「吉井ブチ殺す」

後半二つはランクアップしていた

「よし、遅刻欠席なしだな

今日も一日勉強に励むように」

「待つて先生！行かないで！可愛い生徒を見殺しにしないで！」

吉井が必死になって西村先生を止める

「吉井、間違えるな」

先生は出る前に何かを告げようとしている、間違いのことか？

「お前は不細工だ」

とても先生の言葉とは思えない

「不細工とは言われるとは思わなかったよバカ！」

「授業は真面目に受けるように」

「先生待つて！せんせーい！」

吉井の叫びも空しく、西村先生は教室を出て行く……………逃げた？

「アキ、ちよ〜つと話を聞かせてもらえる？」

「あ、あはは……美波、顔が怖いよ」

「手紙を貰ったの？誰からなの？どんな手紙なの？」

たしかに好きな人がラブレターを貰ったら気になるよね

「あー、えつと、そのー」

吉井が誤魔化すためにいろいろと考えている、何とか手紙を渡さないための考えかな？

島田さんも気になってるだけだからそんなに怒って……

「いいからおとなしく指の骨を
じゃなくて、手紙を見
せなさい！」

訂正、島田さんはすごく怒っています

「あの、吉井君」

次に聞いたのは姫路さん

「その……できれば、ですけど……私にも手紙を見せて欲しいです
……」

姫路さんも吉井の手紙が気になるみたいだな

「その……『じゅん』」

「でも、でも……」

姫路さんはそれでも食い下がる

姫路さんは島田さんと違って謙……

「いくら姫路さんの頼みでも、コレばかりは」

「でも、私は吉井君に酷いことをしたくないんです！」

訂正、姫路さんは吉井に関する事では積極的である

「ちょっと待って！姫路さんまで僕に暴力を加えることが前提なの
！？」

姫路さんもFクラスの一員に相応しくなっている

「皆、ちょっと落ち着け」

そんな中、坂本が教卓を叩き静かにさせる

「今問題なのは明久の手紙を見ることじゃない」

坂本が起こしたんだろ

だが、吉井のピンチを救ったことに………

「問題は、明久をどうグロテスクに殺すかだ」

救ってない！？殺すことが前提になっている！？むしろ追い込んで
いるよ！？

「前提条件が間違っているんだよ畜生！」

吉井が荷物を持って教室から出て行く

「逃がすなあっ！追撃退を組織しろ！」

「手紙を奪え！吉井を殺せ！」

「サーチ&デス！」

「そこはせめてデストロイで！」

Fクラスの面々が教室から出て行き、教室に残ったのは私と木下の二人だけだ

「……………どうする？」

「先生に何と説明をすれば良いのじゃ……………」

「最初は福原先生だっけ？」

「うむ」

確か元Fクラスの担任だった人だ

キーンコーンカーンコーン

「みなさん、おは……………おや？他の人達はどうしましたか？」

「吉井を追いかけています」

嘘は言いたくないので正直に話す

「そうですか……………では、教科書を開いてください」

先生は気にする様子もなく授業を始める

流石は元Fクラスの担当だった先生だ、当り前のようにやっているのがすごい

しばらくすると土屋が戻って来た

「おや、土屋君

今まで何をしていたのですか？」

「……………授業に遅れました（ペコリ）」

「そうですか……………わかりました、自分の席に戻ってください」

土屋が戻って来たので吉井たちのことで少し聞いてみることにした

「ムツツリーニよ、明久はどうしたのじゃ？」

「……………交渉成立」

「???何の交渉？」

「……………企業秘密」

「……………」

それ以上は聞かないことにした
休み時間になったのに戻ってこないのだから吉井たちを探すことにした
とりあえず、近くの屋上の階段で……………発見

「……………何この状況？」

吉井の前に坂本と姫路さんが立っている

「……………雄二、何をやっているのじゃ？」

「ん？星に秀吉じゃねえか、今明久と勝負をしているところなんだ
よ」

「雄二、勝負だ！」

なんで、吉井と坂本は上着を脱いでいるの？姫路さん持ってるし

「……………お前、バカだろう」

「へ？」

「……………どいつこと？」

「あ、あの、手紙のポケットに入っている
みたいなんですけど……………見ちゃってもいいんですか……………？」

姫路さんが吉井の上着から封筒を出す

「だ、ダメだよッ！」

戦わないでそれを見るのは反則だよ！」

「お前がバカなだけだろうが！
やれ、姫路！その手紙を始末するんだ！」

姫路さんは手紙を手にして戸惑っていた

「姫路さん」

「えっ！？あ、はい、なんですか？」

「僕にはわかってるよ、優しい姫路さんは手紙に込められた人の気持

持ちを
踏みいじることなんてできないってこと、だから、おとなしく
手紙を『細切れにするんだ！』って、違っつ！そうじゃない
！」

「秀吉はともかく星も声真似が出来たんだな」

「最近、木下に教えてもらえて少しずつ出来るようになった」

「星は物覚えがいいからの、上達が早いのじゃ」

「三人とも、卑怯だぞ！」

僕の声を真似して、まるで僕の台詞みたいにつなぐのは反則だ！」

「はいっ！わかりました！（ビリビリビリ）」

「あああああつ！そんなに丁寧に破かなくてもいいよね！
それじゃあもう絶対に読めないよね！？返してっ！」

僕の幸せな未来と大切なラブレターと十行前の台詞を返してえっ

「！」

手紙はすでに原型を留めておらず、紙クズになった

「まさか、本当に姫路が破るとは思わなかった……………すまん、明久」

坂本は紙クズを集めている

「せめてものわびだ」

流石に罪悪感があつたようだ、吉井の為に紙クズを集めて……………

「ありがとう、雄二」

最後の可能性にかけて、この紙クズをつなぎ合わせて」

「未練を断つてやる」

シュボツ

メラメラメラ……………

すべてを燃やした

「つてうそおっ！ここまでやった拳句、容赦なく燃やすの！？」

「明久、お前は知らないだろうがな」

「なに！？なんでもいいから早く水を持って来て！」

急いで水を持ってこないと

坂本は、きつと吉井を慰めるんだよね？

「俺はお前の幸せが大嫌いなんだよ」

最低だ！

「知ってるよバカ！ちくしょー！」

知ってたの！？さて、急いで水を持ってこないと

戻って来た時には、ボロボロになった吉井がいた

第7話（後書き）

ラブレターの話をお忘れていましたので時間がかかりました
次回から二巻に入りますので、よろしく

第8話（前書き）

やっと、原作第2巻突入です

第8話

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい

『あなたが今欲しいものはなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど、お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良
いかもしれませんね
写真館とかも候補になり得ると覚えておきます

96

土屋康太の答え

『Hな本（訂正） 成人向けの写真集』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょわか

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます

風見星の答え

『常識』

教師のコメント

.....がんばってください

（side星）

「.....どうだい、何とかなりそうかい？」

「難しいですね.....多少の修正はできますが、完全には直せませんね」

私は今学園長室にいる

今日は各学年、明日から始まる清涼祭に向けての準備をしている
態々朝から呼ばなくても良いのに

「そうかい.....あなたの方は？」

「いちよ完成はしていますが………あんまり期待しないでくださいよ？」

完成しているとは清涼祭のペアで参加する召喚大会の商品である優勝者には『白金の腕輪』を準優勝者には『黒金の腕輪』が贈られる予定で

黒金の腕輪に関しては私が作り、白金の腕輪は学園長が作った………欠陥品だけど

「完成しているならいいさね」

「ただ、調整をしたいので渡すのは明日になりますか？」

「別にいいよ

清涼祭に間に合えばいいからね

そつえば、あんたのクラスは何をやるんだい？」

「私のクラスですか？まだ何も決めていませんね」

「そつなのかい？………まったくあのクソガキどもめ」

学園長にとってFクラスはストレスの原因みたいだ
なんせ、Fクラス“だけ”まだ学園祭の出し物が決まっていないの
だから

「最近竹原の動きが怪しいっていうのに」

竹原？竹原ってたしか………

「教頭先生でしたよね？何かあったんですか？」

「ああ、アイツがこそこそ動き回っているんだよ
たぶん、あたしを学園長の座から降ろそうとしているんだと思う
けどね」

学園長の座から降ろす！？何故だろ、教頭先生が学園長に勝つのは
無理な気がする

「たぶん、召喚大会にも何か仕掛けるハズさね」

「なら、私が出ましようか？

私なら優勝しても問題はないと思いますが？」

「そうだね……………あんたが優勝しても問題はないさね

あと、もう1組何か欲しいさね、何か良い案はないかい？」

「良い案ですか？うーん……………」

白金の腕輪の内1つは点数が低くないと発動しない上に爆発する可
能性がある

つまりFクラスの誰かにしないといけない、ん……………いた、と
びきりの奴が

「……………何か思いついたのかい？」

「はい……………吉井と坂本の二人ならと思って」

「吉井に坂本？あのバカと元神童をかい？……………」

学園長は少し考える仕草をとる

「確かに良い考えだね
だけど、どう召喚大会に参加させるかが問題だ、そこはどうする
つもりだい？」

「そうですね……予想ですが教室の改修ですかね？」

昨日島田さんに姫路さんが転校するかもしれないと言っていた
その内の一つには教室の改修が入っていると思う
何せFクラスの設備は今“みかん箱”と“ござ”だからね

「なるほどね、確かにそれを条件にしたいいなね
設備があそこまで酷いんだ、そろそろ言いに来ると思っていたさ
だけど、卓袱台と座布団から落ちると思ってもいなかったから
ね」

誰もがそうは思う

「ん？もうこんな時間かい」

学園長が言うので時間を見ると
あと5分ロングホームルームでいつもより長いLHRが始まってしまっ

「すみませんが学園長
もうすぐ、授業が始まるので失礼します」

「あいよ」

私は学園長室を出た
さて、早く教室に……………？

近くの窓から外を見るとそこには

「プレイボール！」

野球をしているFクラスがいた

……………何やってんだ？時間もないから早く教室に行かなきゃ

……………

……………

……………

…

さて、教室に着いた……………誰がいるかな？なんとなく予想はつくけど

ガラガラガラガラ

教室にいたのは、姫路さん、島田さん、木下の三人だけ
予想通りだけど……………何でみんな野球をするかな？
開始5分前だよ？それなのに野球をやるって……………

「星よ、どうしたのじゃ？」

入って来たおとたん、呆れた顔になったのじゃ？」

「気にしないで」

普通に考えて呆れるって！

「風見君、おはようございます」

「風見、おはよう」

「二人ともおはよう」

キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り、少しすると西村先生がやって来た

「では、今から……………他の奴らはどうした？」

「校庭で野球をしています」

西村先生がクラスを見て呆れたが

質問に答えても呆れた顔……………じゃない！あれは怒ってる顔だ！

「少し待ってる、今連れてくる」

西村先生が教室を出て1分も経たない内に……………

「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか！」

速いな……………

真っ直ぐに吉井のところに向かっているな

「吉井！貴様がサボリの主犯か！」

「ち、違います！どうしていつも僕を目の仇にするんですか！？」

西村先生と同じ速度で走っている吉井もすごいな

「雄二です！クラス代表の坂本雄二が野球を提案したんです！」

……………毎回思うが、すぐ友達を売るね

「違う！今は球種やコースを求めているんじゃない！
しかも、それをやったら単に僕が怒られるだけだよね！？」

吉井は逃げながら坂本に何か考えがないか聞いたと思うが
坂本は吉井に困をさせようとしているのかな？

……………あの二人は本当に友達であるのかわからない

「全員教室に戻れ！この時期にもなってもまだ
出し物が決まっていけないなんて、うちのFクラスだけだぞ！」

西村先生の心の叫びが校庭に響いた……………

……………

……………

…

「さて、そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を
決めなくちゃいけない時期が来たんだが」

野球が中断されて、みんなが戻ってきて

今、清涼祭の出し物を決める為に坂本が話している

「とりあえず、行事進行並びに実行委員として
誰かを任命する、そいつに全権を委ねるので……………後は任せた」

仕事を丸投げ!?

坂本……………めんどくさいからと言って、丸投げはダメだろ

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか?」

「え?ウチがやるの?うん……………」

ウチは召喚大会に出るから、ちよっと困るかな」

召喚大会に出るって言ってたからね

実行委員やりながら召喚大会に出るのはキツイからね

「雄二、実行委員なら

美波より姫路さんの方が適任じゃないの?」

「え?私ですか?」

姫路さんが……………想像がつかない、それに何か似合わない気がする

「姫路には無理だな

多分全員の意見を丁寧に聞いているうちにタイムアップになる」

「確かにそうだね」

坂本とは意見が違うが同意

「ウチは召喚大会に出るって言うのに」

「なら、サポートとして

副実行委員を選出しよう、それなら良いだろ？」

「ん〜……そうね

その副実行委員次第でやってもいいけど……」

「そうか、では、まず皆に副実行委員の候補を挙げてもらう

その中から島田が二人を選んで決選投票をしたらいいだろう……

…皆もいいな」

教室内からちらほらと推薦の声が聞こえてきた

『吉井が適任だと思う』

『やはり坂本がやるべきじゃないか？』

『姫路さんと結婚したい』

『ここは須川にやってもらった方が』

今、姫路さんにラブコールを送ったのは誰だ！

「よし、じゃあ島田

今挙がった連中から二人を選んでくれ」

「そうね〜、それじゃ……」

ある程度候補の名前が挙がったところで島田さんが黒板に名前を書き始めた

ん〜……予想だと吉井と坂本かな？二人とも行動力はあるし

『候補？……吉井』

一人目は吉井だ、二人目は坂本か？

『候補？……明久』

……おかしいな、目が疲れているのかな？候補？、候補？も同じ人物なハズなのに

「さて、この二人のどちらが良いのか、選んでくれ」

「ねえ雄二、明らかに美波の候補の挙げ方はおかしいと思わない？」

確かに

『どつする？どつちが良いと思う？』

『そうだなあ……、どちらもクズに変わりないんだが……』

「こらあつ！真面目に悩んでいるフリをするんじゃない！」

あと、平然とクラスメイトをクズ呼ばわりするなんて、君らは人間のクズだ！」

それはFクラスがそういう人たちの集まりだからしかたがない

「んじゃ、あとは任せたぞ、ふあ〜……」

坂本はやることをやるとぐったりと机に寝た

「ウチは行事進行をやるから、アキは板書をお願いね」

「ん、了解」

「それじゃ、ちゃっちゃと決めるわよ

クラスの出し物でやりたいものがあれば挙手してもらえる？」

学園祭か……

最初は参考に全員の話聞いてから手を挙げよ

「はい、土屋」

「……………（スクツ）」

最初は土屋だ

いったいどんな出し物を……………

「……………写真館」

最初から犯罪臭！？

「……………土屋の言う写真館って、かなり危険な予感がするんだけど

アキ、一応意見だから黒板に書いてもらえる？」

「あいよー！」

最初から犯罪臭が漂っているが大丈夫かな？

【候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』】

吉井のネーミングセンスはどうなっているんだろ？
考えている途中に次の候補が書かれていた

【候補？ ウエディング喫茶『人生の墓場』】

.....

「さて、他に意見は はい、須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

「中華喫茶？チャイナドレスでも着せようっていつの？」

「いや、違う」

俺の提案する中華喫茶は本格的な..... 飲茶を.....
文化に対して..... ヨーロピアン文化による.....」

おお、須川が珍しく熱く語っている！が全然わからない！

「アキ、それじゃ

須川の意見も黒板に書いてくれる？」

「あ、うん」

吉井が戸惑っている

たぶん私と一緒に話がわかってないんだろ

「どづしたの？早く書いてよ」

「りよ、了解」

【候補？ 中華喫茶『ヨーロッパ』】

……………わかった

吉井は頭に残っている単語で書いているな

ガラガラガラガラ

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

西村先生が戻って来た

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです」

西村先生は黒板に視線を向ける

【候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補？ ウエディング喫茶『人生の墓場』】

【候補？ 中華喫茶『ヨーロッパ』】

「……………補習の時間を倍にした方が良いかもしれんな」

ロングホームルーム

LHRよりも呆れた顔になっていた

「せ、先生！それは違うんです！」

『そうです！それは吉井が勝手に書いたんです！』

『僕らがバカなわけじゃありません!』

皆が必死になって抵抗しながら、吉井を売っている

「馬鹿者! みつともない言い訳をするな!」

西村先生の一喝で教室が静かになる

流石は教師の鏡だ、生徒が友達を売っているのが許せないのだろう

「先生は、バカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言っているんだ!」

教師の鏡が今………砕かれた、私の感動を返してほしい

「まったくお前たちは………少しは真面目にやったらどうだ
稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういうった気持ち
ちすらないのか?」

「え? それっていいんですか?」

「ああ、学園長が特別に出してくれた」

たぶん、黒金の腕輪の開発に対しての礼かな?

『そうか! その手があったか!』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな!』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ!』

「み、皆さんっ！頑張りましょう！」

姫路さんが率先して動いている

すると、皆がそれぞれ意見を言い始め全然まとまらない

「はいはい！ちょっと静かにして！」

島田が注意しても、効果はなかった

皆が好きなことを言い始めていき、教室が騒がしくなる

「もうっ、とにかく静かにして

決まりそうにないから、店はさっき拳がった候補の中から選ぶか

らね！」

島田さんがそう言うのと今度はブーイングが起きた

「ほらっ！ブーブー言わないの！」

この三つの中から一つだけ選んで手を挙げること！いいわね！」

我がFクラスの出し物は多数決の結果

【候補？ 中華喫茶『ヨーロッパアン』】に決定した

厨房班とホール班はそれぞれ

厨房班：須川、土屋、その他大勢

ホール班：姫路さん、島田さん、木下、吉井、私、状況により追加する

になっている

はあー……うまくいかな？………学園祭

第9話

問 以下の問いに答えなさい

『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『リトアニア エストニア ラトビア』

風見星の答え

『ラトビア リトアニア エストニア』

教師のコメント
そのとおりです

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります

吉井明久の答え

『香川 徳島 愛媛 高知』

教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう

〈side 星〉

「二人とも、ちょっといい？」

帰りのHRも^{ホームルーム}終わり放課後

私と吉井は帰ろうとしたところで、島田さんに呼び止められた

「ん？何か用？」

「どうしたの、島田さん？」

「用って言うか、相談なんだけど」

相談とは、多分姫路さんの転校の話だと思っ

「相談？僕で良ければ聞かせてもらっけど」

「うん、ありがとう」

多分アキが言うのが一番だと思っただけど　　その
やっぱり坂本をなんとか学園祭に引っ張り出せないかな？」

坂本がいないと喫茶店の成功が不可欠とみただね

「うん、それは難しいなあ……………」

さっきも言ったけど、雄二は興味の無い事には徹底的に無関心だからね」

「でも、アキが頼めばきつと動いてくれるよね？」

島田さんが吉井に期待したような眼差しで見ている

「え？別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらないと思うけど」

「確かに、吉井が頼んだからって坂本が返事をするとは思えないけど？」

「うん、そんなことはない

きつとアキの頼みなら引き受けてくれるはず、だって

「そりゃ確かに、よくつるんでいるけど、だからといって別に」

「だってアンタたち、愛し合っているんでしょう？」

衝撃的な発言が！

「もう僕お婿にいけないっ！」

吉井が今の発言に対して顔を背けて泣いている

「誰が雄二なんかと！」

「だったら僕は、断然秀吉や星の方がいいよ！」

まさかの告白！？てか、私にも！？

「……………あ、明久？」

偶然近くにいた木下の動きが止まる、なんてタイミングが悪いのだから

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが

そんなことを言われても、ワシには色々と事情というものが……………」

「ひ、秀吉！違うんだ！」

もの凄い誤解だよ！さっきのはただの言葉のアヤで！」

吉井が否定するが木下は顔を赤くして俯いている……………私を見たのは気のせいだろ

「……………吉井は変態」

「誤解だよ！あと、ストレートに言わないで！傷つくから！」

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

「え？あ、うん

そういつことになるかな」

「なんとかできないの？」

「このままじゃ喫茶店が失敗に終わるような……………」

島田さんが沈んだ顔になる

この喫茶店が成功しなければ設備の向上が難しいのだから

「ところで、お主らは何の話をしておるのじゃ？」

そんなに思いつめた顔するとは、随分と深刻な話のようじゃが」

まだ顔が赤い木下が聞いてきた

「深刻ってほどじゃないんだけど、喫茶店の経営とクラス設備の話
で」

「アキ、そうじゃないの

本当に深刻な話なのよ……………」

「島田さん、まだ話してなかったの？」

「え？どういうこと？」

「実は、瑞希なんだけど」

「姫路さん？姫路さんがどうかしたの？」

「あの子、転校するかもしれないの」

「ほえ？」

吉井が間抜けな声を出す

「姫路が転校じゃと！？どういふことなのじゃ？」

木下は驚いた声を出した

その横で吉井の頭には煙が……………って、ちょっと！

「吉井の頭から煙が出てるよ！」

「む、マズイ

明久が処理に落ちかけとるぞ」

「このバカ！不測の事態に弱いんだから！」

「明久、目を覚ますのじゃ！」

木下が吉井の肩を揺らして何とか意識を戻させる

「吉井、目が覚めた？」

「二人とも……………」

「モヒカンになった僕でも、好きでいてくれるかい……………？」

……………彼はいったいどんな処理をしたのだろうか？

「……………どういふ処理をしたら、瑞希の転校から……………いつ反応が得られるのかしら？」

「ある意味、希有な才能かもしれんのだ」

「美波！姫路さんが転校って、どういふことさー！」

吉井がやっと正気に戻った

「どうもこうも、そのままの意味

このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

「このままだと………?」

吉井は言葉の意味がよくわかってないみたいだ

「島田よ、その瑞希の転校と

さっきの話が全然つながらんのが」

木下もよくわかっていないみたいだ

「そうでもないよ

姫路さんの転校の理由は『Fクラス的环境』だから」

「ってことは、転校は両親の仕事の都合とかじゃなくて

「そうね、純粋に設備の問題ってことになるわ」

「Fクラスの設備と環境が悪いのだから転校の可能性はもともとあった」

「それに瑞希は、身体も弱いから………」

「そうだよね、それが一番マズイよね………」

「なるほどのう

じゃから喫茶店を成功させ、設備を向上させたいのじゃな」

「うん、瑞希も抵抗して『召喚大会で優勝して両親にFクラスを見直してもらおう』」

とか考えているみたいだけど、やっぱり設備をどうにかしないと……」

一番の問題は姫路さんの健康である、それには喫茶店が成功しないといけない

「……アキはその……瑞希が転校したりとか、嫌だよ……?」

「もちろん嫌に決まっている！」

姫路さんに限らず、それが美波や秀吉、星であっても！」

吉井が男らしい台詞を言う

転校したばかりの私にも心配してくれたのは嬉しいな

「そっか……うん、アンタはそっだよな！」

島田さんは嬉しそうに頷いた

坂本にも同じことは言えるよね？

「そういうことなら、なんとしても雄二を焚き付けてやるさ！」

「そうじゃな、ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙っておれん」

「それじゃ、まずは雄二に連絡を取らないとね」

吉井が携帯をだし坂本に電話する

教室にはまだ鞆があるため、坂本はまだ学校にいる

「あ、雄二？ちょっと話が

え？

雄二、今何しているの？……………雄二！？もしもし！もしもし！

「坂本はなんて言ってた？」

「えっと、『見つかった』とか『鞆を頼む』とか言っていた」

彼らはいったいどんな会話をしたんだ

「……………なにそれ？」

島田さんが呆れるのも無理はない

「大方、霧島から逃げているのじゃろう

アレはああ見えて異性には滅法弱いからの」

坂本はAクラスの試召戦争に負けてから霧島さんに追いかけられている

「いや、これはチャンスだ」

「え、どういうこと？」

「雄二を喫茶店に引つ張り出すには丁度いい状況なんだよ
うん、ちよっと三人とも協力してくれるかな？」

「それはいいけど……………坂本の居場所はわかっているの？」

「大丈夫

相手の考えが読めるのは、なにも雄二だけじゃない」

「何か考えがあるようじゃな」

「まあね」

吉井はニヤリと笑って教室をあとにした

しばらくすると……………

P i P i P i P i

島田さんの携帯が鳴った

「きたみたね……………もしもし？坂本？」

『島田か、一体何の真似だ』

吉井は坂本にうまく接触できたみたいだ、坂本は声が大きいせいかな
会話が聞こえる

……………連絡が来るまでに木下さんや西村先生の声が聞こえたのは気の
せいだよな？

「ちょっと待って、今変わるから」

『変わる？誰と おい、もしもし？』

「（木下がんばってね）」

「残りの二つは難しいのう」

二つ目は学園長の方に頼んだからなんとか………る？難しいな
………

「そうでもないさ、三つ目の方は既に姫路と島田で対策を練っているんだらう？」

「この前、瑞希に頼まれちゃったからね『どうしても転校なんてしたくないから

協力して下さい』って、召喚大会なんて見世物にされるだけなんだ
けみたいで

嫌だったけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね？」

「なら私も出るか？戦力は多い方がいいから」

学園長から言われているので参加しなければ怒られてしまう

「そうだな、星もパートナーを見つけて

一応エントリーしてくれ、勝ち残れば喫茶店の宣伝にもなる」

これで二つの問題は解決した、残る問題は………

「で、坂本

それはそうと、二つ目の問題はどつする？」

「どつするも何も、学園長に直訴したらいいだけだろ？いくら方針
とは言え

生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然
の権利だ」

「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

「そうだな、学園長室に乗り込むか」

三人は学園祭の準備計画でも考えておいてくれ

それと、鉄人を見かけたら俺たちは帰ったと言っておいてくれ」

どうやらあの声は、気のせいではなかったようだ

「うむ、了解じゃ」

鉄人と、ついでに霧島翔子を見かけたらそう伝えておこう」

霧島さんの名前が出た瞬間、坂本が言葉に詰まった

坂本は何で霧島さんが苦手なんだろう？何かされている分けじゃないのに

「アキ、しっかりやってきなさいよ」

「二人とも、学園長に失礼が無いようにしろよ」

「オツケー、任せといてよ」

吉井と坂本は学園長室を目指して行った

「それじゃ、ウチらもがんばりましょ」

「うむ、ワシも全力を尽くすのじゃ」

「喫茶店を成功させようね」

しばらく学園祭の準備について話したあと解散した

第10話(前書き)

ついに第10話!

今回はオリキャラが出ます

第10話

学園祭の出し物を決める為アンケートにご協力下さい

『喫茶店を経営する場合、制服はどのようなものが良いですか？』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね

コストもかからないですし、良い考えです

土屋康太の答え

『スカートは膝上15cm、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも

品を保つ、色は白を基調とした薄い青が望ましい、トレイは輝く銀で照り返しが得

られるくらいのもを用意し裏には口ボを入れる、靴は5cm程度のヒールを』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと思っています

風見星の答え

『メイド服』

教師のコメント

君からそのような答えが出るとは思いませんでした

（side 星）

「ただいま」

私は解散した後すぐに家に帰った

「おかえりなさい、兄さん」

「兄貴、おかえり」

出迎えたのは二人の女の子、私の妹で双子である
何故か周りからは三姉妹と呼ばれている……おかしいな、私は男
なのに

ちなみに両親は会社先で泊ることが多いので殆ど家にいない

最初に出迎えたのは双子の妹である風見空
控えめな性格で髪が腰のあたりまであり、髪の長さが霧島さんと似
ている

真面目でいつも私の家事を手伝ってくれる

次に出迎えたのは双子の姉である風見月

強気な性格で髪が私と同じで肩までしか伸ばしていない
調子に乗って失敗していることがしばしば……

ちなみに二人の仲は良く、身長は私より少し低い程度
中学三年なのにスタイルは高校生並である……島田さんが見たら泣
きそうだな

髪の色は私と同じ黄色であり、二人は一卵性のため顔が似ている

「兄さん、どうしたんですか？疲れた顔になって……」

「兄貴はまた告白されたんじゃないの？」

「ええ！兄さん本当ですか！？」

月が空を騙すのはいつものこと

「告白されたよ……男に」

「「……………」」

場の空気が重たくなった、最近になって男子が私に告白することが増えてきた

「ああ…………えつと…………ゴメン」

素直に謝っただけでもいいか

「謝ったから許すけど、あんまりふざけるないでよ？」

私は仕事があるから奥の部屋に行くから、ご飯ができたら呼んで」

「わかった」

「がんばってください」

さて、仕事、仕事、黒金の腕輪の最終調整をしなきゃ

…………皆、忘れているかもしれないけど、私は技術者だよ？

一応、確認のために言っておく

「やっど…………」

黒金の腕輪を…………

明日は、学園長に渡さないといけないしね、早く仕上げたいんだよ
早速、取りかかるとしよう……………

…………

…………

…

それから作業すること数時間

「終わった〜」

黒金の腕輪の調整は終わった

あとは、明日の召喚大会の準備だね

さてと……………

私は家で一番大きい実験室に移動した

実験室の中は中央に大きい場所があり、周りに荷物などがある

「さて、始めますか……………」

私はパソコンを操作して実験室に召喚フィールドを発生させた

「試験召喚獣……………試験^{サモン}召喚」

私のデフォルメされた召喚獣が目の前に現れた

服は狩人が身に纏う鎧に手にはボウガンが握られている

遠距離戦の召喚獣である

ここの実験室は召喚獣のテスト用のフィールドであり

私がアメリカから来て一週間は、この実験室で召喚獣の操作をして報告していた

だから召喚獣の扱いは慣れている

【テストを開始します】

パソコンの画面に文字が表示された
テストと言っても学園長が出している課題をクリアするだけだけどね
元々このシステムは文月学園の召喚システムとなんら変わりはない

【それでは始めますよろしいですか？Yes / No】

Yesをクリックして実験を始める

『CPU A & CPU B
英語W 264点 & 249点
』

CPUの召喚獣が現れた

今回は召喚獣の戦いのデータだ

私の召喚獣のデータは……………

『Fクラス 風見星

英語W 362点
』

英語W以外は点数がないので明日はすぐに補充試験を受けようと思
います

相手の召喚獣は剣を持った召喚獣と槍を持った召喚獣である
まずは、剣の方の召喚獣に攻撃する

最初に二体の足元に向けて矢を放ち威嚇する
すると、近こつとした二体は止まり、剣を持った召喚獣に矢を放つ
一発では倒せなかったが三発目を討った時に点数がなくなり消滅した
もう一体の方は槍を突き出すがそれを横に移動し避ける

その隙に伸びきった腕に矢を放ち、点数を減らすと同時に武器が落ちた

そして零距离で放って倒すことはできた

【〜〜クリア〜〜】

パソコンの画面に表示されたので今日の課題は終了だ

【データを保存しますか？Yes / No】

当然Yesを押す、明日になったら黒金の腕輪と一緒に学園長に渡す予定である

「ご飯ができたよ」

月の呼ぶ声が聞こえた

作業も区切りがよかったのでそのまま食卓に向かう

食卓にはオムライスやサラダ、スープなどが並んでいる

空は日本に来てからは何かと日本食を勉強しており、今日はオムライスである

三人で手を合わせ、まずはオムライスから食べる

「うまいな」

「本当ですか！」

「うめ〜〜！空、おかわり」

「早っ！」

「ちょっと待ってて……………はい」

「サンキュー」

月はその後三回ほどおかわりしていた……………胃袋がどうなっているのか知りたい

「そういえば兄さんの学校は明日、学園祭があるんですよね？」

食事を終えた後、空が質問してきた

「あるけど……………行きたいの？」

「はい、私行ってみたいです

日本の学園祭がどんなものか気になります」

「オレも行きたいぜ」

二人とも行きたいのか目が輝いて見える

だが行かせていいのか、Fクラスのメンバーが見たら何を言うか二人を行かせていいのか……………悩むな

「ん……………ダメ」

「……………どうして！」

行ったら絶対に悪影響が出てしまうと思う

二人の将来のためにも何としても行かせない

「あの学校はな……あー……何て言うか……」

どうやって誤魔化すか、んー……

「兄さん……ダメですか？」

空が涙目で見えるが……

「兄貴、ダメなのか？」

月まで、どうすれば……

「くっ！……ダメだ！絶対にダメ！」

私はそれだけを言うと食卓から出て自分の部屋に向かう

「あれだけ言えば……大丈夫か？」

あれだけ言えば来ないと思うが……

「今はとりあえず勉強だな」

私は鞆から教科書を取り出し勉強する

明日の補充試験で少しでも良い点数を出すために！

私はしばらく勉強してから寝た

side空

「なあ明日、行こうぜ」

月は明日の学園祭に行こうと言っている

「ダメだよ、兄さんが言ってたし」

兄さんが来るなって言うほどだから危険だよね？

「大丈夫だって」

根拠がわからない

「それに、おもしろい情報があるんだぜ」

そう言つて月が取りだしたのは一枚の紙……………何それ？

「兄貴の鞆から盗つた」

「何で勝手に盗つてんの！」

姉である月の行動に大変驚いた

「いいじゃねえかよ別に……………それよりここ見ろよ」

月が指を指したところを見る何々……………

「Fクラスの出し物【中華喫茶『ヨーロッパアン』】……………何これ？」

名前がわからない

「そこじゃなくて、ここだよ」

月が表紙の端の方に何か書かれている……………ここ、これは！

『ホール班：私』

「兄貴が接客やるみたいなんだよ」

「兄さんが接客！？」

あの、兄さんが接客……………見てみたい

「兄貴は多分恥ずかしいから来てほしくないだけじゃねえか？」

「そっか、兄さん恥ずかしい姿が見られなくなかったのか」

だから来てほしくなかったんだ

「こんな面白いの見に行かなきゃそんだけ」

「うん」

兄が接客してくれるなんて……

「空………鼻血出てるよ」

「ありがとう」

妄想したらつい鼻血が

「じゃあ明日行くことに決まりだな」

「うん、そうだね」

デジカメも用意しないと………

「よっしゃ行くぜー」

「オー！」

二人で学園祭に行く計画を立ててから寝た

兄が違つことに心配していたことにも気づかず

第10話（後書き）

どうでしたか？

オリキャラは主人公の妹で双子という設定です
次回から、清涼祭が始まります

第11話

以下の問いに答えなさい

『PKOとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希の答え

『Peace - Keeping Operations (平和維持活動)の略

国連の観告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動のこと』

風見星の答え

『Peace - Keeping Operationsとは平和維持活動の略である

国連の観告の元に、加盟各国によって行われる平和維持活動のことである』

教師のコメント

そうですね、豆知識ですが、United Nations Peacekeeping Operationsとも呼ばれたりします、余裕があれば覚えておくと良いでしょう

土屋康太の答え

『Pants Koshi-tsuki Oppaiの略

世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体のこと』

教師のコメント

君は世界の平和を何だと思っているのですか

吉井明久の答え

『パウエル・金本・岡田の略』

教師のコメント

それは世界の平和を守る人達です

〈side星〉

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

「二人とも酷いね」

清涼祭の初日の朝

私たちの教室は中華風の喫茶店に姿を変えている

「このテーブルなんて、パツ見は本物と区別がつかないよ」

「あ、それは木下君と星君が作ってくれたんですよ

どこからか奇麗なクロスを持ってきて。こつ手際よくテキパキと

姫路さんが私と木下を尊敬した目で見ている………少し照れる

演劇部から劇用のクロスを持ってきて箱にかけて立派なテーブルに見えるようにした

「見かけはそれなりに出来たけど」

「その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

クロスの下から見慣れた箱が現れる

「これを見たら店の評判はガタ落ちね」

「確かにこれを見たらイメージダウンするね」

「きつと大丈夫だよこんなところまで見ないだろうし

見たとしてもその人の胸の内にはまっておいてもらえるさ」

「そうですね、わざわざクロスを剥がしてアピールする人は来ませんよ、たぶん」

いるとしたら営業妨害だね

「室内の装飾も奇麗だし、これならうまくいくよね？」

最初と比べるとかなり綺麗なFクラスが出来ている

「……………飲茶も完璧」

「おわっ」

吉井の後ろから土屋が現れ、吉井が驚いていた
……………わざわざ後ろから声をかけなくてもいいと思う

「ムツツリーニ、厨房の方もオーケー？」

「……………味見用」

そう言って差し出したのは、木のお盆
その上にはティーセットと胡麻団子が載っている

「わぁ……………美味しそう……………」

「土屋、これウチらがたべちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

姫路さん、島田さん、木下の三人が胡麻団子に手を伸ばして勢いよく頬張る

「お、美味しいですー！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし」

「甘すぎないところも良いのう」

どうやら三人とも大絶賛のようである

「お茶も美味しいです、幸せ……………」

「本当ね……………」

姫路さんと島田さんは目がトロンとしているみたい

「胡麻団子食べるのは初めてだけどそんなに美味しいの？土屋、私も貰っていい？」

「……………」

「それじゃ、僕も貰おうかな」

残った二つは爪楊枝つまようじがなかったから手でつまんで食べた

「ふむふむ、表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ

甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても　んごパっ」

隣で吉井が変な声を出しているが気にせず食べてみる

表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ甘すぎず、辛すぎる味わいで

「その胡麻団子は姫路が作ったドサツ！」星が倒れておるぞー！」

「やばい、どうしよう!?!一般人が今のを口にしたらどうなるか……」

吉井たちの声は聞こえたが私はそこで意識を落とした……………

……………

……………

……………

…

目が覚めると知らない景色が見える

「ん〜……………ここは?」

おかしいなさっきまで学校にいたのにな
とりあえず辺りを歩いてみると川が見えた
川の向こうに岸があるので近くに行くことにした

「ん?星じゃねえか、何してるんだ?」

後ろから声が聞こえたので振り向くとそこに坂本がいた

「坂本こそ何してるの?」

私は向こうに行きたいんだけど?」

「ぶっ、何の問題も無い」

何の問題がないのだろ？

「あの川を渡ればいいんだろ？」

坂本が指をさしている方向を見ると、そこには老人がいてボートがある

なるほど、あの人から借りるんだね

私と坂本はその老人に向かって歩き出して……すぐついた

「渡るには六万が必要だよ」

「通行料が六万！？高すぎるよ！」

「六万だと？バカを言え、普通渡し賃は六文と相場が決まって

」

坂本の声が急に聞こえなくなったので隣を見ると坂本がいなくなっていた

すると急に視界が暗転し意識を落とした……

side 明久

「やばい、どうしよう！？一般人が今のを口にしたらどうなるかわからないよ！」

「落ち着くのじゃ、明久！」

くっ、よりもよって姫路さんの手作り胡麻団子を食べるなんて

「秀吉も気づいていたなら最初から教えてよ！」

「ワシじゃってさっき思いだしたのじゃ！」

「……………よれよりも、星」

「そうだった、どうしよう！星、起きてよ！」

僕は秀吉に星の心臓マッサージを頼んで必死に呼びかける

「……………こ…は？」

かすかに星の声は聞こえるが意識がない

「うーっす、戻って来たぞ！」

と、そんなところに雄二が戻ってきた

「あ、雄二ーちようどいいところに……………」

「ん？なんだ、美味そうじゃないか、どれどれ？」

そして躊躇いなく僕の食べかけのバイオ兵器を口に運ぶ

「……………たいした男じゃ」

「雄二、キミは今、最高に輝いてるよ」

「？お前らが何を言っているのかわからんが……………」

ふむふむ、表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ
甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても
んごぱっ

あ、なんか既視感^{デジャヴ}

「あー………雄二、とっても美味しかったよね？」

床に倒れ伏している雄二に対して一応言っておく

「ん？星じゃねえか、何してるんだ？」

「坂本こそ何してるの？」

私は向こうに行きたいんだけど？」

床に伏している雄二と星が会話をしている、どうやらまだ生きてい
るみたいだ

「ふっ、何の問題も無い」

はて？何の問題がないのさ？

「あの川を渡ればいいんだろう？」

それはきつと三途の川だ

「ゆ、雄二！その川はダメだ！渡ったらもどれなくなっちゃうー！」

まさかあの一口で致命傷だったなんて

姫路さんの手料理、相変わらず恐ろしいキレ味だ

しかも星は雄二の発言に頷いていたのでこちらも危険だ

「え？あれ？」

二人ともどうしたんですか？」

姫路さんがこちらの様子に気がついてしまった

「あ、ホントだ

二人とも、大丈夫？」

美波までトリップしてたのか

これは失敗していない方の胡麻団子はかなりイケるかもしれない

「大丈夫だよ、星は眠っているだけで雄二は足が攣っただけみたいだから

おい、せーい、ゆーじー、おきろー」

とりあえず、おどけた口調で雄二を起こす仕草を試してみる

ただし、手は必死に心臓マッサージをしながら、こうなると生死は五分五分だ

しかし、星に至ってはかなり危ない一個丸ごと食べたから一分九分
か……………！

「通行料が六万！？高すぎるよ！」

「六万だと？バカを言え、普通渡し賃は六文と相場が決まって

はっ！？」

雄二の蘇生はできた、あとは星だけだ

「雄二、足が攣ったんだよね？」

余計なことを言い出す前に畳み掛ける、今回はアイコンタクトの余裕がない

「足が攣った？バカを言うな！あれは明らかにあの団子の」

「（……………もう一つ食わせるぞ）」

「足が攣ったんだ、運動不足だからな」

雄二が頭の良い奴で本当に良かった

流石の僕でもクラスメイトを殺すのは忍びない

「（……………明久、いつかキサマを殺す）」

「（……………上等だ、殺られる前に殺ってやる）」

笑顔を張り付けて小声のやり取り、こんな僕らは仲良し二人組

「ふーん、坂本ってよく足が攣るのね？」

マズイな、昔と同じような状況を美波が怪しんでいる

「ほら、雄二って余計な脂肪がついてないでしょ？

そういう身体って、筋が攣りやすいんだよ

美波も胸がよく攣るからわかるとぐべあっ！」

「……………俺が手を下すまでもなかったな」

美波の拳を受けた僕に、雄二が哀れみの視線を送ってくる

なんだか最近こんなのはっかりだ……

「ん〜……ここは……教室？」

星がやっと蘇生した、よかった〜尊い命がまた一つ救われた

「おかしいな？胡麻団子を食べたところまで意識があつたのに……」

「星は食べた後すぐ寝たのじゃ！そうじゃの、明久？」

「うん、そうだよ」

いくら美味しいからって寝ちゃダメだよ」

「そうなの？……そうだったんだ、次からは気をつけるよ」

「うん、気をつけてね」

よし、星の方をなんとか誤魔化すことができた

「ところで、雄二はどこに言っておったのじゃ？」

秀吉がそれとなく話題をそらしてくれた

「ああ、ちょっと話し合いにな」

雄二にしては歯切れの悪い返事だ

実は学園長室で例の試験科目の指定をしてきたところだろ
フェアではないので正直に話さず適当にごまかしていた

「そうですね、それはお疲れさまでした」

「いやいや。気にするな」

それより、喫茶店はいつでもいけるな」

「バッチリじゃ」

「……………お茶と飲茶も大丈夫」

姫路さんの製の飲茶が混ざっていないか不安がある

「よし、少しの間」

喫茶店はムツツリー二に任せる、俺は明久と召喚大会の一回戦を
済ませてくる

ムツツリー二、大丈夫だな？」

「……………任せておけ」

そう言ってムツツリー二の肩を叩く

秀吉は星と一緒に出るみたいだからムツツリー二が喫茶店をやるこ
とになる

「あれ？あんなたちも召喚大会に出るの？」

美波が確認するように聞いてくる

「え？あ、うん、色々あってね」

学園長から『副賞のチケットの回収は誰にも話すな』と言われてい
るので

下手なことはいえない、けど、どうして話しちゃいけないんだろう？

「もしかして、商品が目的とか……………」

「うーん、一応そういうことになるかな」

白金の腕輪も商品だけど交換するのかな？

噂によると二体召喚と立会人になれる腕輪なんだよね

特別に欲しいわけじゃないけど、貰えるのなら貰っておきたい

「…………誰と行くつもり？」

「ほえ？」

美波の目が細くなった

「吉井君、私も知りたいです

誰と行くこうと思っていたんですか？」

気が付けば二人とも戦闘モードになっていた

「だ、誰と行くっていわれても……………」

困った、学園長に渡すだけなんだけど

でも、約束したから正直に言えないし……………」

「明久は俺と行くつもりだ」

答えに詰まっていると、雄二がフォローしてくれた

それを聞いて美波は目を丸くする、驚くのも無理はない

「え？坂本とペアチケットで『幸せになり』に行くの……？」

僕も驚いているよ、今知ったばかりなのだから

「（明久、堪えるんだ

事情を知られたら、ババアに約束を反故にされるぞ）」

僕が怒る前に、雄二から小声のメッセージが届く

不本意だけどこれも姫路さんの為、雄二も同性愛疑惑を我慢するみたいだし

「俺は何度も断っているんだが」

え？何？ここで裏切るの？

「アキ、アンタやっぱり、木下や風見より坂本の方が……」

「ちょっと待って！その『やっぱり』って言葉が凄く引つかかる！それと秀吉と星！秀吉は少しでも寂しそうな表情をしないでよ！星はその変態を見るような目をやめるんだ！」

まずいこのままでは間違った情報が流れてしまう

同性愛の似合う生徒ランキングがまた上がってしまう！

「吉井君、男の子なんですから

女の子にも興味を持った方が……」

「それができれば明久だって苦労してないさ」

「雄二、もっともらしく言わないで！
あと、全然フォローになってないから！」

コイツとは決着をつけねばなるまい

「っと、そろそろ時間だ、行くぞ明久」

「……………くっ！と、とにかく、誤解だからね！」

僕と雄二は召喚大会に向かう為に教室を後にした

第11話(後書き)

次回は召喚大会

第12話

問 以下の問いに答えなさい

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に

選んだのだが、調理を始めると問題が発生した

このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点

合金の例……ジュラルミン』

風見星の答え

『問題点……マグネシウムに炎をかけると、酸素と激しく反応するので危険である点

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です

合金なので鉄ではダメというひっかけ問題でしたが、ひっかかりませんでしたね

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払ってなかった事』

教師のコメント

そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（　すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても

（side 畢）

「いらっしやいませー！中華喫茶ヨーロッパンへようこそー！」

清涼祭が始まり私たちのFクラスにたくさんのお客さんが来ています。吉井と坂本、姫路さんと島田さんは召喚大会に出ている

召喚大会は四ブロックあり4人はDブロックで私と木下はBブロックである

トーナメントはDとA、CとBのブロックで分かれているので戦うとしたら決勝だ

ちなみにBブロックの試合はあと一時間当たりで始まる、その間……

……

「いらっしやいませ！ご注文は決まりましたか？」

「それじゃ胡麻団子を二つ下さい」

「はい、胡麻団子が二つですね？」

「あと、ウーロン茶も二つ下さい」

「ご注文は以上でよろしいですか？」

「はい、お願いします」

「少々お待ち下さい」

私はホールの仕事をやっている

それにしてもお客さん、胡麻団子を注文してるけど何で？

一言では言い表せないぐらいの味だったのに………

「……………三番席の完成」

「わかった」

土屋が三番席の胡麻団子が出来たので運んでおく

「お待たせしました、胡麻団子です」

三番席に胡麻団子を置き、仕事を続ける
そろそろ仕事にもなれてきた

ガラガラガラ

お客さんがきたようだ、出迎えないと……

「いらっしゃいませ！中華喫茶ヨーロッパマンへようこそ！」

「おう！さつさと席に案内しろ」

「これから、他のところにも行くから早くしてくれね？」

………今度のお客さんはかなり口が悪い人だ
日本で何ていうんだっけ？不良？チンピラ？………どっちでもいいや

「席に案内しますのでこちらへどうぞ」

二人を席に案内しておく、周りの人達に迷惑がかからない様に端っ
この方に……

「ご注文が決まりましたら呼んでください」

私は言い残した後、他の仕事をする

「しかし、この店ってキタねえよな？」

さっき入ってきたお客さんが急に言い出した

「ホントだよな、中華喫茶ヨーロッパンって……変じゃね？」

「だよな」

あいつら………！

文句を言っている奴に行こうとすると木下に止められた

「待つんじゃ」

「どうして？あいつらさっきから………！」

「ワシが明久と雄二を呼んでくるから少し待つんじゃ」

時間を見るとたしかにそろそろ試合が終わる時間帯だ

「………わかった、早く呼んできてね」

大人しく止めることにした

「ワシはすぐ行ってくるのじゃ」

木下はすぐに校庭の召喚大会に向かって走り出した

お客さ………もとい、チンピラはどんどん罵声を言うが我慢する

罵声がどんどん酷くなるが我慢する、木下が吉井と坂本を呼んでくるまで耐える

「マジできつたねえ机だな！これで食い物扱っていいのかよ！」

今度は机のクロスを剥がして文句を言いだした

『うわ……確かに酷いな……』

『クロスで誤魔化していたみたいね』

『学園祭とは言っても、一応食べ物のお店なのに……』

チンピラがまた罵声を言ったせいでお客さん達が嫌な顔になっていた
あゝ……！我慢の限界だ！

「まったく、責任者はいないのか！このクラスの代表ゴペツ！」

「私が代表の坂本雄二です

何かご不満な点でもございましたか？」

我慢の限界で攻撃しようとしたら、坂本が相手を殴り飛ばした
しかも言葉と動作が合っていない！流石の出来ごとに怒る気力もな
くなつた

「不安も何も、今連れが殴り飛ばされたんだが……」

殴られていないチンピラAはチンピラBが殴られていないことに驚
いている

「それは私のモットーの『パンチから始まる交渉術』に対する冒瀆
ですか？」

それは交渉相手を殴っている時点で交渉は決裂すると思う

「ふ、ふざけんなよこの野郎……！なにが交渉術ふぎゃあつ！」

「そして『キックでつなぐ交渉術』です
最後には『プロレス技で締める交渉術』が待っていますので」

蹴っている時点でもプロレス技で締めている時点でも交渉術じゃないよ！

「わ、わかった！こちらはこの夏川を交渉に出そう！
俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」

「ちよ、ちよっと待てや常村！
お前、俺を売ろうと言うのか！？」

……最近、私の周りではすぐ友達を売る人が多いと思う

「それで常夏コンビとやら、まだ交渉を続けるのか？」

あ、坂本が仮面を外した

さらに先輩方の（相手は一応3先生）の名前が略されている

「そうか、それなら」

大きく頷いた後、最初に殴り飛ばしたチンピラAの腰を抱え込む坂本

「おいっ！俺はもう何もしてないよな！？どうしてそんな大技をげぶるあつ！」

「これにて交渉は終了だ」

綺麗にバックドロップを決めて平然に立ち上がる坂本

……あの交渉術は二度と出さないでほしい

「お、覚えてるよっ！」

チンピラBがチンピラAを抱えて去っていく、これで問題の一つは片付いた

『流石にこれじゃ、食っていく気はしないな』

『折角美味しそうだったんだけどね』

『食ったら腹壊しそうだからなあ』

こちらの問題はまだ片付いていなかった
ガタリ、と音を立てて一人目が立つ

あれは……教頭先生？まさかあの二人、教頭先生と関係があったのか！

『店を変えるか』

『そうしようか』

「あ、お客さん！」

教頭先生が立ったことでどんどん他の人たちが席を立っていく

「失礼しました、こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていたのが、暫定的にこのような物を使ってしまいました、ですが、たった今

本物のテーブルが届きましたのでご安心下さい」

そんなお客さんに深々と頭を下げる坂本、その後ろには木下や他に男子数名が演劇用の大型テーブルを持っていた数は二個ほどしかない筈だけど……

「あれ？テーブルを入れ替えるの？」

そんな時、入口の方から女子の声が聞こえた

「あ、おかえり

美波に姫路さん、一回戦どうだった？」

「はいつ、なんとか勝ちました」

二人が帰ってきたみたいだ、そろそろ試合に行かなきゃいけないから交代することを言わないと……

「島田さんと姫路さん、一回戦お疲れ様」

「あ、風見君お疲れ様です」

「風見、あんた試合もうすぐじゃないの？」

「うん、だから二人にホールの交代を言いに来た」

「わかりました、頑張ってください」

「がんばりなさいよ」

二人から激励を貰い、木下を連れて召喚大会に向かう……………

……………

……………

…

時間になんとか間に合い試合の準備をする

「ワシらの最初の相手は…………… Dクラスじゃな」

「Dクラスか…………… 何とかなるんじゃない？」

補充試験も受けたので英語以外の点数も大丈夫だ
少し待っていると対戦相手の人がきた

「俺達が相手に…………… って、Fクラスの美少女コンビじゃないか
！」

…………… 美少女？

「美少女二人が相手なんて……………」

おかしい…………… ここにいるのは男二人なのに

「三回戦までは一般公開がありませんので、リラックスして全力を
だしてください」

立ち会いの先生は数学の木内先生、一回戦は数学だ

「俺たちは美少女相手でも優勝するぞー！」

「おー！」

対戦相手はなぜか盛り上がっている

「「サモン試獣召喚っ！」」

二人の呼び声で魔法陣が足元に出て召喚獣が現れる

『Dクラス	鈴木一郎	&	Dクラス	中野健太
数学	97点	&		86点

ん〜……Dクラスにしては点数が低いな、苦手な科目かな？

「ワシらも召喚するぞ」

「はい」

「「サモン試獣召喚」」

こちらら魔法陣の中から召喚獣を出てくる

木下の召喚獣は袴に薙刀を持った召喚獣である、中距離戦のタイプだ

『Fクラス	木下秀吉	&	Fクラス	風見星
数学	53点	&		186点

「星よ、お主何故こんなにも点数が高いのにFクラスなのじゃ？」

「すべての回答を英語で書いてしまいました」

「……………」

空気が重くなりました、何故でしょう？

「では、始めてください」

先生が手を挙げ試合が始まる

「行くぜ！！！！」

相手はこちらが点数が高いのに構わず突進してくる
木下は迎え撃とうとしたが止める

「星よ、迎え撃たなければやられてしまうぞ」

「大丈夫だよ、ちょっと見てて」

私はそういつて相手の召喚獣に標準を合わせる
ボウガンを構えて、ギリギリまで近づけて……………撃つ！
矢が相手二体の召喚獣の足に当たり召喚獣が倒れてしまった

「木下、お願い」

「承知した」

そこに待機していた木下が薙刀で一閃し召喚獣を倒した

「勝者、木下・風見ペア」

木内先生が勝者の名を告げて、一回戦は終了した

「やったね、木下」

「うむ、やったのじゃ

しかし星よ、お主何故召喚獣の扱いが上手いのじゃ？」

確かに召喚獣を始めて召喚したのに操作が慣れていることに疑問に思っているだろうけど、今は教えらねないからね……………

「えっと……………実は向こうで召喚獣のテストプレイをやっていた」

「そんなものがあるのか？」

もちろん半分嘘である、残り半分は事実
向こうではなく、こちらでやっているからだ

「それより、早く喫茶店に戻ろうお客さんが来ているかもしれないし」

「話を逸らされた気がするのじゃが……………しかたがない、戻るとし
ようかの」

私と木下は喫茶店に向かって歩き出した

第13話(前書き)

PVが7000アクセス、ユーニークは1000人を突破しました！

多いのか少ないのか……………作者にはわかりません！

第13話

問 以下の問いに答えなさい

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

風見星の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント
簡単でしたかね

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント
君は化学をなめていませんか

吉井明久の答え

『 $B \cdot E \cdot N \cdot Z \cdot E \cdot N$ 』

教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るように

〈side 明久〉

僕と雄二は（雄二の作戦によって）無事二回戦も突破し、三回戦進出も決まった

そして今は喫茶店に着いたけど……

「ただいまー……って、あんまりお客さんはいないなあ……」

あまり仕事がないのか、召喚大会から戻ってきたウエイトレス役の秀吉と星は暇そうだ

「無事勝ってきたよ」

「それは何よりじゃな」

「坂本はどうした？姿が見えないけど？」

「雄二ならトイレに寄ってくるってな」

喫茶店が気になると言っていた割には暢気なものだ

「秀吉たちはどうだったの？」

「ワシらも突破したぞ、二回戦は呆気なく終わってしまったのじゃ」

「呆気なく？二人の二回戦の相手は確か三年生だったよね？」

最初の相手はDクラスらしいけど、その次の三年生はBクラスである
点数の低い二人ではBクラスを呆気なく倒すのは難しいと思う

「相手の点数は2000点越えじゃった」

「2000点越え!？」

2000点越えを倒せるなんて姫路さんぐらいだよ!

「星の点数がその二人を上回っておったのじゃ」

2000点以上だって!？」

「星、英語の点数はいくつなの？」

二回戦の科目は英語である

「……………463点」

「4000点越えだって!？」

姫路さんの英語の点数を越えてるよ！

星はアメリカ生まれだから英語の点数が高いのだろう

「ちなみに言うと、腕輪の能力は使っておらぬぞ」

「使っていないの!？」

腕輪の能力を使わずに勝ったの!？」

……点数差があるから下手に使わなくても勝てるか

「それより秀吉、これはどういうこと?お客さんがいないじゃないか」

「……むう、ワシは先ほど戻って来たばかりじゃが妙な客はあれ以降来ておらんみたいじゃぞ」

「お客さんがどんどん来なくなっている」

秀吉に星も首を傾げる

「ってコトは、教室以外で何かが起きているのかな?」

「かもしれんのか」

「それ以外考えられないと思う」

そうやって三人で考え込んでいると

『お兄さん、すみませんです』

『いや、気にするな、チビッ子』

『チビッ子じゃなくて葉月ですっ』

雄二と小さい女の子の声が聞こえてきた

「坂本が戻って来たね」

「そのようじゃの」

「あ、うん

そうみたいだね」

はて、葉月……………？あの声、どこかで聞いたことがあるような……………
…？

『んで、探しているのはどんなヤツだ？』

教室の扉が開き、雄二の姿が見えた

話し相手は小柄なのか、雄二の陰になって姿が見えない

『お、坂本、妹か？』

『可愛い子だな』

ねえ、五年後お兄さんと付き合わない？』

『俺はむしろ、今だから付き合いたいなあ』

二人はクラスの野郎どもに囲まれた、お客さんがいないから暇なん
だろう

『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ』

どうやら女の子は人を探していて雄二に声をかけたようだ
雄二のヤツ、なんだかんだ言っつて面倒見が良いからなあ……

『お兄ちゃん？名前はなんて言っただ？』

『あう………わからないです………』

『？家族の兄じゃないのか？それなら、何か特徴は？』

名前がわからない相手でも探してあげようとする雄二、意外と子供好きかもしれない

『えっと………バカなお兄ちゃんでした！』

なんともすごい特徴だ

『そうか………』

雄二が該当する人物を探している姿が見られる

『………沢山いるんだが？』

否定できない

『あ、あの、そうじゃなくて、その………』

『うん？他に何か特徴があるのか？』

『その……………すつごくバカなお兄ちゃんだっただです!』

『『『吉井だな』』』

やだな、泣いてないよ?

「全く失礼な!僕に小さい女の子の知り合いなんていないよ!絶対に人違い」

「あつ!バカなお兄ちゃんだっ!」

小さい子が駆けてきて、いきなり抱きつかれた

「絶対に人違い、がどうした?」

「……………人違いだと、いいなあ……………」

最近、周りの皆があまりにも僕のことをバカつて言うから
少しずつ自分がバカに思えてきたよ……………悲しい

〈side星〉

「え?お兄ちゃん……………知らないって、ひどい……………」

吉井は抱きついた女の子を剥がしたら、女の子は泣き始めた

「バカなお兄ちゃんのバカあつ!バカなお兄ちゃんに会いたくて、

葉月

一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きながら来たのに！」

女の子は人に聞いてここまできたのに、知らないなんて言われたら傷つくよな

吉井は女の子の言葉を聞くうちに泣きそうな顔になっているし女の子はまだ泣いているから慰めないとな

「明久　　じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

「そうじゃな、バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ、許してやってくれんかの？」

「バカなお兄ちゃんはバカでバカだからごめんね？」

ここまでバカを言われる人はなかないだろう

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに」

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「「殺るわよ！」」

「「いぶめっ！？」」

島田さんと姫路さんによる

ダブルリアットが吉井の首筋に直撃した

……このクラスは何故プロレス技の使い手が多いのだろうか？

「姫路に島田か、どうやら勝ったようだな」

落ち着いて坂本が言う

「瑞希、そのまま首を真後ろに捻って、ウチは膝を逆方向に曲げるから」

「こ、こうですか？」

二人の技が徐々に吉井を苦しめる

「ちょっと待つて！結婚の約束なんて、僕は全然」

「ふえええええんっ！酷いですっ！ファーストキスもあげたのにっ！」

「坂本は包丁を持ってきて、五本あれば足りると思う」

「吉井君、そんな悪いことをするのはこの口ですか？」

「お願いひまふっ！はなひを聞いてくらはいつ！」

このクラスに殺人現場が出来てしまいそんな地獄絵図が目の前に広がっている

今このクラスに、お客さんがいないのはある意味よかったのかもしれない

「仕方ないわね、二本刺したら聞いてあげるからちよっと待ってなさい」

「あのね、美波

包丁って一本でも刺さったら致命傷なんだよ？」

どうあっても島田さんは包丁で吉井を刺すつもりだ

「あ、お姉ちゃん、遊びに来たよっ！」

お姉ちゃん？

「ああっ！あのとときのぬいぐるみの子か！」

吉井が何かを思い出したみたいだ

「ぬいぐるみの子じゃないです、葉月ですっ！」

女の子は頬を膨らませる

「そっか、葉月ちゃんか

久しぶりだね、元気だったの？」

「はいですっ！」

「うんうん、それは良かった

それにしても、よく僕の学校がわかったね？」

「お兄ちゃん、この学校の制服を着てましたから」

最近の子供は行動力がすごいと思う

「あれ？葉月とアキって知り合いなの？」

そんな様子を見ていた島田さんが首を傾げた

「うん、去年ちょっとね

美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの？」

「知ってるも何も、ウチの妹だもの」

「へ？」

へ？葉月ちゃんのお姉ちゃんは島田さんだったのか、確かに雰囲気
が似てる

隣では、姫路さんが何か言っているし、吉井は昔話をしているから
私と木下、坂本はこの光景を見ていることしかできない

「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

坂本が教室のあたりを見渡しながら言う

「そつえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」

「ん？どんな話だ？」

「えつとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、って」

その言葉を聞いて私は驚いた、クロスの汚れの問題は解決している

それなのに未だ噂が回っている、考えれることは……………

「……………あのチンピラAとチンピラBの仕業か」

「間違いないだろ、探し出してシバき倒すか」

私と坂本は断言した、悪評を流すとしたらあいつ等以外あり得ないだろ

「えつとですね…………短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店で」

「なんだって！？雄二、それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！」

我がFクラスの成功のために、（低いアングルから）綿密に調査しないとな！」

二人は葉月ちゃん言葉を聞いた瞬間にダッシュしていた

「アキ、最低」

「吉井君、酷いです……………」

「お兄ちゃんのバカ！」

後ろから罵倒を言われているにも気にせず

「どうしてあの二人は……………」

……バカだからしかたがないか

「ワシらも向かうとするかの」

「そうだね」

私たちはゆっくりとバカ二人を追いかける

第14話

問 以下の問いに答えなさい

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good - better - best

bad - worse - worst』

風見星の答え

『good - better - best

bad - worse - worst』

教師のコメント

その通りです

吉井明久の答え

『good - gooder - goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生は驚いています

goodやbadの比較級と最上級は語尾に -erや -estをつけるだけではダメです

覚えておきましょう

土屋康太の答え

『bad-butter-bust』

教師のコメント

『悪い』 『乳製品』 『おっぱい』

〈side星〉

私たちは葉月ちゃんが言っていた場所

Aクラスの【メイド喫茶『ご主人様とお呼び!』】の前に来ていた

……………名前の意味がよくわからない

Aクラスの前では何故か坂本が逃げようとしていた

吉井はどうしても中に入れていたのか坂本を入れようとする

ここって坂本のこと好きな霧島さんがいるクラスじゃないか

「頼む！ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

……………どれだけ入りたくないんだよ

「そっか、ここって坂本の好きな霧島さんのいるクラスだもんね」

「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」

抵抗する坂本に島田さんと姫路さんは言っている

「雄二、これは敵情視察なんだ、決して趣味じゃないんだから」

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ）」

シャッターの音が聞こえるので見てみると、そこにはいない筈の人物がいた

「……………ムツツリーニ？」

「……………人違い」

顔を見られているのにカメラを片手に否定する、厨房責任者である土屋康太がいる

「どこからどう見ても土屋でしょうが、アンタ何してるの？」

「……………敵情視察」

最近の敵情視察は女子をローアングルから撮影することらしい

「ムツツリーニ、ダメじゃないか」

盗撮とか、そんなことをしたら盗られている女の子が可哀想だと

「

「……………一枚百円」

「2ダース貰おう　可哀想だと思わないのかい？」

「……………今普通に注文してなかった？」

「アキ、普通に注文してるわよ」

やっぱり

「……………そろそろ当番だから戻る」

そう言うと土屋は吉井に写真を渡して教室に戻って行く
撮ったばかりなのに、まさかプリントアウトしているなんて……………

「まったく、ムツツリー二にも困ったもんだね」

呟きながら懐に写真をしまつ吉井

「吉井君、その写真をどうするつもりですか？」

姫路さんにバレてるよ

「やだな～もちろん処分するに決まっているじゃないか
それよりそろそろお店に入ろう？もうすぐくお腹が減っちゃった
よ」

吉井がお腹をおさえて演技している

……………確か塩と水さらには砂糖を主食としていて、お金は無いはずな

のに

「あ、そうですね、入りましょうか」

姫路さんは騙されているし

「うんうん、早く敵情視察も済ませないと……………」

写っているのは男の足ばかりじゃないか畜生!」

「やっぱり見てるじゃないですか!」

「じ、ごめんなひゃい! くひをひっぱらないで!」

写真を見たから当然の報いであると思う

「それじゃ、入るわよ、お邪魔します」

島田さんが一番手でドアをくぐる

「……………おかえりなさいませ。お嬢様」

出迎えたのはメイド服を着た、Aクラス代表の霧島さんだ

「わあ、綺麗……………」

確かに長い黒髪がエプロンドレスの白がよく映えて、黒のストッキングが彼女

の足を際立たせている、同姓であっても羨むほどの麗しさである
坂本は何で霧島さんから逃げるのかがよくわからないな

「それじゅあ、僕らも」

「そうじゃの」

「はい、失礼します」

「お邪魔します」

「お姉さん。きれい！」

坂本を除くみんなが中に入る、すると、霧島さんは島田さんの時と同じように

「……………おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

と、出迎えてくれた

「……………チッ」

最後に坂本も渋々入店する、そして霧島さんは

「……………おかえりなさいませ、今夜は帰らせません、ダーリン」

かなりアレンジされた出迎えだ

「霧島さん、大胆です……………！」

「ウチも見習わないとね……………」

「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

三者三様だっけ？それぞれリアクションをする

「演劇の参考になるの」

「木下？」

あれを演劇の参考にしたら勘違いされそうだ

「お席にご案内します」

霧島さんが席を案内するのでついて行く

Aクラスの広い教室にはお客さんで一杯となっている

そしてお客さんにAクラスの人たちが対応していた

流石Aクラスの人たちだ、演劇の参考にもなる

「……………では、メニューをどうぞ」

霧島さんが立派なメニューを渡してくる

Fクラスに手作りの違い、Aクラスのメニューは高級店に出るようなメニューである

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー！」

女の子三人は仲良くシフォンケーキを頼む

「私は『チーズタルト』で」

「ワシは『レモンタルト』にしようかの」

チーズケーキは好きだが、なかったのでチーズタルトを頼むことにした

レモンタルトは気になっていたので、後で木下から分けてもらおう

「僕は『水』で、付け合わせに塩があると嬉しい」

彼はよく今まで生きていたと思う

「んじゃ、俺は」

「……………ご注文を繰り返します」

坂本の注文を遮るような霧島さんの声

……………何で？そっか、幼なじみだから好きなものがわかって……………

「……………『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『チーズタルト』を一つ、『レモンタルト』を一つ、『水』を一つ、『メイドとの婚姻届』を一つ、以上で

よろしいですか？」

……………わかっていなかった

「全然よろしくねえぞ!？」

動揺した叫び声をあげる坂本

「……………では食器をご用意致します」

女の子三人の前と私と木下の前にフオークが、吉井の前には塩が坂本の前には実印と朱肉が用意された……………何で実印と朱肉が？

「しよ、翔子！コレ本当にうちの実印だぞ！どうやって手に入れたんだ！？」

しかも本物！？……………霧島さん、なんで持つてるの？

「……………では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください」

霧島さんは優雅にお辞儀をしてキッチンと思われるところへと歩いて行った

坂本の目からは並々ならぬ決意が感じられる、そんなにもいやなのか？しかし、店の中にはチンピラAとBの姿がない、来ていないのか？

『おかえりなさいませ、ご主人様』

『おう、二人だ』

中央付近の席は空いているか？』

教室の扉から声が聞こえた

そこには、チンピラAとチンピラBがいた

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！』

『そうだな、さっきいった二Fの中華喫茶は酷かったからな！』

『テーブルが腐った箱だったし、虫も湧いていたもんな』

人の多い中央で、わざわざ大声で叫び合う

「あいつら……！」

行こうとしたら、木下に止められた

「離してくれ、木下」

「落ち着くのじゃ、今明久たちが作戦を立てておる」

「作戦？」

落ち着いて作戦の内容を聞く

作戦は女装した明久（別名：アキちゃん）がチンピラAに攻撃し

その後、坂本が戸惑っているチンピラBに『パンチから始まる交渉術』を使うらしい

まさか、またあの交渉術が出るとは思わなかった

吉井がチンピラAに向かう前に一回止める

「待つて、吉井」

「何？」

吉井に道具を渡す

「スタンガン？」

三十万ボルト出せるように改造したスタンガンを渡した

「あのチンピラに」

「う、うん、わかった」

あのチンピラに電撃の恐怖を与えるんだ！

「お主……」

木下が呆れた顔になったが気にしない！さて、どうなるか見てみるか

吉井がチンピラAをバックブリーカーをし、倒れたところにスタンガンを押しつける

その後、チンピラAの頭にブラジャーを接着剤で付ける……変態だな
坂本は『パンチから始まる交渉術』でチンピラBを殴り飛ばす、良いパンチだ

その後逃げたチンピラを追いかける為、二人は教室をあとにする

「……………夏目漱石を二枚か坂本雄二を一名かのどちらかになります」

「坂本雄二を一名でお願い」

「……………ありがとうございます」

坂本……………二千円で売られたけどいいのか？

チーズタルトおいしかったなー……………レモンタルトもなかなか美味かった

私の隣では木下が顔を赤くしている……何故？私何かしたっけ？
日本では相手に食べさせるときアーンさせると聞いたけど……違
った？

さて、そろそろ三回戦が始まってしまっ、会場に行かなきゃ

「木下、そろそろ行かなきゃ」

「そ、そうじゃの」

まだ顔が赤い木下が返事をした、なんでまだ顔が赤いの？

「さ、さっさつと行くのじゃ！」

木下は私の腕を引っ張っていく

私………何かした？

私たちはそのまま会場に向かうのであった

第15話

学園祭の出し物を決める為アンケートにご協力下さい

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？

【？可愛らしさ？統率力？行動力？その他（）】
また、その時のリーダーの候補も挙げてください』

土屋康太の答え

『【？可愛らしさ】候補……瑞希姫路&島田美波』

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうかね

吉井明久の答え

『【？可愛らしさ】候補……姫路瑞希（訂正）木下秀吉（訂正）風見星（訂正）島田美波』

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるどころです

風見星の答え

『【？その他（女装の似合う人）】候補……吉井明久&木下秀吉』

教師のコメント

風見君、日本には慣れましたか？候補には女性を選びましょう、確かに似合いますが

坂本雄二の答え

『【その他（結婚相手）】候補……霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか

（side 畢）

「で、三回戦はそっちも不戦勝だったの？」

「ああ、相手が食中毒で棄権した」

三回戦の会場に向かったら、相手が食中毒で棄権したという結果だった

食中毒って………お客さん無理して胡麻団子食べからなかったのか？

「店の立て直しに協力せんとな」

「そうだな、一度失った客を取り戻す為にも何かインパクトあることをやる必要があるしそうだな」

教室の中は空席だらけで、ここで一つ大きなことをやらないとお客さんは来ないだろ

「ふむ、それで何をするか、じゃが……………」

教室を見渡しても特にできそうなことが思いつかない

「雄二、何かアイデアはある？」

「任せておけ」

中華でコレでは安直過ぎる発想だが、効果は絶大なはずだ」

そうやって坂本が取り出したのは、水色と白のチャイナドレス……………
何で持っているの？

「ほう、若干裾が短いような気もするが

これならば確かにインパクトはあるじゃろうな、コレを宣伝用に

「

確かに島田さんや姫路さんが着たらインパクトは絶大だね

「ああ、コレを……………明久が着る」

……………インパクトが強すぎる気がする」

「ちょ……………！お願い、許して！
メイド服の次にチャイナまで着たら、きっと僕はホンモノだって
皆に認識されちゃう！」

きつと皆はホンモノだと認識していると思う

「冗談だ、これは秀吉と星と姫路と島田に着てもらおう」

「あ、なんだ、良かった」

吉井は安心したようだ

私はチャイナ服を着るのは初めてだな

「ワシらが着るのは冗談ではないのかのう……………？」

「木下、チャイナ服を着る経験は中々ないよ？」

「そういう意味じゃないのじゃが……………」

「たっだいま〜！って、なんだ

アキつてばメイド服脱いじやつたんだ」

「あ……………残念です、可愛かったのに……………」

「お兄ちゃん、葉月もう一回見たいな」

吉井がメイド服を着たから、学校内でかなり噂になっている

「あはは、残念ながら

ただで人のコスプレが見られるほど世の中甘くないよ？」

「そういうことだ、姫路に島田
クラスの売り上げの為に協力してもらおうぞ」

エモノを逃がさないかのように二人に近づくと吉井と坂本

……他の人が見たら通報しそうな光景である

「な、なんだか二人とも、目が怖いですよ………?」

「凄く邪悪な気配を感じるんだけど………」

島田さんと姫路さんは若干引いている、だが逃げ場は塞がれている

「やれ、明久!」

「オーケー!へっへっへ、おとなしくこのチャイナ服に着替え痛あ
っ!

マジすんませんでした!自分チョーシくれてましたっ!

「弱いな、お前………」

吉井はお腹と頬と腿に島田さんのパンチが当たった………弱いな

「どうしてまた、急にそんなことを言い出すのよ?

前に須川はチャイナドレスを着たりすることはない、って言うて
たと思うけど」

予想通りの返事をする、島田さん

「店の宣伝の為に明久の趣味だ

明久はチャイナドレスが好きだよな？」

坂本が吉井に問いかける、返答次第では吉井の趣味が明らかになっ
てしまう

「大好 愛してる」

言い切った！？言い直した意味ないし！？

「……お前は本当に嘘をつけないヤツだな」

坂本も呆れてる

「し、仕方ないわね

店の売り上げの為に、仕方なく着てあげるわ」

「そ、そうですね！お店の為ですしね！」

二人がそれぞれ服を手取る

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い………？あ、うん！手伝うから、あの服葉月にもちよう
だい！」

葉月ちゃんはなんて良い子だ

「けど、ごめんね

気持ちは嬉しいんだけど、葉月ちゃんの方は数が

「……………！！（チクチクチクチク）」

「ム、ムツツリーニ！」

どうしてそんな凄い勢いで裁縫を！？っていうかさっきまでいなか
ったよね！？」

「……………俺の嗅覚を舐めるな」

なんて格好悪い台詞なんだろう

その後、島田さんと姫路さんには三回戦をチャイナ服を着て出ても
らい

私と木下、葉月ちゃんは着替えた後、校舎内を歩き回り宣伝をした、
結果……………

「いらっしやいませ！中華喫茶ヨーロッパへようこそ！」

お客さんがたくさん来ました、空いている席もどんどん埋まり始め
島田さんや姫路さんが三回戦を終え、戻って来た時には店がかなり
賑わっていた

四回戦は午後の二時から始まるので、しばらくは店でホールの仕事
をする

ガラガラガラ

ん？お客さんが来たみたいだ、出迎えないと……………

「いらっしやいませ！中華喫茶ヨーロッパへようこそ！」

「あ、すみません、席二つ空いていますか？」

次のお客さんは女の子二人みたいだ

二人の髪が黄色くて、片方は腰辺りまであり、もう片方は肩まで伸ばしている

それにしても顔が妹二人に……そっ……く……り？

「「「……………」」」

一瞬の沈黙、そして……………

ダッ！

「「……………え？」」

……………すぐに隠れました

何であの二人がここに居るの！？来ない様に言ったのに！

「兄貴、何してんの？」

月に見つかった！

「……………ちょっと隠れてみました」

「何で隠れるんだよ、席に案内しろって」

月に引つ張られ、入口にいる空の姿が見える

「兄さん、何でチャイナドレスなの？（パシャパシャパシャ）」

「質問に答える前にカメラを片付けなさい」

「……………わかりました（パシヤ）」

わかったといいながら、シャッターの回数だけしか減ってない

「チャイナ服を着ているのは、店の宣伝の為

二人は何でここにいるの？」

「いや〜ちょっと、兄貴のことが気になって（ニヤニヤ）」

「嘘をつくな！顔が笑っているぞ！」

「そうです、兄さんの事が気になって（パシヤパシヤ）」

「そう言いながら、いろいろな角度から撮るな！」

絶対に面白がっているだろ

「どうした？星の友達か？」

坂本が私に訪ねてきた

「違うよ、二人は……………」

「兄貴の妹で双子の姉の風見月だ！」

「双子の妹の風見空です（パシヤ）」

空が坂本から見えない位置で私を撮っている

「なんだお前、妹がいたのか？」

「目の前の二人がだよ、来ない様に言ったんだけどね」

「別にいいじゃねえか、おい

風見の妹二人、悪いが店を手伝ってくれないか？今人手不足なんだが、どうだ？」

確かに店は今お客さんで埋まっておりウェイトレスが足りない

「ん〜……………オレはやつてもいいぜ」

「私もやってみたいです」

二人がやってみたいのならいいか？

「でも坂本、チャイナドレスはもう……………」

「……………（チクチクチクチク）」

あ、なんか既視感^{デジャブ}

「……………って、何で土屋がいるの！？今お客さんがたくさんいるんだよー!?」

「……………俺の嗅覚を舐めるな」

彼の嗅覚は思っていた以上にすごいのかもしれない

「何だよアイツ、手の動きが見えね……」

「凄いですね……」

二人は土屋の手の動きを見て驚いていた

「……………できた」

「「「早いよ!」「」」

葉月ちゃんよりも早くできているよ!? 何で!?

月と空はチャイナドレスを土屋から受け取ると学校の更衣室で着替え
えた

しばらくすると……………

「へー……………結構動きやすいじゃん」

「私はちよつと……………裾が短いような」

二人がチャイナドレスを着て戻ってきた

月は赤と黄色、空は青と黄色を使ったチャイナドレスだ、なかなか
似合っている

「よっしゃー! やってやるぜ!」

「私も頑張ります!」

二人の気合が凄いな

「ちよつと雄二、いい加減戻ってきてよ人手が足りないんだか……ら

「……………」

吉井が月と空を見て、固まった

「ちよつとアキ、お客さんが多いんだから止まらない……………」

島田さんも固まった

「ん？明久に島田か、新しいウエイトレスの追加だ」

「風見空って言います、よろしく願います」

「風見月だ、よろしく頼むぜ」

「え？うん、こちらこそよろしく？風見？同じ顔？……………あれ？」

「明久、こいつらは風見の妹だ」

「ええ〜！星に妹がいたの！？しかも双子だって！？」

吉井がものすごく驚いている

「……………」

島田さんは、二人のあるところを見ている

「……………ねえ、風見？」

「……………何？」

島田さんの声に若干、力が込められている

「二人の歳は？」

「？二人とも、中三だよ」

「いやあああああ！」

島田さんが叫んだ、二人ともお客さんが驚くよ？

「どうして、中三なのにこんなにも胸があるのよ！？」

「そんなん、わかんねえよ」

「私もよくわかりません」

「やっぱりアメリカだから！？ドイツじゃダメだっていうの！？」

あー……………島田さんが壊れた、どうしよう？

「ほっとけ後で元に戻るだろ、それよりホールの仕事をしろ」

「そつだね」

「星って、姉妹だったの！？」

男の私が含まれている時点で姉妹じゃないと思う

「吉井、島田さんをなんとかしておいて」

「え？あ、うん」

「坂本、私は二人に仕事を教えるから」

「わかった」

さて、仕事を始めますか

結果、二人がウェイトレスをやったことにより、Fクラスにどんどんお客さんが来ました

第15話(後書き)

風見の妹、参戦！

第16話

問 以下の問いに答えなさい

□ (1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし

かつ第一象限に存在する X の値を一つ答えなさい

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、 $\{ \}$ から選びなさい

? $\sin A + \cos B$

? $\sin A - \cos B$

? $\sin A \cos B$

? $\sin A \cos B + \cos A$

$\sin B$

姫路瑞希の答え

□ (1) $X = \frac{\pi}{6}$

(2) ?

風見星の答え

□ (1) $X = \frac{\pi}{6}$

(2) ?

教師のコメント

そうですね、角度を『 π 』ではなく『 $\frac{\pi}{6}$ 』で書いてありますし、完璧です

土屋康太の答え

□ (1) $X = \text{およそ } 33^\circ$

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちはわかりますが
これでは回答に近くても点数はあげられません

吉井明久の答え

『(2) およそ?』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが
選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです

〈side星〉

『それでは、四回戦を始めたいと思います、出場者は前へどうぞ』

マイクを持った審判の先生に呼ばれ前に出る
あれから二時間が過ぎ、召喚大会の四回戦が始まる

「人が沢山おるの……………」

四回戦からは一般公開が始まる為、来場客用の席はほぼ満員である

「でも、これなら宣伝効果は高いよね」

私と木下は店の宣伝のためにチャイナ服で出場している

「がんばってくださいよ〜！」

「がんばってください〜い！（パシャパシャ）」

妹が観客席から応援している

……空はデジカメラで私をまだ撮っている

そつえば空が土屋と何か話していたが何を話していたんだろう？

「四人とも準備はいいですか？」

今回の科目は物理、対戦相手は三年Aクラスの二人が相手だ

「それでは四回戦を始めます、召喚してください」

「……試^{サモン}獣召喚」「」「」

魔法陣からデフォルトされた召喚獣が現れ、観客達から歓声があがる
そして、ディスプレイに点数が表示される

『Aクラス 掘田雅俊 & Aクラス 金田一真
之介

化学 217点 & 261
点

『Fクラス 木下秀吉 & Fクラス 風見星
化学 63点 236点』

「Fクラスが200点以上だって!？」

三年生二人が私の点数を見て驚く

「科目が化学でよかった」

私の得意科目は英語、物理、世界史で化学は英語ほどではないが高い点数は取れる

「星よ、油断すると危ないのじゃ」

「そうだね」

二回戦の時みたいに点数が高かったら問題はないが今回は点数が近いので油断はできない、それに三年生はこちらより操作に慣れている

『それでは……………初め!』

試合開始と同時に三年生の召喚獣が突っ込んでくる

「木下は私の召喚獣の後ろに隠れてて」

「わかったのじゃ」

私の召喚獣の後ろに隠れることによって相手の召喚獣は私の召喚獣を狙うことになる

そして、突っ込んできた召喚獣に矢を撃つ

「くっ！」

一体には当たったがもう一体には当たらずそのまま来るので……

「木下！」

「承知！」

私は相手の攻撃を避ける、そこに木下の召喚獣が相手に一閃しダメージを与える

そこへ私は矢を撃ち追撃を与え相手の召喚獣は消滅した

「行け！」

最初に私の矢を受けた召喚獣が起き上がり突っ込んでくるので避ける相手の召喚獣は一体消滅したので、倒すのには時間がかからなかった

『木下・風見ペアの勝利』

私たちが勝利すると大きな歓声が聞こえ

私と木下は教室へと戻った……………

……………

……………

……………

…

「結構いるね」

「そうじゃの」

「ホントだな」

「すごいですね」

月と空に合流し教室の中を見るとお客さんが結構いる

「あー可愛いお姉ちゃんたち、おかえりですっ!」

葉月ちゃんがこちらに気づき近づいてくる……………お姉ちゃんたち?

「葉月ちゃん、あのね……………」

訂正してあげないと

「ストーーーーーッブ!」

…………訂正しようとしたら、いきなり現れた吉井に止められた

「……………何で止めるの?」

「星!性別を言ったらダメだよ!秀吉も!」

……………何で?

「わかったけど……………何で？」

「そつだぞ明久、別に星は星で秀吉は秀吉だろう」

坂本も現れた

「そつか、雄二の言う通りだね

秀吉の性別は『秀吉』で星の性別は『星』だよ、男とか女とかじゃないさ」

「……………俺が言いたいのはそついうことじゃない」

坂本は呆れており、その後ろから島田さんと姫路さんの姿が見えた

「そついえば坂本達の相手は島田さん達だったよね、どっちが勝ったの？」

たぶん坂本達が勝ったと思うが一応聞いておく

「そつじゃの、どつとが勝ったのじゃ？」

「雄二、かな？」

「そつね、坂本の一人勝ちね」

「ですね」

「??？」

坂本の一人勝ち？

「？明久は同じチームなのに負けじゃったのか？」

吉井がやられて坂本が勝ったってことかな？

「そんなことよりも、数少ないウェイトレスが固まっていたら客が落胆するぞ、今は喫茶店に専念してくれ」

お客さんの視線がこちらに集中しているからね

「そうですね、喫茶店のお手伝いをしないとイケませんよね」

「そうね、ちょっと視線が気になるけど、売り上げの為に頑張りますか！」

「はいっ、葉月も頑張りますっ」

「オレも頑張るか！」

「私も頑張ります」

「……ワシは一応男なのじゃが……」

「木下、一応はいらない」

「二人とも絶対に性別をバラしちゃダメだからね？」

「やれやれ、仕方がないのう……」

「あ、いらっしやいませー！中華喫茶ヨーロッパアンヘよっこそー！」

お客さん来た瞬間に木下の口調が変わった、流石は木下だ

「いらっしゃいませ！中華喫茶ヨーロッパアンヘようこそ！」

私も仕事に力を入れることにした……………

……………

……………

……………

…

「さて、そろそろ行ってくるよ」

「うん、わかった」

「絶対勝ってこいよ」

「わかっておる」

喫茶店で30分ほど動き回って準決勝の時間になった

決勝戦は明日の午後にあるので、今日の試合は準決勝で終わりだ

「兄貴、がんばってこいよ」

「応援してますから」

月と空は喫茶店が忙しいので残ってもらおう

「相手はあいつ等だから油断するなよ」

「わかってる」

準決勝の相手は三年のAクラスで

しかもチンピラAとチンピラBが相手だ

喫茶店を妨害した恨みを晴らすのにはちょうどいい

「行ってくる」

「勝ってこい」

私と木下はステージに向かう

「お待たせいたしました！これより準決勝を開始したいと思います

」

ステージに到着すると、審判のアナウンスが流れた

「出場選手の入場です！」

アナウンスの指示に従い前に立つ、向かいから対戦相手が出てくる

「俺達の相手は……………木下に風見だと!？」

何故かチンピラBが木下と私の姿を見ると驚いた顔になる

「（ブル）……………少し寒気がするのじゃ」

木下は私の後ろに隠れる、私もチンピラAを見ると寒気がする

「おい、どうした常村？」

チンピラAがチンピラBに訪ねる

「いや、なんでもねえ」

チンピラBはそう言ってもこちらに視線を向ける……………寒気がする

『各選手準備はいいですか？』

はっきり言えば良くないがチンピラを倒したいので我慢する

「二人に聞きたいことがあるのですが、いいですか？」

「ん？何だ？」

「何でFクラスの悪評を流したんですか？」

「別に本当のことを言ったただだよ」

チンピラBが答えてくれる

本当は教頭先生の差し金だと思っがあえて言わない
やっぱりここで倒さないと気が晴れないな

『それでは、召喚してください！』

絶対に倒してやる

「 「 「 「 「
試獣召喚サモ 「 「 「 「 「

準決勝戦が今始まるうとしていた

第17話

問 以下の文章の（ ）に入る正しい物質を答えなさい
『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合
用いられる材料は塩化アンモニウムと（ ）である』

姫路瑞希の答え

『水酸化カルシウム』

風見星

『水酸化カルシウム』

教師のコメント

正解です、アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください

土屋康太の答え

『塩化吸収剤』

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント
それは反則です

side 秀吉

『Aクラス	常村勇作	&	Aクラス	夏川俊平
世界史	181点	&		167点

Aクラスにしては平均的な点数じゃな

向こうの召喚獣は剣と鎧、なかなか質がよさそうなものに見える

「Fクラスじゃこの点数は、なかなかお目にかかれない点数だろ？」

「どうした？俺達の点数を見て腰が引けたか？」

確かに点数は高いが、喫茶店を妨害したのは許せないのじゃ！

「チンピラAとBにしては点数が高いですね」

星が相手を挑発しておる

「ああ！？何て言いやがった！」

「チンピラにしては高いって言っただけですよ？わからなかったのですか？」

「てめえ……………！すぐに倒してやる！」

星が……………怒っておるじゃと！

少し遅れてワシらの点数がディスプレイに表示された

『Fクラス	木下秀吉	&	Fクラス	風見星
世界史	73点	&		365点

「「なつ！？」」

今度は300点越えじゃと！？

「お前、本当にFクラスか！？」

「その点数は明らかAクラス並じゃねえか！」

「振り分け試験に失敗しただけですよ」

星がFクラスでよかったぞ

「さて、チンピラA先輩、覚悟はいいですか？」

「チンピラじゃねえ！夏川だ！」

夏川先輩が星の召喚獣に攻撃をするが避けられる

「どうかしましたか？夏川チンピラ？」

「てめえ！先輩の部分をチンピラに変えるんじゃないか！」

「わかりましたよ……………チンピラ坊主？」

「てめえ……………！」

完全に切れておるのう

召喚獣の攻撃がどんどん単調になっておる

星が避けることに怒っておる

「おりゃ！」

「くっ！」

常村先輩の召喚獣が攻撃したが、なんとか防ぐことが出来た

『Fクラス 木下秀吉

世界史 35点』

今の一撃を受けておっいたら危ない所じゃった

「ちっ、耐えやがったか！」

「ワシとて負けられないのじゃ！」

今度はワシの召喚獣の一撃が当たった

『Aクラス 常村勇作

世界史 168点』

あまり点数が減っておらぬな、やはり点数差があるからキツイのじゃ

「おらおら、どうした!」

再び相手の召喚獣の一撃が当たる

『Fクラス 木下秀吉

世界史 13点』

もう一撃を受けたら負けてしまうのじゃ

「いったいどうすれば……………!」

また常村先輩の攻撃がきよった今度は防げそうにない
なんとか避けることはできたが攻撃がまた来た
着地したばかりなので防ぐこともできない

「くっ!」

ここまでか……………

『Fクラス 木下秀吉

世界史 13点』

?点数が減っておらんじゃと?

「なっ!?!」

『Aクラス 常村勇作

世界史 0点』

常村先輩の方が0点じゃと!?!?

よく見ると先輩の召喚獣には矢が数十本刺さっていた

およろしく星じゃと思うが……あの一瞬で何故十本も撃てるのじゃ?

（side星）

「いい加減に当たりやがれ!」

「いやです……よっと」

チンピラAの攻撃を避ける

そして、腹に蹴りを与えて少しづつ点数を減らしていく

『Aクラス 夏川俊平

世界史 111点』

「あ、1が三つ揃ってる」

「ふざけんじゃねえ〜!」

また避けて一撃を加える

『Aクラス 夏川俊平
世界史 94点』

1が三つじゃなくなった！……………残念だ
相手が接近戦をしてるのでこちらが矢を撃てなくて困るんだよな
……………よし

私は相手の召喚獣に思いつきり突っ込む

「はっ、やけになったか！」

チンピラAが武器を振り降ろそうとするが……………

『Aクラス 夏川俊平
世界史 0点』

「なんだと!？」

零距离で矢を撃つことで避けることも外れることもなく
矢を当てることができ、チンピラ坊主の召喚獣を倒すことが出来た
もう一体の召喚獣を見ると木下が危なかった

相手の点数が100点以上あるので零距离でなくては倒せない
此処から撃つても倒すことはできず、木下の召喚獣が消滅してしまう
何とかすぐ倒すにはどうすれば良いか悩んだ

結果、周りに撃つた矢を回収しまとめて撃つことにしたら
チンピラAの召喚獣がグロテスクなことになっていたのは……………
反省する

『何ということでしょう！』

勝者はAクラスを倒したFクラスの木下・風見ペアだ〜！！』

『『『ワアアアアアアアアアアアアアア！！』』』

すごい歓声だな……………四回戦より歓声が大きい

「てめえら、覚えてろよ！」

「どつなつても知らねえからな！」

まるでザコキャラが言うような台詞でチンピラBとチンピラ坊主が退場する

「星よ、さっきは助かったぞ」

ステージを出たらいきなり言われた

「気にしなくていいよ、勝ったしね」

「そつじゃが……………」

「それより早く坂本の作戦を実行しなきゃ」

「あの作戦……………やらんといけないかの？」

「やらなきゃダメでしょ、ほらサッサと行くよ」

「うむ、そつじゃな」

私と木下は急いで向かう………坂本と吉井の対戦相手である、木下さんに

side 明久

僕と雄二は喫茶店の手伝いを終えて、準決勝が始まるステージに向かっている

「雄二、秀吉たちは勝ったって」

「これで姫路の転校の話はなんとかなるだろ」

「そうだね」

Fクラスが決勝に行ける時点で十分な成果と言えるだろう

「そういえば、雄二？秀吉たちが試合に行く前に何話していたの？」

たぶん雄二の作戦だと思うけど

「この試合は負けられないからな」

雄二の目の色が比べられないほどマシな目になっている

「けど、霧島さんと木下さん相手にどんな作戦に行くの？」

次の相手はAクラスの霧島さんと木下さんの二年生の筆頭コンビだ
弱点になるような科目もないし、二回戦のような脅しや三回戦の困

作戦も難しいだろう

「今回の作戦には俺達だけでなく
秀吉に星とムッツリーニに協力してもらおう、お前はそれに合わせればいい」

「秀吉に星とムッツリーニ？」

だからさっき教室にムッツリーニがいなかったのか

「ああ、あの二人には弱点はないが、付け入る隙はある」

付け入る隙？霧島さん相手なら手段はないわけでもない

「秀吉のお姉さん？そんなことしなくても

雄二が霧島さんとうまくやってくれたらいいと思うんだけど？」

「うるさい黙れ」

即答された

「とにかく気合を入れろ、この戦いに負ければ

お前の大好きな姫路を失う可能性が高いし、俺は今後の人生を失う命が懸っていると思え！」

もうすぐステージだ、否が応でもテンションが上がる

「その『大好きな』ってのはやめて欲しいけど、了解！絶対に負けるか！」

会場を前にして気合を入れる

「おっしゃ！行くぞ！」

「おっつ！」

僕は敵のいるステージへと歩み始めた

『お待たせいたしました！これより準決勝を開始したいと思います』

到着すると同時にアナウンスが流れる、時間ギリギリだったようだ

『出場選手の入場です』

僕らの向かいから対戦相手の霧島さんと木下さんがやってきた

「……………雄二、邪魔しないで」

「そうはいくか、俺にはまだやりたいことが沢山あるんだ！」

「……………雄二、そんなに私と行くのが嫌？」

霧島さんが必殺の上目遣いを！ここで酷いことを言える奴は人間じゃない！

「ああ、嫌だ」

人間じゃない

「……………やっぱり、一緒に暮らしてわかり合う必要がある」

「ハッ！残念だったな！そんな寝言は俺たちに勝ってから言つことだ！」

「……………わかった、そうする」

二人の言い争いも終わり、いよいよ準決勝が始まる

「雄二、作戦は？」

「任せておけ、抜かりはない」

頼むぞ秀吉っ！」

え？何で木下さんに？外見は秀吉に似ているけど
そうか！

って、

入れ替え作戦か！やるじゃないか雄二！

「……………ふふっ」

木下さんが口元に手を当てて笑う、どうして？

「秀吉、もう木下さんの演技はいいから、早く僕らと」

「

「秀吉？秀吉って、あの「ミ」のこと？」

木下さんがステージの脇の一角を指す、そこには

「ひ、秀吉！？それに星まで！？どうしてそんな姿に！」

手足を縛られた秀吉と星の姿だった……………秀吉だけボロボロであった

「バ、バカな！」

作戦は失敗だ

「……………雄二の考えていることくらい、私にはお見通し」

流石は幼なじみだ、雄二の作戦が見破られるなんて！

「く……………すまぬ、雄二、ドジを踏んだ……………」

「……………ゴメン」

倒れていた二人が起き上がり、申し訳なさそうに唇を噛んでいるけれどもそんなことより、チャイナドレスで縛られているものだからもの凄く目に悪い

「……………！！！（パシャパシャパシャパシャ）」

「ムツツリーニ！いつの間にも！？」

カメラを構えたムツツリーニが一瞬で僕らの傍に出現した

「撮影なんかしてないでその、早く二人の縄をほどいてあげてよ！」

（その写真 後で売ってほしい）」

「明久、本音が混ざっているぞ」

しまった

「……………了解」

ムツツリー二は素早く二人の縄を解いていく、写真の件も忘れ
ないで欲しい

雄二の作戦が失敗した今、僕の出番だ

(雄二、僕に考えがある)

(考え? いったい何を……)

(今は迷っている余裕はないんだ、僕の言う台詞を言ってほしい)

(わかった)

僕の指示だとばれない様に雄二の後ろに隠れる

そして、念のため秀吉もこっちに来るように指示を出す

(翔子、俺の話を聞いてくれ)

「翔子、俺の話を聞いてくれ」

「……………雄二の考え?」

(俺は自分の力でペアチケットを手にいれたい、そして
胸を張ってお前と幸せになりたいんだ!)

「俺は自分の力でペアチケットを手にいれたい、そして
胸を張ってお前と幸せになりたい っ、ちよつと待て!」

雄二が振り返ろうとするが後ろから強引に雄二の頭を押さえつける

「……………雄二」

霧島さんはうつとりした表情で雄二を見ている

(だからここは譲ってくれ、そして、優勝したら結婚しよう)

「だっ、だれがそんなことを言うかボケェッ！」

雄二が激しく抵抗するが、その反応はお見通しだ

「くたばれ」

「くぺっ!？」

頸動脈を押さえる、これで聞き分けはよくなるはずだ

「……………雄二？」

霧島さんが続きの言葉を待っている

(秀吉、よろしく)

(うむ、了解じゃ)

ここで秀吉の声真似の定番だ

「だからここは譲ってくれ、そして

優勝したら結婚しよう、愛している、翔子！」

指示していない台詞が出たが大丈夫なはずだ

「……………雄二、私も愛している……………」

「ま、待て……………俺は、愛してなど……………こぺっ!？」

反論できないよう首を捻っておこう

「これで最強の敵は封じた!残るはキミだけだ、木下優子さん!」

「ひ、卑怯な……………!」

卑怯、反則は敗者の戯言だ!

「でも、アタシ一人でも吉井君には負けないはずっ!試獣召喚^{サモン}」

「ふふっ、それはどうか?いくよっ!新巻鮭^{サモン}!」

(……………試獣召喚^{サモン})

僕の呼び声に応え、出現する召喚獣

それはたとえAクラスの木下さんでも太刀打ちできない強さを持つた……………

「え!?!それ、土屋君の……………!」

ムツツリーニの召喚獣さ!これが秘策、『代理召喚(バレない反則は高等技術)』だ

(……………加速)

「ほ、本当に卑怯

きゃあっ!」

最初から腕輪の力を発動させて勝負を決める

「よしっ!僕と雄二の勝利だ!」

物言いがつく前に勝鬨を上げておく

『……ただいまの勝負ですが』

あ、それでも難しいみたいだ、仕方がない

「霧島さん、僕らの勝ちで良いよね」

「……それは」

「翔子、愛している(秀吉の声)」

「……私たちの負け」

『……わかりました、坂本・吉井ペアの勝利です!』

「それじゃ、僕はこれで!」

観客から罵声が飛ばない前に教室に戻る

「明久、なかなかの機転であつたな」

「……作戦勝ち」

「少し卑怯な感じがする」

「やだな〜気のせいだよ」

これで残りは決勝戦だ、二人には悪いけど僕らは優勝しなきゃいけないんだ

いくらクラスメイトだからといっても手加減はしない

「ところで、坂本はあのままでもいいの？」

「え？別にいいんじゃない？」

「そう？」

「あはは、雄二もたまには素直になるべきだと」

「霧島さんが坂本に一服盛って持ち帰ろうとしているよ？」

「き、霧島さん！雄二には決勝があるからクスリは許して！」

引き返す時に見たのは、虚ろな目をしていたタキシードに着替えている雄二だった

第18話(前書き)

今回はいつもより話が短いです

第18話

問 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい
□ （ ）年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

風見星の答え

『1549年』

教師のコメント

正解です、特にコメントはありません

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです

（side星）

吉井の作戦が成功し無事、決勝戦へと進んだ

「明久、今日という今日はお前をクロス」

「あはは、やだなあ雄二、目が怖いよ？」

流石に腹を殴ってクスリを出して冷水につけたのが原因だろう

「だいたい、雄二の作戦が読まれていたのがいけないんじゃないか
相手はあの霧島さんなんだから、充分考えられた事態のはずだよ
？」

「ぐっ、それを言われると反論できん……………」

坂本は霧島さんが相手だと冷静に考えられないように見える

「それにしても二人が勝ったのは驚いたよね」

「まったくだ、予想外とはいえ嬉しい誤算だ
それにしても、どうやって勝ったんだ？点数でいえば相手の方が
上だろ？」

「いや雄二よ、点数は星の方が上であつたぞ」

「へ〜……………そいつは驚きだな
姫路以外にも高得点の奴がいるのは、今後の試召戦争でも戦力の幅
が広がるな」

「確かに姫路さんだけに頼ってばかりだといけないしね……………とこ
ろで、雄二？

「なんで秀吉と星がここににいるの？喫茶店の方は人手が足りないんだ
よ？」

「試合が終わった後、土屋は喫茶店に戻り
私と木下も戻ろうとしたら坂本に止められ、一緒に喫茶店に向かっ
ている」

「ああ、ちよつとな
ところで姫路や島田、双子妹は教室にいるのか？」

「え？まだ確認してないけど、いるんじゃないの？」

「この時間は喫茶店でウェイトレスをやっているはずだ」

「多分、そろそろ仕掛けてくるはずだと思うんだが……………」

「……………妨害？」

「思ったことを言う」

「ああ、たぶんな」

「どうやら私の予想は合っていたようだ」

「……………雄二」

「……………兄貴」

「……………兄さん」

教室の前まで戻ってきたら、ドアの前に立っていた土屋に月と空が
駆け寄ってきた

「ムツツリー二と双子妹か、何かあったのか？」

「……………ウェイトレスが連れて行かれた」

「兄貴！島田が……………」

「それに、姫路さんや葉月ちゃんまで……………」

「ええっ！？姫路さんたちが！？」

月や空が無事でよかったが姫路さん達が連れて行かれてしまった

「やはり俺や明久と直接やり合っても勝ち目がないと考えたか……………
当然と言えば当然の判断だな、でも何故、双子妹がここにいるん
だ？」

「確かにのう、連れて行くのならば全員連れて行くはずだからのう」

「月に空、何で無事だったの？」

「オレたちはちょうど店の裏で休んでたんだよ」

「それで戻ってきたら姫路さん達が……………」

「そう……………二人が無事で良かった」

二人が無事で本当に良かった

「ってそんなことより、姫路さんたちは大丈夫なの!？」

どこに連れて行かれたの!？相手はどんな連中!？」

「落ち着け明久、これは予想の範疇だ」

「え？そうなの？」

「ああ、もう一度俺たちに直接何かを仕掛けてくるか

あるいはまた喫茶店にちょっかいを出してくるか

そのどちらかで妨害仕事を仕掛けてくるとは予想できたからな」

今回はウェイトレスを連れて出すことで喫茶店を妨害する方らしい

確かにそんなことをされては売り上げに影響がでてしまう

だが、全員連れて行かれなくてよかったが、それでも影響は出てしまっ

「なんだか随分と物騒な予想じゃのう」

今までの妨害は嫌がらせ程度だったが、今回のは下手をすれば警察沙汰になってしまう

「引つかかることが随分とあったからな」

そういえば、坂本は何かを考えている素振りをとっていることが多かった

「……………行き先はわかる」

と、言つて土屋が取り出したのは……………

「なにそれ？ラジオみたいに見えるけど」

「受信機だね」

「受信機？」

「……………盗聴用の」

「オーケー、敢えて何で持っているのかは聞かないよ」

盗聴用の時点で犯罪だけど

「さて、場所がわかるなら簡単だ

かるくお姫様たちを助け出すとしましょうか、王様？」

「そのニヤついた目つきは気に入らないけど、今回は雄二に感謝しておくよ」

「まずはあいつらを助け出そう
ムツツリーニ、タイミングを見て裏から姫路たちを助けてやっ
くれ」

「……………わかった」

「秀吉に星、双子妹は喫茶店の方を頼む」

「了解じゃ」

「わかった」

「おう！」

「わかりました」

「雄二、僕らはどうするの？」

「王子様の役目は昔から決まっているだろう？」

「王子様の役目って？」

「お姫様をさらった悪者を退治することさ」

これより作戦を実行する各自がんばってくれっと坂本が言って各自それぞれの役割をやる

それからしばらくして……………

「なあ兄貴、島田たち大丈夫だと思うか？」

不意に月が訪ねてきた、島田さんたちが心配なんだろう

「大丈夫だよ、坂本と吉井、土屋までいるから平気だよ」

この前の体育の授業の時での三人身体能力はかなり高いことは知っている

「でも……………」

月はいつも強気な性格だが友達のことになるとかなり心配する
そのため、いつものような強気な性格ではなく弱気になってしまう

「信じていればいいんだよ

絶対に島田さんたちを助けてくるから」

「……………ああ、わかった」

月は元気を取り戻すと再びウェイトレスの仕事 시작했다……………

……………

……………

…

「島田！姫路に葉月！大丈夫か！」

「大丈夫よ」

「はい、吉井君たちが助けてくれましたので」

「そんなのですっ！」

「よかった」

あれから一時間ほどで姫路さんたちが戻ってきた
月は三人に無事を確認すると、月は安心した表情になった

「そういえば、明久たちはどうしたのじゃ？」

「先に行ってくれって言うていたからもうそろそろ「ただいま」戻
って来たみたいね」

吉井と坂本、土屋は帰ってきた

「どう秀吉、喫茶店のほうは？」

「客が多くての、四人ではきつかったところじゃ」

「それじゃ、とっとと始めるか」

「……………厨房は任せろ」

「うちらも頑張るわ」

「すぐに出て大丈夫なの？」

「大丈夫です」

「葉月も大丈夫なのですっ！」

三人とも大丈夫のようだ

第19話

問 以下の問いに答えなさい

『女性は（ ）（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です

吉井明久の答え

『明日』

風見星の答え

『明後日』

教師のコメント

随分と急な話ですね

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理、医学用語では、生理のことを月経、初潮の

ことを初経という、初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が4

3kgに達するころ
に初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある、日
本では

教師のコメント
詳しくすぎです

side雄二

今日は召喚大会の決勝の日だな、相手は秀吉と星であるが油断はで
きないな

俺はそれより昨日、ババア（学園長）に言われたことが頭から離れ
ない

それは、昨日のことだ……………

俺と明久は喫茶店が終えた後、教室を貸しきり状態にしていた

それは……………ババアを待つ為にだ

あのババアこの一連の妨害の原因だからな、しかも俺たちに隠し事
をしてやがるからな

俺は召喚大会の科目の選択権をババアに頼んでいた
他にもめぼしい参加者全員に同じ提案があるかどうかを確かめるた
めだ

ババアは俺の提案を呑んだ、つまりババアは俺たちに勝ってほしい
ことがわかった

他にも学園祭の喫茶店ごときに営業妨害が出ていた、他にいろいろ
あったが……

決めては……姫路たちが連れて行かれたのが決定的だ、嫌がらせ
ならここまですない

俺はこれらのことをババアに言ってやった

するとババアは頭を突然下げた、流星は学園の長だな

ババアは俺たちに真相を話してくれたペアチケットが目的じゃない
だと!?

しかも企業の企みがどうでもいいだと!?!カップルを強制的に結婚
させる企画

が本当だったことじゃねえか!行ったら俺が翔子に……!クソ!
なんてことだ!

ババアの本当の目的は……腕輪だと?しかも回収じゃなくて、勝ち
取れってか……

デモンストレーションがあるからな、勝ち取る理由が……欠陥だ
と?

ババアの説明だと点数が高いとダメみたいだな、だから俺たちに頼
んだのか

召喚ワールドの方は俺か点数はそんなに高くないしな、問題は同

時召喚用か

平均点で暴走するだと？明久にしか使えないじゃないか

おそらく俺達の邪魔をするってことは、腕輪の暴走を阻止されたら困るってことだろ？

そんな奴は学校の醜聞をよしとする、生徒を取られた他校の経営者くらいだろうな

ババアは教頭が私立校に出入りしている話を聞いていたみたいだ
あの常夏コンビや例のチンピラも教頭の差し金だろ、おそらく大学への推薦だろうな
それ以外も考えられるがな

「一つ聞いていいですか？」

「なんだい？」

ん？明久が質問だと？

「準優勝の腕輪を優勝商品にして

白金の腕輪を準優勝の商品にすればいいじゃないですか？」

……バカがいるな

「明久、それだと商品は準決勝の奴が手に入れるだろが」

「あつ、そっか」

だが、明久の言いたいことはわかる

「すくなくとも準決勝の腕輪を優勝商品にして、優勝の腕輪をなくせばよかつただろ？」

「それは……………無理さね」

は？どういうことだよ？

「準決勝の品は風見が作ってくれたものなんだよ」

「風見……………って、星のことか？」

「その通りさね」

「ええ！」

明久が驚いた声を出している、俺も驚いたがな

「なんで星が腕輪を作れるんだ？召喚獣のことを理解してないと作れないハズだろう？」

「風見はこの召喚獣の試験召喚システムに貢献した、最年少の技術者だよ」

「「はっ！？」」

何だって！星の奴、黙ってやがったな！

「それだと、星はもともとこの作戦は知っていたのか？」

「知っているさね、口止めをしたけどね」

「口止めだと？」

「風見がこの件はあんた達に任せたって言ってたさ」

「なら何で黙ってたの？」

「悟られる可能性があったからだろう？」

「その通りさね、だから部外者のあんた達に頼んだわけだよ」

「そついうことかよ」

あー…… やつとわかった、俺達に頼んだ理由がな

「話はこれだけだよ、明日の決勝戦はがんばるといいさね」

それだけ言ったらババアは部屋から出て行……

「そつそつ、約束は約束だから絶対に優勝するんだよ」

今度こそ教室から出て行く

そして現在っていうわけさ

「それにしても驚いたよね」

まさか星が最年少の技術者なんて」

「ああ、まったくだ」

俺と明久は朝早く学校に来て決勝戦の補充試験を受け終え、屋上に向かっていた

決勝戦の科目は星の苦手な科目にしてやった、俺達が勝てるようになるアイツが勝っても

変わらんが負けるのはいやだしな、屋上の扉が見えてきたな……

「ふわぁ……………眠いね」

「まったくだ、ふわぁ……………」

勝てるように徹夜で勉強したしな、明久も徹夜で勉強したようだ
ああー……………眠い、さっさと寝よつと……………Z……………Z……………Z……………

……………

……………

……………

……………

……………

…

『さて皆様、長らくお待たせ致しました！

これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

流石は決勝戦だな、観客の人数が多いな

あのあと、三時間眠り喫茶店を三時間手伝って召喚大会へ来た

『出場選手の入場です』

さて、勝ちに行くか！

『二年Fクラス所属・坂本雄二君と、同じくFクラス所属・吉井明久君です！

皆様拍手でお迎えて下さい！』

結構な量の拍手だな

『なんと、最高成績のAクラスを抑えて決勝戦に進んだのは

二年生の最下級であるFクラスの生徒コンビです！

これはFクラスへの認識を改める必要があるかもしれませぬ！』

(あの司会、嬉しいことを言ってくれな)

(だね、姫路さんのお父さんに好印象になるね)

『そして対する選手は、こちらも二年Fクラス所属・木下秀吉君と同じくFクラス所属・風見星君だ！皆様、こちらも拍手でお迎えて下さい！』

俺達の前に現れた星に秀吉

『なんと、こちらは三年生のAクラスを抑えての決勝進出だ！

今年のFクラスに優秀な生徒がいるみたいですが、果たしてどちらが勝つのか！』

二人は拍手を受けながら前に出てくる

『それではルールを簡単に説明します、試験召喚獣とはテストの点数に比例した』

アナウンスの説明が入るが知っているので無視して、二人を見る

「よう二人とも、よく決勝まで来れたな？」

「ワシは正直に言えば決勝の舞台に立っていることに驚いておるぞ」

「私も緊張している」

秀吉は演劇でこういう舞台には慣れているが星は慣れていない
これは作戦の一つだ

「それにしても、Fクラク同士で決勝戦だなんてすごいよね？」

「確かにすごいよな」

俺も最初は星の実力を知らなかったからな、てっきり三年が上がって
てくると思っていた

「お互いに頑張ろうね」

「うむ、臨むところじゃ」

「手加減はしないぜ」

「必要ない」

『それでは試合に入りましょう！選手の皆さん、どうぞ！』

説明が終わったようで、審判役の先生が俺達の間立つ

俺は頭の中で二人の召喚獣の対策を立てて明久に伝えていた

（秀吉の召喚獣の武器は薙刀だ、あれは中距離でこそ威力を発揮する
だから一気に距離を詰めて勝負に持ち込む）

（ふむふむ）

（星の武器はボウガンだ、遠距離でこそ威力を発揮する
だからこちらにも接近戦が弱い）

（それじゃ一気に接近して勝負に持ち込むんだね）

（話を最後まで聞け）

二人は薙刀にボウガンだ、距離を詰めようにも妨害される）

（それじゃどうするの？）

（明久は星を相手にして時間を稼いでくれ）

その間に秀吉は俺が相手をする、秀吉を倒したら二体一に勝負を
持ちこむ）

（わかった）

この間、わずから秒

明久には作戦を伝えておいたが、星は接近戦の対策をしているだろう

だが、俺には明久に伝えていないもう一つの作戦がある
この作戦は明久に伝えては失敗する可能性があるのでぶっつけ本番
でする

「「「「^{サモン}試獣召喚」」」」

さて……………勝たせてもらおうか？

召喚大会、決勝戦が始まる

第20話（前書き）

話の内容を考えていたら投稿遅くなりました、すみません

今回の話で、黒金の腕輪の能力発表です

話はいつもより長いです

第20話

問 以下の問いに答えなさい

『人が生きて行く上で必要となる五代栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？ 脂肪 ? 炭水化物 ? たんぱく質 ? ビタミン ? ミネラル』

風見星の答え

『？ 脂肪 ? 炭水化物 ? たんぱく質 ? ビタミン ? ミネラル』

教師のコメント

流石です

吉井明久の答え

『？ 砂糖 ? 塩 ? 水道水 ? 雨水 ? 湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早期月経という、また

十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに

十八歳になっても初潮がない時を減発性無月経といい……』

教師のコメント
保健体育のテストは一時間前に終わりました

side 明久

僕と雄二対秀吉と星の決勝戦が始まった

『Fクラス 日本史	坂本雄二 215点	&	Fクラス 吉井明久 166点
--------------	--------------	---	----------------------

今回の日本史は徹夜で勉強したおかげで点数が高い、これなら……

『Fクラス 日本史	木下秀吉 93点	&	Fクラス 風見星 110点
--------------	-------------	---	---------------------

「雄二、二人の点数……?」

星の点数はどれ位かわからないけど、秀吉の点数がいつもより高い………何で？

「秀吉、何で点数がいつもより高いの？」

いつもは50点代なのに

「星に勉強を教えて貰ったのう、少しじゃが点数が上がったのじゃ」

「私も苦手科目だからあまり教えられなかったけどね」

苦手科目でも100点以上取るなんて

「それでも僕達の方が点数は高い」

「その通りだ、明久！行くぞ！」

先に動いたのは雄二の召喚獣だった雄二の召喚獣の武器はメリケンサック

超接近戦用武器だが、その分軽いので召喚獣の動きは早い

そして雄二の召喚獣は作戦通り、秀吉の召喚獣に向かう

「喰らえ、秀吉！」

雄二の方は戦闘が始まったみたいだ

「僕だって、行くよせわああ！」

僕も台詞を言おうとしたら、星の召喚獣はボウガンで撃ってきた

「ちょっと！最後まで言わせわあー！」

また言い切る前に撃たれてしまった、しゃべらせないつもりか！

「吉井、戦闘はもう始まっているんだよ？」

「確かにそうだけど……………」

テレビで戦隊物の変身や台詞だって最後まで台詞を言ってるんだよ！言わせてよ！

「どンドン行くよ」

僕のところには矢が二本飛んでくる

僕はそれを最初的一本を避けて、もう一本の方は木刀で弾いた
なんとか雄二の戦闘が終わるまで時間稼ぎをしないと……………僕は少し
距離を置く

「攻めて来ない？」

星が疑問に思っている

それもそうだろう僕の召喚獣は矢を避けて近づいたのに離れたのだから

「まっいいか」

星は再び矢を撃ってくる、その数は五本……………さっきより増えるし！

今度は受け止めずに避ける、流石の僕でもさっきみたいに行動する

ことはできない
最初の二、三本は避けることができたが四本目が当たりそうだったので木刀で防ぐ
ただ木刀で防いだことで一瞬召喚獣の動きが止まって、矢を掠めてしまう

「くっ！」

フィードバックっで僕に痛みが来るけど、掠めただけなので一瞬だけ痛かった

『Fクラス 吉井明久

日本史 145点』

少しだけ点数が下がったけど問題はない

「これで終わりだあああああっ！」

『Fクラス 木下秀吉

日本史 0点』

「負けてしまったのじゃ」

雄二が秀吉を倒したみたいだ

「待たせたな、明久」

よし、これで二体一だ！

「やばいな……………こうなったら」

星の方は何かしているが大丈夫なはずだ

「明久、一気に勝負をつけるぞ」

「わかった」

雄二の召喚獣を先頭にして少し後ろを僕の召喚獣が追いかける
そして、星の召喚獣が……………ボウガンに大量の矢をセットしていた
……………つて、あれ？

「ちょっと、雄二！このまま近づいたら撃たれるじゃないか！」

「大丈夫だ、あれは予想の範囲内だ」

予想の範囲内？……………そうか！撃つ前に倒すんだね！

「明久、少し俺の前に出ろ」

「わかった」

「そして、少し左に移動するんだ」

「了解」

雄二の指示に従って僕は雄二の召喚獣の左前にいる

「喰らえええええつ！」

そして、雄二の召喚獣が拳を当てようとするが

「ふっ！」

星の召喚獣が矢を撃った、あの位置からじゃ雄二の召喚獣に矢が当たってしまう

「明久！」

「わかってる」

雄二が囿になって僕が止めを刺すんだよね
そして、僕の召喚獣は………

………大量の矢が刺さっている

………あれ？

「うおおおおおっ！？体に針が複数刺さった痛みが！？」

何でー！？どっししてー！？

（side星）

授賞式が終わり、今は腕輪のデモンストレーションをするところだ

「始めるぞ、明久」

坂本は腕に白金の腕輪“代理召喚型”を付ける

「アウェイクン
起動」

坂本はキーワードを言うと召喚フィールドが現れる

代理召喚型は教師の立ち会い無く召喚フィールドを作成することが出来る

使用者の点数によってフィールドの範囲が変わり、点数が減る

「僕も行くよ、サモン試獣召喚」

吉井の腕には白金の腕輪“同時召喚型”が付いている

「ダブル
二重召喚」

吉井がキーワードを言うことで吉井の召喚獣は二体になった

同時召喚型は使用者の点数を二分してもう一体の召喚獣を呼び出すことが出来る

主獣と副獣を同時に操るので、操作はなかなか難しい

「どうだ、明久？」

「操作が難しいけど、大丈夫だよ」

「明久の操作は時間をかければなんとかなるだろ

この腕輪はだいぶ使えるからな、作戦の幅が広がるぜ」

坂本と吉井の二人は発表を終え、戻ってくる

「次はお前らだぞ」

「わかつている」

「行ってくるのじゃ」

「行つてらっしゃい」

今度は私と木下の腕輪の発表だ

「さて、やるかのう」

木下の腕輪は私の作った黒金の腕輪“代理召喚型（劣化型）”を腕に付ける

「アウェイクン
起動」

木下がキーワードを言うと召喚フィールドが現れる

効果は白金の腕輪と同じだが、この腕輪の出せる召喚フィールドには条件がある

それは自分が受けたフィールドを最大三つまで保存でき、そのフィールドしか出せない

簡単に言えば、試召戦争で数学のフィールドで勝負した
自分はその勝負で受けた科目である数学のフィールドを保存して出
すことが出来る

唯一の利点は白金の腕輪と違って召喚獣を出すことが出来る

「私の出番だね、サモン試獣召喚」

私の腕には開発した黒金の腕輪“同時召喚型（劣化版）”が付いて
いる

「デュアル二乗召喚」

私がキーワードを言うことでボウガンがもう一つ出てきた

この同時召喚型は吉井のと違って自分の武器と同じものが出てくる
白金の腕輪と違って点数の消費がないが武器の威力は半分になって
いる

しばらく召喚獣の操作をして、デモンストレーションが終了した

「お兄ちゃん！ すつつつごい格好よかったよ！」

「ぐふっ！ は、葉月ちゃん……今日も来てくれたんだ、ありがとう
っ」

教室に戻ってきたら葉月ちゃんが吉井に飛びついた

飛びついた位置がちょうど鳩尾だったのか吉井が苦しそうな顔になっている

「オレもいるぜ」

「兄さん、試合格好良かったですよ」

「空に月、二人とも来ていたのか」

そこには昨日と同じチャイナドレスを着た妹二人がいる

「四人ともお疲れ様、凄かったわね」

「お兄ちゃん、凄いですっっ！」

「葉月ってば、アキが困ってるわよ？」

「あの、吉井君」

「あ、姫路さん

僕の活躍見てくれた？」

「はいっ！とつても素敵でした！

今度土屋君にビデオをコピーしてもらおうと思っくらい！」

結果でいえば二人は勝ったけど、吉井………最後には坂本の盾にされていたしな

「ビデオねえ………ムツツリーニ、撮影なんかしていたの？」

「はい、ずっと熱心に撮っていましたよ、ね？」

「……………（ブイッ）」

顔を背ける土屋、もしかして撮影に失敗したのかな？

さて、そろそろ喫茶店の仕事をしないといけない

教室にお客さんが結構いる、頑張りますか……………

……………

……………

……………

……………

…

『ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました
各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「お、終わった……………」

「お客さんがいっぱいきたね……………」

「疲れたのう……………」

「……………（コクコク）」

喫茶店は無事に終了し後片付けに入る

召喚大会で優勝したからかお客さんがいっぱいきた

「そう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだらう?」

「ん?お義父さんが気になるのか?」

「なっ!?べ、べつにそういうわけじゃなくて!」

「吉井、そんなに動揺しない」

「それに今夜祭の後で話をしにと言っておったからのう、結論はその時じゃな」

Fクラスから優勝者と準優勝者が出たから何とかなってほしいな

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」

着替え?そういえばまだチャイナドレスを着たままだ

「ええっ!?どうして!?!」

何故驚く、着替えるだけなのに?

「どつして、って言われても……恥ずかしいからに決まってるでし
「..っ」

「すみません、すぐ戻りますので」

「行ってくる」

「着替えてきます」

「待つて！四人とも考え直すんだ！カムバアーツク！」
着替えることに考え直す必要はないと思う

「ふむ、ならばワシも」

「させるかつ！せめて秀吉だけは着替えさせない！」

吉井が木下の足にタツクルをして動きを止める

「なっ！？何をするのじゃ明久！」

「……………（フルフル）」

土屋も同じことをやっている

「なわ、私は着替えて」

「させぬ！」

今度は秀吉が私の手を掴み、動きを封じる

「ちょっと！？何で木下が私の着替えを阻止しようとするの！」

「一人だけ逃げるのはダメなのじゃ」

着・替・え・る・だ・け・な・の・に！

「おい明久、遊んでないで学園長室に行くぞ」

「学園長室じゃと？二人とも学園長に何か用でもあるのか？」

「ちよつとした取引の清算だ」

喫茶店が忙しくて行けなかったからな、遅くなった今から行くと思つ」

確かに喫茶店は忙しかったしね

「ならばその間にワシは着替えを」

「私も」

「そうはいかない！二人とも一緒に連れて行く！」

「……………（クイクイ）」

「あ、ムツツリーニも来る？」

「……………（コクコク）」

この二人は似た者同士だな

「困つたのう、雄二」

「なんとか行ってやってくれんか？」

「ん……………ま、いいだろう」

「三人とも行くこうぜ、明久を説得するのも面倒だし」

それが本音か！

「やれやれ、雄二まで……………仕方ないのう、着替えは後回しじゃ」

「そうだね」

「よし、ほら明久にムツツリーニ

足を放してやれ、秀吉も星の手を放してやれ」

「うん」

「……………（コクリ）」

「やれやれ、ワシのこんな姿を見てもなんの足しにもならんじやろ
うに……………」

「ホントだよね」

そんなことを木下と話しながら学園長室へと向かった

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

ノックと挨拶をしながら学園長室へと入る、吉井と坂本

「二人とも……………」

「お主ら、全く敬意を払っておらん気がするのじゃが……………」

「そう？きちんとノックをして挨拶したけど？」

それは返事を待つてから扉を開けるんだけど？

「アタシは前に返事を待つようにいったはずだがねえ」

「あ、学園長。優勝と準優勝の報告に来ました」

「言われなくても分かっているよ。アンタ達に賞状を渡したのは誰だと思ってるんだい？」

学園長である

「さて、これで問題は解決したな？」

「それで、白金の腕輪は返却した方がいいですか？」

「いや、それは後でいいさね、どうせすぐに直せないんだ」

確かに直すのには時間がかかる

「む？明久、何の話なんじゃ？」

吉井が木下にこの事情を説明している

「そうじゃったのか……………む？どうしたのじゃ雄二？」

坂本は考える仕草を取っていて何かブツブツ言っている

「だから、教室の改修と交換条件で僕と雄二がこれをゲットするって
いう取引を学園長と「待て明久！その話はマズイ！」え？」

坂本が怒鳴ると同時に廊下から足音が聞こえた……………まさか

「……………盗聴の気配」

「廊下から足音が聞こえた」

「やられたか！」

坂本は扉を開けると複数の足音が遠くから聞こえる

「あいつら……………！追うぞ明久！」

「ちよつ……………雄二、どうしたこと!？」

「例の三年生が盗聴してやがった！髪型が見えたから間違いない！」

例の三年生？……………チンピラ坊主とチンピラBか！あいつら……………

…！

「急げ！」

「わかった！三人とも協力して！」

「うむ！」

「絶対に捕まえる！」

「……………（コクリ）」

「俺と明久は屋内を探る、秀吉にムツツリーニ、星の三人は屋外を探ってくれ

目標を見つけたら携帯に連絡を入れてくれ！」

「うむ！」

「明久！まずは放送室を抑えろぞ！」

「オーケー！」

「星にムツツリーニよ、ワシらは出入り口を塞ぐのじゃ」

「わかった」

「……………了解」

私と木下、土屋は急いで校庭に向かった

第20話（後書き）

黒金の腕輪は白銀の腕輪の劣化版です

代理召喚型

- ・欠点

自分が勝負したことがあるフィールドを三つまで保存でき
保存したフィールドでしか出すことができない

- ・利点

白銀の腕輪と違って使用者は召喚獣を呼び出すことができる

同時召喚型

- ・欠点

武器をもう一つ出すことができるが威力が半分となっている

- ・利点

点数は消費しない

第21話

問 以下の問いに答えなさい

『冠位十二階が制定されたのは西暦（ ）である』

姫路瑞希の答え

『603』

教師のコメント

正解です

風見星の答え

『603?』

教師のコメント

?がなければ正解ですね

坂本雄二の答え

『603』

教師のコメント

一体どうしたのですか?驚いたことに正解です

吉井明久の答え

『603』

教師のコメント

君の名前を見ただけでバツをつけた先生を許してください

〈side 畢〉

私と木下、土屋は屋外に出てチンピラBとチンピラ坊主を探しまわっている

〈校門〉

「あら、秀吉何やって……何て格好をしているの!!」

「あ、姉上!これには事情が……」

「どつという事情かしら?」

「ここにはいないみたいだから行くよ、木下」

「風見君！？あなたもなんて格好をしているの？」

「？ウエイトレスの格好ですけど？木下の格好もそうですし」

「秀吉？あとで聞きたいことがあるんだけど……いいわね？」

「さらばじゃー！」

「待ちなさいー！」

く旧校舎く

「あれれ〜？ムツツリーニ君なにやっているのかな？」

「……………工藤愛子」

「双眼鏡を片手に持って……………覗きでもしてたのかな？」

「……………（フリフリ）」

「それとも……………」

「……………？」

「僕のスカートの中を見たかった？（ピラ）」

「……………！！（ブシャアアア）」

「ムツツリーニ！？一体どうしたのじゃ？」

（新校舎）

「西村先生」

「ん？風見と木下に土屋か……………どうした？」

「ここでチンピ……………常村先輩とチ……………夏川先輩を見ませんでしたか？」

「いや見ていないが……………」

「そうですね……………ありがとございます、行こう木下、土屋」

「うむ」

「……………了解」

「（風見……………Fクラスの影響を受けているんだな）」

校門、旧校舎、新校舎などを探しても見つからないので
私と木下、土屋は隠れる場所の多い部室棟で探していた

「見つからないね」

「うむ、随分と時間が経つておるからのう」

部室の中を覗いてもどこにも人はいなかった、学園祭で部活ないんだよね

「……………見つけた」

「本当!？」

土屋が見つけたらしい

「……………あそこ」

そこは……………新校舎の屋上

「全然見えないんだけど？」

距離があるので、いるのかどうかわからない

「……………これを」

「ありがとう」

双眼鏡を何で持っているのかツッコミは後回しにする

双眼鏡で新校舎の屋上をみるとそこには……………チンピラBとチンピラ

坊主がいた

……… 双眼鏡なしで見えた土屋の視力が気になる

「いた！」

しかも放送設備を準備している

「急いで明久達に連絡するのじゃ」

木下が吉井に電話を掛けている、状況も知らせる為木下に双眼鏡を渡す

「見つけたぞい、さすがはムツツリー二じゃ、遠くまでよく見ておる」

『ナイス！それで、あの連中はどこにいるの？』

「新校舎じゃ」

『新校舎だつて？そんな！僕と雄二が隅々まで』

「違う、校舎の中ではない、新校舎の屋上じゃ！」

電話の向こうから驚いた声が聞こえた、屋上まで探していなかったみたいだ

『秀吉！そっちはどこにいるの？』

「部室棟じゃ」

ここからでは五分かかってしまうので間に合わない可能性がある

「どっつするっ。」

「……………間に合わない」

「明久と雄二がなんとかするとっておったぞ」

「なんとかかって……………」

あの二人だと何か大変なことが……………

ドオン！バラバラバラ

「………」

おかしいな……………新校舎の屋上に花火が……………

ドオン！バラバラバラ

「……………スピーカーの破壊を確認した」

「見えるんだ……………」

「それにしても花火とは……………」

「確かにね……………」

花火での破壊とは……………」

ドオン！バラバラバラ

「放送設備が破壊されたよ」

双眼鏡を覗き状況を確認する

「これで一件落着じゃな」

「……………なんとか阻止できた」

「そうだね」

これで何にも出来なくなったから、打ち上げの集合場所に向か……………」

ヒュ……………」

「ん？花火の音？」

「ホントじゃのう」

放送設備を壊したはずなのに？

そして花火はそのまま……………

ドオン！バラバラバラ

……………校舎の一角を破壊した

……………あの二人は学校に恨みでもあるのだろうか？

「……………さて、集合場所に向かうかのう」

「……………遅れるわけにはいかない」

「……………そうだね」

気にしたら負けだよな？最近思いました

『誰か、誰か助けええっ！変態教師に犯されそう
ですーっ！』

『貴様よりもよってなんて悲鳴を上げるんだ！』

吉井の叫び終えが聞こえても気にしない、自業自得であるから……………
集合場所に向かおう

「えっと……………誰？」

「顔が大きくなった吉井明久です」

「同じく坂本雄二だ」

びっくりした……………顔が倍ぐらい吉井と坂本が来たのは驚いた

「む、やっと来たようじゃな、遅かったのう」

「……………先に初めておいた」

「ああ、ゴメンゴメン

ちよっと鉄人がしつこくてさ」

変な叫び声を上げたからだと思う

集合場所は近所の公園は、既にクラスメイトで一杯となっていた

ちなみに月と空には家に帰ってもらっている、クラスメイトが何かやりそうだから

「お主ら、もはや学園中で知らぬ者はおらんほどの有名人になってしまったのう」

「校舎も破壊したしね」

「……………（コクコク）」

「……コイツと同じ扱いだとは不本意だ」

「それは僕の台詞だよ……」

この二人は近いうちに停学か退学になりそうだな……

オレンジジュースを飲んで……ん？苦味がある？……なんだ
かお酒っぽいな

オレンジジュースのラベルをしてみる

『大人のオレンジジュース』

大人の？……お酒じゃないの！？木下や土屋、さらに坂
本まで飲んでいるし

私は大丈夫だったけど、他の人が大丈夫かどうかはわからないので
声をかけてみる

「坂本？」

「ん？何だ？」

「それお酒だけど……大丈夫？」

「別に酒には強いから大丈夫だ」

「そうなんだ」

坂本は大丈夫つと、次は……

「土屋？」

「……………何？」

「それお酒なんだけど？」

「……………問題ない」

「へ……………」

土屋も問題ないらしいので大丈夫っと、最後は……………

「木下？」

「何じゃ？」

「それ……………」

「別にオレンジジュースなのじゃから問題なかるっ」

「そ、そうだね……………」

木下も大丈夫……………

「しかし……………星が二人に見えるのは気のせいじゃろっか？」

大丈夫ではなかった！

「酔っているよね？」

「何を言っておるのじゃ、星が三人に増えてしまっておるのじゃが……」

「絶対酔ってるよね!？」

顔も赤くなっているので酔っているのは間違いないと思う

「星!」

「うわぁ!」

木下が抱きついてきた

「星、何故ワシを下の名で呼んでくれぬのじゃ」

「何でって……」

何でだろ?特に意味はないしな……

「……ダメかの?」

「いやダメじゃないよ……秀吉」

「むむ」

下の名前で呼んだら何か機嫌が悪くなった木……秀吉、そして……

「……………!!!(パシャパシャパシャ)」

カメラで撮影している土屋

「なんで撮っているの？」

「……………商売」

「なんの？」

「……………企業秘密」

何の商品になるのが気になるところ

「すうー……………すうー……………」

秀吉は寝てしまった

ここで寝てしまったら風邪を引いてしまう

「坂本」

「どうした？」

「秀吉が寝たようだから家まで送ってくる」

「……………そうか、気をつけて帰れよ」

私は秀吉を背負って家まで送って行った

くおまけく

「じゃにちは」

「……………いっしょにい」

「注文したものは……………」

「……………いね」

「あ、ありがとうございます」

「……………そっちは」

「えっ、そうでしたね、はい」

「……………まいど」

「はあ……………兄さんの写真」

空の“兄の写真ver2”に新しい写真が収められた

第21話（後書き）

これで原作第2巻が終了です

第22話（前書き）

今回の話は、短編みたいなもので本編と関係はありません

第22話

問 【?】と【?】に当てはまる語を答えてください

『マザー(母)から【?】を取ったら【?】(他人)です』

姫路瑞希の答え

『マザー(母)から【M】を取ったら【other】(他人)です』

風見星の答え

『マザー(母)から【M】を取ったら【other】(他人)です』

教師のコメント

その通りです、Motherから『M』がなくなるとother(他人)という単語になります

こういった関連付けによる覚え方も知っておくと便利でしょう

土屋康太の答え

『マザー(母)から【M】を取ったら【S】(他人)です』

教師のコメント

土屋君のお母さんが『MS』でも『SM』でも、先生はリアクシヨ
ンに困ります

吉井明久の答え

『マザー（母）から【お金】を取ったら【親子の縁を切られるの】
（他人）です』

教師のコメント

英語関係ないじゃないですか

～日常生活～

・風見星の場合

AM7:00、起床

P i P i P i P i P i P i P i P i

「ふわあ～……………」

AM7:20、朝食準備

「二人ともご飯だよ」

「腹減った〜、あと寝みい」

「顔を洗ってきたら？」

「おはようございます、兄さん」

「おはよう、空」

AM 8:00 登校

「行ってきます」

「「いつてらっしゅい」「」

AM 8:40、授業

「では、この問題を……吉井君、答えてください」

「え、えつと“楽しむ？”という意味だと いいですね」

「回答の語尾に自分の願望を付け加えないでください
それに回答に疑問を待たないでください、では……」

PM 12:30、昼食

「明久君、私のお弁当を食べてください！」

「ごめん、ちょっと用事があるので！」

「明久君!？」

「……何で、逃げてるの？」

「事情があるんだ……」

「そっなんだ」

PM 16:20、部活

「今日はこれを着てもらいます」

「部長?それ……は？」

「スクール水着」

「流石にやめてください！」

「冗談よ」

「よかった……」

「これは、木下君が着るから」

「ワシのも冗談であってほしいのじゃー!」

PM18:30、帰宅

「ただいま」

「おかえり、兄貴」

「おかえりなさい、兄さん」

「夕飯の買い物してきたから遅くなった、今から作るからちょっと待ってね」

「私も手伝います」

「今日の夕飯は何?」

「ハンバーグに挑戦する」

「やったー!」

PM20:00、就寝

「おやすみ……………」

・吉井明久の場合

AM7:30、起床

「クー……………」

起床 できず

AM8:10、朝食

「……………」

朝食 抜き（原因：材料切れ）

AM8:15、登校

「……………おなか減った」

道端で栄養切れ

AM 11 : 20、運動

「吉井に坂本！また、お前らか！」

「雄二、鉄人に見つかったよ！」

「お前があの時、音を出したからだ！」

「雄二だって、声を出さなかったら！」

「貴様ら！待たんか〜！」

「「だれが待つか！」」

PM 12 : 30、昼食

「おなか減ったな、あるのはソルトウォーターだけだし……」

「明久君、もし良かったらお弁当が……」

「今日は僕、学食だから！それじゃ！」

「あつ、待って下さい〜！」

PM 16 : 30、遊び

「雄二、今日こそ勝たせてもらおうよ」

「お前が俺に勝てる分けないだろう？」

「僕だって日々成長しているだよ、雄二なんかとっくに抜かしているよ」

「言っじゃないか、そこまで言うのなら………覚悟は出来ているんだろ？」

「当然だ、行くぞ！」

「来い、明久！」

僕と雄二のボクシングゲームが始まる

PM 19:30、夕食

「今日はリッチにいきたいよね」

ご飯茶碗：パン粉、汁物：塩水、メイン：砂糖水、飲み物：水

「こうするだけでいつもの食事が豪勢に見えるんだよね、いただきます！」

AM 0:00、就寝

「クー……………」

・坂本雄二の場合

AM 6 : 30、起床

「……………昨日一緒に帰ってくれなかった」

「翔子？お前はそれだけで人の寝込みを襲うのか……………！」

起床（訂正）奇襲

AM 6 : 40、運動

「……………逃がさない」

「殺されてたまるかあーっ！」

……………ついでに発声練習

AM 7 : 20、朝食

『今日の朝ごはんは、翔子ちゃんにお願いしてあるからね 母より』

「だからアイツが侵入していたのか……………」

朝食 抜き

AM 8 : 00、登校

「……………投降しても許さない」

「理不尽だああっ！」

登校（訂正）投降

PM 12 : 30、昼食

「ラーメンとカツ丼と炒飯とカレーを頼む」

「……………いまなら妻による愛妻弁当があります」

「翔子！？何でここにいるんだよ！？」

「……………折角用意したのに」

「それは悪かったな、だからその緑色の卵焼きを俺の口に入れようとするな！」

「……………気のせい」

「無理があるだろ!？」

PM16:00、下校

「やっと、終わったか……………」

「……………雄二」

「ん？翔子か……………何か用か？」

「……………迎えに来た」

「そうか……………何で片手にスタンガンを持っているんだ？」

「……………抵抗出来ないようにするため」

「待て、昨日怒ったことはわかったからやめギヤアアアアアアアッ
!」

「……………連れて帰る」

PM18:00、帰宅

「ん？何だここは？見渡す限り鉄格子が……………」

「……………起きた？」

「翔子！ここはいつたい……………」

「……………雄二の部屋」

「明らかおかしいだろ！？」

PM19:00、帰宅

「やっと家に戻れた」

「あら雄二、おかえりなさい」

「ああ、ただい……………おふくろ、何をしているんだ？」

「何って？料理を……………」

「墨汁を使う料理はどこにもねえよ！」

「あら、ホントね醤油に似ていたから間違えたわ」

「入れ物の時点で気付けよ！」

PM 23:00、就寝

「こんな、毎日なんてウンザリだ……………」

・風見空の場合

AM 6:30、起床

「ふ……………」

彼女は部屋を出て……………

「兄さん……………（パシヤ）」

兄の寝顔を撮るのが日課である
彼女はブラコンである、そして……………

「吉井さん×坂本さん……………すごいですね」

……………ズボラである

AM 8:00、登校

「「いつてきます」

「いつてぶっしゃい」

PM 16:30、寄り道

「すみません」

「……いつらしゃい」

「これを……」

「……新作」

「ありがとうございます」

「……毎度あり」

ムツリ商会で兄の写真を手に入れていた（家での兄の写真コピーを渡している）

PM 17:00、帰宅

「おかえり、遅かったな？」

「部活がなかなか終わらなくて」

「おかえり、空」

「ただいま、兄さん」

PM19:30、整理

「これは……こっちですね」

整理（訂正）“兄の写真”整理をしていた

PM21:00、就寝

「おやすみなさい……」

第22話（後書き）

いまさらですけど……メインヒロインは誰がいいのでしょうか？

第23話

問 以下の（ ）にあてはまる歴史上の人物を答えなさい
楽市楽座や閑所の撤廃を行い、商工業や経済の発展を促したのは（ ）である

姫路瑞希の答え

『織田信長』

教師のコメント

正解です

風見星の答え

『おっさん』

島田美波の答え

『ちゃんまげ』

教師のコメント

日本にはもう慣れましたか？この回答を見て先生は少し不安になりました

吉井明久の答え

『ノブ』

教師のコメント
ちよつと慣れ慣れしいと思います

「明久に星」

「ん？なに、雄二」

「どうしたの坂本？」

「そういえば、例のチケットをどうした？」

「例のチケット？」

「もしかして………如月ハイランドのプレミアムチケットのこと？」

「ああ、確か今週末がプレイオープンの日のはずだが
姫路を誘って行ってみたいはしないのか、明久？」

「な、何を言っているのさ雄二！」

「まあ、別にいいがな」

それより、チケットはどうしたんだ？」

「私は……………両親に渡しました」

「は？何で親に渡したんだ？」

「なんでも、その日は会社が休みらしいから
カップル気分で行きたいって言うていたから渡した」

「へ……………親孝行じゃないか、明久はどうしたんだ？」

「丁度身近に結婚を考えている人がいたからね、その人にあげたよ」

「そんな人がいたんだ」

「都合が良いな、如月グループも喜ぶだろうしな」

「そうだね、うまくいけば全員が幸せだもんね」

「その人たちうまくいきそう？」

「うん、あとは時間ときっかけの問題だと思うんだ」

「そうか、うまくいくといいな」

「ホントだね」

「大丈夫、きつとうまくいくよ」

side 雄二

とある休日の朝

俺は目を覚ますと……

「……おはよう、雄二」

……ベッドの脇に翔子がいた

「……今日はいい天気」

翔子はカーテンを開いて、陽光が部屋の中に強く差し込んだ

「……朝ごはん、食べる？」

翔子はトレイにトーストとコーヒーが置いてある

今日はお袋がないから翔子が作りに来たのだろう

「……雄二、まだお眠む？」

「よいしょ、っと」

俺は目覚めたばかりの体を起こし翔子と向き合う

朝食を作りに来る時は起こすだけで俺の部屋までは持ってこない
とついうことは何か約束をしたか？でも覚えはない、だとすると…

……

「悪い翔子、俺の携帯を取ってくれ」

「……………はい」

俺は翔子から携帯を受け取り……………

ピツ、ポツ、パツ

PURURURU……………PURURURU……………ガチャ

「もしもし？警察ですか？」

不法侵入です

「……………雄二、コレは何？」

翔子の手には……………ムツツリー二すら唸らせた至高の一冊が！？

「なっ！…な、なんだそれは？俺はその本は知らないぞ」

よりもよってあの本か！っていつかどうやって見つけ出したんだ
！？

「……………雄二の机の三番目の引き出しの

二重底の下に参考書の表紙を被せて隠してあった」

今ほど明久の一人暮らしが羨ましいとおもったことはない

『もしもし、どうかしましたか？もしもし？』

「……………すみません、勘違いでした」

警察に助けを求めても無駄だったようだ

「……………この本は」

くそっ、取り返したら今度こそ絶対に見つからないように隠してやる
いっそのこと鍵でもつけて厳重に

「燃やすだけで許してあげる」

「さて、それは許した時の処分ではない」

「……………じゃあ、燃やしても許さない」

「どっちにしても燃やすのかよ！」

燃やさない選択肢はないのか！

「……………（ボオオオオオオ）」

「アアアアアアアアツ！せめて家の中で燃やさないでくれ！」

翔子は容赦なく俺の工口本を燃えカスへと変えた

「……………つで？朝っぱらからいったい何の用だ？」

コイツが俺の部屋に来た時点で何か用事があるに決まっている

「……………ちょっと待って」

翔子は鞆の中をあさり始めて、何かあったか？

「……………コソ」

そう言っって翔子が出したのは……………！！

「き、如月ハイランドのプレミアムチケット？ど、どうしてそれを
お前が？」

今の俺には地獄への片道キップに見えてしまう

「……………優しい人がくれた」

頭の中にはアイツしか思い浮かばない！

『HA！HA！HA！HA！……………』

頭の中にアイツの笑い声が聞こえている

「そ、それを持っているのは明久ぐらいなんだがな！」

『Oh、Oh、Oh、Oh、僕じゃない、僕じゃない……………』

頭の中の明久が必死に否定しているが遅いわボケエ！

「……………？雄二、何処に掛けているの？」

「ちよつとゲス野郎に用ができたんだ」

携帯の番号通知をOFFにして明久の番号を呼び出す

『はいもしもし？どちらさまですか？』

『……………キサマヲコロス』

『え！？なにになに！？本当にだれ！？メチャクチャ怖

（ブツ

ッ
』

電話の向こうで狼狽する声が聞こえるが通話を切る、少しだけ気分が晴れた

「……………じゃあ、行こう？雄二」

翔子が俺に向けて手を伸ばす、余程行きたいのだろう

「嫌だ」

俺は今回の話は絶対に断る、普通のアミューズメントパークなら考えても

良いのだが、これは如月グループの企みが存在し“カップルを強引に結婚させる”如月グループの力がある、そんな事態は絶対に避けなければならぬ

「……………雄二の嘘つき」

「俺は約束なんてしてないねえ」

「……………試召戦争で勝ったら私と付き合いつと約束してくれた」

「そんなもん、もう忘れた」

「……………選んで」

翔子を取り出したのは……………結婚式場の案内パンフ

「すまん、話の流れがさっぱりわからない」

「……………約束を破ったら即拳式って誓ってくれた」

「約束の内容が変わってないか!？」

内容がかなりヤバいことになっている

「……………雄二、早く選んで、予約するから」

「く……………っ!」

どちらを選んでも結婚の話がチラつく恐ろしいこの状況
だが、この程度の困難に屈する俺ではない、なんとかして脱出を

「……………俺は……………無力だ……………」

電車とバスで二時間ほどかけ、如月ハイランドの前にいた

「……………やっとついた」

嬉しそうにアミューズメントパークを見ている翔子

……ふむ、そんな姿を見ると少しは遠くから連れてきた甲斐もあるかもしれない

「よし、それじゃ、翔子」

「……………うん」

「帰ろう」

ミシッ

俺の最後の抵抗は空しく終えた

「……………ダメ、絶対に入る」

「はっはっは、翔子

俺の肘関節はそっち側に曲がらないぞ？」

まずいな、指先の感覚がなくなってきた

「……………恋人同士は皆こうしている」

「待て翔子！お前は組むという仲睦まじい行為とサブミッションを同様に考えていないか！？」

「……………???」

疑問符を浮かべているとは、なんて恐ろしい女だ

「……………とにかく、入る」

「ぐあつ！せめて関節技を解いてから歩いてくれ！肘が逆方向を向いてしまう！」

左腕を人質に取られたまま入場ゲートへと連行される

俺はこれから起きること身の安全を守る術を考えていた

一方で

「こちらスカル1、ターゲットを発見した」

「……………こちらスカル2、目標が入場ゲートへと入る」

「スカル3、お化け屋敷の準備が整ったのじゃ」

「こちらスカル4です、本当にいいのでしょうか？」

「こちらスカル5、私も同意見です」

「スカル1よりみんなへ、これは“雄二と霧島さんをくっ付ける作戦”なんだ

霧島さんの為にも雄二をウェディングシフトの用意まで無事に成功させるんだ！」

「いいのかな……？」

「みんな、やるぞー！」

「「「おーーーーっ！」「」」

「（ごめん坂本、皆を止めることができないや）」

第24話(前書き)

如月ハイランド後編

作者の一言・書きすぎた

もう少しで10000文字に行くとこころでした

第24話

〈文月新聞〉

二年F組 吉井明久さんのコメント

僕が小さい頃、祖父がよくこう言っていました

『明久、泥棒でも何でもいい
一番を目指して精進しなさい』

今、僕は天国にいる祖父にこのことを教えてあげたいと思います

爺ちゃん……………これで、いいかい……………？

以上、

【女装が似合いそうな男子ランキングNo.1】

【こいつにだけはバカと言われたくない生徒ランキングNo.1】

【モテそうな男子（同姓愛編）ランキングNo.1】

の三冠を達成した吉井明久さんからのコメントでした

尚、女装が似合いそうな男子にノミネートされていた木下秀吉さんと
風見星さんは審議の結果、アンフェアであるとの結論に達した為除外されています

Side 雄二

翔子に連行されたまま入場ゲートへ入る、特に待つこともなく係員の青年の前に進む

「いらっしゃいませ！如月ハイランドへようこそ！」

若干訛りの混じった口調で出迎える、帽子を深くかぶっているので表情が見えない

如月ハイランドの係員………何だか聞いたことがある声だな？気のせいかな？

「本日はプレーンオープンなのですが、チケットはお持ちですか？」

「……………はい」

「拝見しマース」

係員はチケットを受け取って俺達を見る

「……………そのチケット、使えないの……………？」

「イエイエ、そんなコトはないデスよ？デスが、ちょっとお待ちくだサイ」

係員はポケットから携帯を取り出し、俺達に背を向け電話をし始めた

「……………私です、スカル5よりみんなへ

ターゲットが来ました、ウェディングシフトの準備を始めてください」

「おいコラ、なんだその不穏当な会話は」

この係員、まさか例のジnkusを作る為の職員か？

「……………ウェディングシフト？」

如月グループの企みを知らない翔子にはよくわからない単語だろ

「気にしないデくだサーイ、コッチの話デース」

元の雰囲気に戻る係員、やはりどこかで聞いたことがある声だ

「アンタさつき電話で流暢に日本語を話していなかったか？」

「オ、オーウ、日本語はむ、むつかしくてワカリませーン」

動揺しているな、あからさまに怪しい

「ところで、そのウエディングシフトとやらは必要ないぞ
入場だけさせてくれたらあとは放っておいてくれていい」

向こうのやるうとしていいことはよくわかった

だが、そんなことに乗る気はない！そうしないと、俺の人生が……
……！

「そ、そんなコト言わずニ、おもてナシもさせていただきマース」

「不要だ」

「そこをナントカ……」

「ダメだ」

「この通りデース」

「却下だ」

「……もし、断れば」

「断れば？」

何と言われても絶対にことわ

「アナタの実家に腐ったザリガニを大量に送ります！」

「やめろっ！そんなことをされたら我が家は食中毒で大変なことになるってしまっ！」

これは断れない！あの母親なら間違いなく伊勢海老と勘違いをして食卓に上げるだろう

なんて恐ろしい脅迫をしてくれるんだ！しかも最後は思いつき日本語じゃねえか！

「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」

「……………記念写真？」

「ハイ、サイコーにお似合いのお二人の愛のメモリーを残しマース」

「……………雄二と、お似合い……………（ポッ）」

翔子は仄かに頬を赤らめていた

「お待たせしました、カメラです」

そこに帽子を深くかぶったスタッフがカメラを片手に現れた
なんだか見覚えのあるヤツだな、帽子で顔を隠しているのが怪しい
が……………

「アナタが持ってきたのデスか？ありがとうございマス、助かりマス」

例を言いながらカメラをスタッフから受け取る、やはり妙だ

コンビニならともかく、客の前で同僚に丁寧な礼を言うのだろうか？

ふむ、少し試してみるか

「悪いがちょっと電話させてくれ」

「？わかりまシタ」

携帯を取り出し、番号非通知で電話をかける

P r r r r r r r r r r P r r r r r r r r r r

「すみません、僕の携帯ですね」

「あつ、それは……」

すると、先ほどカメラを持ってきたスタッフの尻ポケットから電子音が響きだした、ビンゴだ

「……………いよう明久、テメエ、面白いことしてるじゃねえか……………
……………」

「人違いですっ」

ダッ！

「あつコラ！逃げるなテメエ！ええい、放せこの似非外国人！」

「彼はこのスタッフのエリザベート・ハナコ（三十五歳）、通称スティーヴです！」

吉井なんとかさんではありません！それに私はちゃんとした外国人です！」

「黙れ！人種性別年齢氏名全てに堂々とウソをつくな！しかもどう考えてもその

名称で通称スティーヴはないだろ！ついでに俺は吉井なんて苗字は一言も言つて

いない！それに星！なんでお前がここで似非外国人を演じているんだ！」

係員が俺を抑えるときに帽子が取れ、そこには星の顔があつた

あの野郎、絶対に俺をハメる気だ………！俺の人生をなんだと思つていやがる！

さてはいつもの仕返しか！？スタッフになりすましている時点であり大掛かりな話だ

明久の単独行動とは考えにくい、ババア
もとい学園長も一枚噛んでいるな

あのババアには貸しがあるから、明久が頼めば断れないだろうしな
いや、ババアだけじゃない、他にも協力者がいる可能性が高い

「翔子、すまんちょっと我慢してくれ」

「……………???」

翔子のスカートをギリギリの高さまで持ち上げる

「……………っ！！（キラッ）」

その瞬間、カメラを片手に現れる人影があった

「やはりムツツリーニも来ていたか」

明久とムツツリーニがいるのなら、他のヤツらもいるはずだ

「……………雄二のえっち」

「なっ！？ち、違っぞ翔子！さっきのは悪かったから……………！！」

「……………続きはベッドで」

「だから違っつて言っているだろ！俺はお前の下着になんか微塵も興味がないっ！」

「……………それは許さない」

「ぐああああああっ！理不尽だああっ！」

翔子の握力で俺の頭蓋が軋む音が聞こえた

「……………チーズ（パシャ）」

近くでフラッシュが焚かれ、ピピツという電子音が聞こえ
写真が印刷されるまで翔子にアイアンクローを喰らっている状態で
待機させられた

「はい、どっぴん」

程なくして似非外 星が写真を持って戻ってきた、それと同時に解放される俺
ばれても役を演じているのは流石と言っておこう

「……………ありがとう」

翔子は嬉しそうに写真を見ている

「……………雄二、見て、私達の思い出」

翔子が持っている写真を俺に見せてくれる

「どれどれ……………なんだ、この写真は」

写っているのは翔子にアイアンクローを受けて悶える俺、そして

「サービスで加工も入れておきますタ」

二人を囲うようなハートマークと『私達、結婚します』という文字
……………どう見てもこの二人に幸せは訪れそうにない

「コレをパークの写真館に飾っても良いデスカ？」

「キサマ正気か！？コレを飾ることでここに何のメリットがあるというんだ！」

来る客はドン引き間違いなしだ

「……………雄二、照れてる？」

「この写真に照れる要素なんて見当たらない」

なんて写真を見ていると

『あぁっ！写真撮影してる！アタシらも取ってもらおうよ』

『オレたちの結婚の記念に、か？そうだな、おい係員、オレたちも写ってやんよ』

チャライカップルがやってきたな

「すみません、こちらは特別企画でスので……………」

あの撮影はどうやら例のウェディングギフトとやらの対象みたいだ

『あぁっ！？いいじゃねーか！オレたちはオ・キャ・ク・サ・マだぞコルア！』

『きゃーっ、リユータ、かっこいいーっ！』

星を威嚇する二人は、絵に描いたようなチンピラだな

『だいたいよお』

あんなダッセエジャリよりもオレたちを写した方がココの評判が良
くね?。」

『そうよっ! あんなアタマの悪そうなオトコよりも
リュータの方が百倍はカッコイイんだからあ!』

星に注意が引いている間に逃げるか

アイツはこの手のチンピラには容赦がないのはこの前の喫茶店でわ
かっている

「…………… (ツカツカツカ) 」

「っておい、翔子、どこに行くんだ」

「…………… あの二人、雄二のことを悪く言ったから」

「そんなの気にするな」

「…………… 雄二がそう言っのなら」

翔子もその光景が嫌だったようで、促すと淡々とついていた

『…………… さつきからお客様、お客様と五月蠅いですね、営業妨害で
訴えますよ?』

『ああっ!?!?』

『何言ってるの? アタシたちはオキヤクサマなんだからねっ!』

『もしもし? 警察ですか? 営業妨害のお客さんがいるのですが……………』

……」

せめて大事にならないことを祈りたい

（side 星）

まったく、あの二人の所為で見失ったじゃないか

さて、坂本は………いたね、フィーの着ぐるみを着ている姫路さんを見つけた

お化け屋敷に行くようお願いしても坂本が断っているね、どうしよう………

『そこまでだ雄二　　じゃなくって、そのブサイクな男っ！』

そこに現れたのは………頭部が逆になっているノインだ

………吉井よ、着替える時に視界が真っ暗だったことに気付かなかったの？

しかたがない、私になんとかするか

「ハイ、すいませーン、お待たせしまシタ」

この口調って以外に難しいんだよね

「坂本雄二サン、お化け屋敷に行つて下サイ」

「だからイヤだと言っているだろうが」

また断る……………

「断れば、アナタの実家にプチプチの梱包材を大量に送りマース」

地味な嫌がらせだけど、なんとかなるかな？

「やめろっ！そんなことをされたら我が家はの家事が全て滞つてしまっ！」

……………ザリガニの時にも思ったけど、坂本の家庭が気になる

離れたところではキツネの痴話喧嘩という珍しい光景が展開されている

あの二人は作戦を忘れてるんじゃない？さて、行くように誘導しない

「坂本翔子サン、お化け屋敷は彼氏に抱きつき放題デスよ？」

なにかの雑誌で書いてあったことを霧島さんに言っておく

「……………雄二、お化け屋敷に行きたい」

誘導は成功した、坂本が何か言っているが次の準備で忙しいので無視する

「では、こちらにサインして下さい」

坂本に書類とボールペンを渡す、坂本が疑うような目で見てくる

「ただの誓約書デース」

そう“ただの”誓約書だ

「だがまあ、面白そうではあるな」

そして、坂本は書類を読んでいく

「なになに、【誓約書】私、坂本雄二は霧島翔子を妻として生涯愛し苦楽を共にすることを誓います……………」

「……………はい雄二、実印」

「朱肉はこちらデース」

「俺だけか！？俺だけがこの状況をおかしいと思っているのか!？」

なにを今さら

「冗談です、誓約書はいいので中に入れて下さい」

「……………うん、冗談」

「カーボン紙を入れて写しまで用意しているくせに冗談と言っているのか」

「ごめん、それには気付かなかった」

「それデハ、邪魔になりそうなノデその大きなカバンをお預かりし
マース」

「……………お願い」

霧島さんからカバンを受け取る、カバンにしては少し重いな

「……………零れちゃうから、横にしないで欲しい」

「このカバンをですか？わかりまシタ」

零れるということは、中身は飲み物かな？

「デハ、行ってらっシャイマセ」

後ろから二人を見送り、扉が閉まりそうだったので連絡を入れる

『スカラ5よりスカル3へ、ターゲットが入りました、後はよろしく
お願いします』

『こちらスカル3、了解じゃ』

さて、秀吉に連絡を入れたので二人が戻ってくるまで暇だなお化け屋敷に仕掛けた監視カメラの映像でも見るか、携帯を開き監視カメラに繋げる

『……………ちよつと怖い』

『「じつじつものあまりビビらないお前が怖がるなんて、珍しいな』

『……………そうかも』

ちゃんと怖がっているみたいだ、『危機的状況に陥った男女は強い絆が結ばれる』

とある雑誌で読んで吉井に頼んだら最高の考えがあると言ってこのお化け屋敷を
選んだみただけど、大丈夫かな？

【 じの方が よりも 】

これは……………秀吉の声真似？坂本の声で何を言っているのだろうか？
吉井の言っていたことは、自分の声が聞こえる恐怖？あんまり迫力は……………

【 姫路の方が翔子よりも好みだな。胸も大きいし 】

……………

『……………雄二、覚悟、できてる……………？』

『怖えっ！翔子が般若のような形相に！確かにこれはスリル満点の演出だ！』

ごめん坂本、今の私には謝ることしかできないや

バツ！

霧島さんの後ろで何かの仕掛けが作動する

『翔子！何か出てきたぞ！』

坂本も音のした方を見ると、そこには大量の……………

『……………気が利いている』

……………釘バット？

『畜生っ！よりもよって処刑道具まで用意しているとは！

全く趣旨は違うが最強に恐ろしいお化け屋敷だっ！』

『……………雄二、逃がさない』

ごめんね……………今度何か奢ってあげるから

坂本の恐怖の追いかけっこは一時間近く行われていた

「お疲れサマでシタ、どうでシた力？結婚したくなりまシタか？」

「アレと結婚を結びつけて考えることができるのはお前と明久ぐら
いだらうな……………」

台本通りの台詞を言っているの、だから許して

「……………そろそろお昼」

腕時計を見ると確かにお昼の時間だ、案内をしないと

「……………あの、私のバッグ」

「デハ、豪華なランチを用意してありますので、こちらへいらして下サイ」

霧島さんが何か言おうとしたことを遮ってしまった、悪いことをしたな

二人を如月ハイランドのレストランへと案内する

「コチラでランチをお楽しみ下サイ」

二人をレストランへと入れ、後はボーイ役の秀吉に任せる

流石は秀吉だ、吉井みたいに携帯でばれそうになっても噴水に携帯を投げ入れるとは

……………電源を切ればよかったのに

《皆様、本日は如月ハイランドのプレオープンイベントへご参加頂き誠にありがとうございます！》

坂本と霧島さんがデザートを食べ終えた瞬間にアナウンスの音が響いた

今度はアナウンス役をやることになった私です、私だけ何故二役もするのでしょう？

《実は、なんとこの会場には

結婚を前提にお付き合いをしている高校生カップルがいらっしゃいます！》

坂本が飲んでいる水を噴き出した

《そこで、そんな二人を応援する為の催しを企画させて頂きました
題して、【如月ハイランドウェディング体験】プレゼントクイズ
〜!》

ドンドンパフパフ

《出題する全五問に全て正解いたしましたら、なんと
最高級のウェディングプランを体験することが出来ます
希望によってはそのまま入籍してもかまいません》

坂本が騒いでいるが台詞はまだあるので話します

《それでは、坂本雄二さん&翔子さん!前方のステージへとお進み
下さい!》

坂本は霧島さんに関節を極められながらステージに上がり回答席に
座っている

《それでは【如月ハイランドウェディング体験】プレゼントクイズ
を始めます!》

さて、問題は……………って何コレ?こんな問題でいいの?

《では、第一問!》

第一問は……………

《坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうかっ?》

ちなみに答えの欄には“任せた”としか書いてない

ピンポーン

《はいっ! 答えをどうぞっ!》

「……………毎日が記念日」

「やめてくれ翔子! 恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ!」

《お見事! 正解です!》

坂本が睨みつけてきたので私は目で“ゴメン”と伝えた

《第二問! お二人の結婚式はどちらで挙げられるのでしょうか?》

答えの欄には鳳凰の間と書いてあり……………

ピンポーン

《はいっ! 答えをどうぞっ!》

「鯖の味噌煮!」

《正解です!》

「なにいつ!?!」

《お二人の拳式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間
別名【鯖の味噌煮】で行われる予定です!》

「待ていつ!絶対その別名はこの場で命名したたる!強引にも程があるぞ!」

だって答えの欄に鳳凰の間(別名:回答者の答え)って書いてあるんだよ

《第三問!お二人の出会いはどこでしょうか?》

これにはちゃんとした答えが書いてある

坂本がボタンを押そうとしたら……

「……………させない」

ブスッ

なんて痛い音なんでしょう、坂本が痛すぎて目を押さえています

ピンポーン

《はいつ!答えをどうぞっ!》

「……………小学校」

《正解です!お二人は小学校の頃からの長い付き合いで今日の結婚にまで至る

という、なんとも仲睦まじい幼なじみなのです!》

現状はそうには見えないけどね、回答は坂本のお母さんから頂きました

次の問題の回答は……………これはないだろ

《第四問参ります！》

ピンポン

「 わかり」

《正解です！それでは最終問題です！》

第四問の答えは“何でも正解”という酷い答えであった
さて、最終問題は

『ちょっとおかしくな〜い？アタシら結婚する予定なのに
どうしてそんなコーコーサーだけがトクベツ扱いなワケ〜？』

またか……………チンピラカップルめ

『あの、お客様、イベントの最中ですので、どうか 』

『あぁっ！？グダグダとうるせーんだよ！オレたちやオキヤクサマ
だぞコルアー！』

やはり頭の悪いチンピラだな、さっきは警察を呼んだらすぐ逃げた
くせに

自分のことしか考えていない人だしな警察に突き出しても問題はな
いだろっ

『アタシらもウェディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど？』

『で、ですが』

『ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルア！』

オレたちもクイズ大会に参加してやるって言うって言ってんだボケがっ！』

『うんうんっ！じゃあ、こうしよーよ！アタシらがあの二人に問題出すから』

答えられたらあの二人の勝ち、間違えたらアタシらの勝ちってコトで！』

『そ、そんな』

別に良いんじゃないのかな？あの頭の悪いチンピラごときの問題が坂本や霧島さんが答えられないはずはないし』

『じゃあ、問題だ』

あのチンピラが出す問題なんて簡単に……………

『ヨーロッパの首都はどこか答えろっ！』

言葉を失った

『オラ、答えるよ、わかんねえのか？』

バカすぎて言葉がでない、ヨーロッパは国じゃないから首都はない

のに

《では、チンピラカップルさん？あなたは答えられるのですか？》

『答えられるに決まっていやがるだろうがっ！』

《汚い唾を飛ばさないでください、会場が汚れてしまいます

わかってているのならさっさと答えてくださいよ、チンピラカップル？》

『答えてやるうじゃねえか！答えはヨーロッパだろうがっ！』

『きゃーっ！リニュータカツコイイっ！』

バカがいるね、吉井よりも

《ヨーロッパは国ではないので首都はありませんよ？そんなこともわからない

人が問題を出さないでください、バカですし……それでは、坂本雄二さんと

翔子さんには【如月ハイランドウェディング体験】をプレゼント！》

チンピラが騒ぐが無視だ、あんなものに関わるのは人生の無駄だ

「おメデとございマス、ウェディング体験が当たるなんて、ラッキ―でスね」

「……………凄くうれしい」

いや〜頑張ったかいがあった

「翔子サン、ウェディング体験の準備があるノデこのスタッフについていってもらえマスか？」

霧島さんを如月グループの係員にお願いし、私は坂本と向き合っ

「ところで、何で星がここにいるんだ？」

「吉井達に頼みこまれて……………断れず」

「……………お前も、苦労しているな」

「今回だつて演劇の練習だつて秀吉に言われて」

「だからか……………まあそれはいいとして、俺はしばらく待たされるのか？」

「大丈夫、ちゃんと考えてあるから」

「考えだど？」

「坂本は逃走するだろうからつて……………コレを吉井から」

スタンガン（二十万ボルト）

「あ、明久ああああああっ！！！」

「じめん、坂本」

坂本をスタンガンで気絶させる

《それではいよいよ本日のメインイベント、ウェディング体験です！
皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎え下さい！》

会場全てに響き渡る程の拍手が聞こえてくる
こうちの何割かはサクラだが、一般入場者も拍手をしているようだ
新郎である坂本も入場したみたいだね

《それでは新郎のプロフィールの紹介を》

プロフィールの紹介を作ったのは誰だろう？えーっと……

《省略します》

“時間が無いので省略してください”って、用意できなかったんだね
チンピラがまた騒ぐが無視、私はチンピラが大嫌いだ

《それでは、いよいよ新婦のご登場です》

スポットライトが点され

《本イベントの主演、霧島翔子さんです！》

スポットライトが壇上の一点のみを照らし出す

そこから、ウエディングドレスを着た霧島さんが現れた

『……………綺麗』

会場から、誰のものともわからない台詞

だが、その言葉通り霧島さんの姿は綺麗である
なかなかいい雰囲気だね……………

『あーあ、つまんない！』

なんて空気を読めない人なんでしょう

『マジつままないこのイベントお』

人のノロケなんてどうでもいいかああ、早く演出とか見せてくれ
な〜い？』

『だよな〜お前のことなんてどうでもいいっての』

しかも、またチンピラカップルですか……………いい加減にしてほし
いですね

『ってか、お嫁さんが夢です、って、オマエいくつだよ？なに？

キャラ作り？ここのスタッフの脚本？バカみてえ、ぶっちゃけキモ
いんだよ！』

『純愛ごっこでもやってんの？そんなもの観る為に貴重な時間割いている

んじゃないんだケドおゝあのオンナ、マジでアタマおかしいんじゃない？

ギャグにしか思えないんだケドお』

『そっか！コレってコントじゃねえ？

あんなキモイ夢、ずっと持っているヤツなんていねえもんな！』

『え〜っ！？コレってコントなのお？だとしたら、超ウケるんだケドお〜！』

こいつらは……………！

《んだとテメエらっ！もういっぺん行ってみやがれ！》

《人の夢をバカにする権利はチンピラカップルにないですよ！》

《あ、明久君に風見君！落ち着いてっ！ステージが台無しになっちゃいます！》

許せん！この二人は許すことができない！だが、そんな短い間に…

……

《は、花嫁さん？花嫁さんはどちらに行かれたのですか？》

スタッフのアナウンスで気付いた、霧島さんがいつの間にかいなくなっていた

《霧島さん？霧島翔子さんっ！皆さん、花嫁を探して下さい！》
スタッフの人や吉井達と協力して探すが見つからない
そういえば、坂本は？私は辺りを見渡すと坂本が会場を出ようとしていた

「坂本！」

「……………星か……………どうした？」

坂本は片手に霧島さんが付けていたヴェールを持っている……………
…そういうことが

「……………しっかりと礼をしたら？」

「なんのことだ？……………まっ、思いつきりやってくるけどな」

坂本は会場を出ると目的地があるかのように走り出した

素直じゃないね、坂本は……………

週明けの学校にて

「おい、明久」

「ん？あはよう、雄二、どうしたの？」

「如月ハイランドでは随分と色々とやってくれたな」

「あははっ、何を言っているのさ、僕は一日中家でゲームをやっていたんだよ？」

如月ハイランドになんて行けるわけないじゃないか」

「……………そうか、お前がシラを切るならそれでもいいだろう」

「な、何を言っているのさ、変なヤツだな」

「ところで、お前にプレゼントがある」

「え？なにになに？」

「今話題の恋愛映画のペアチケットだ
気になる相手がいれば一緒に行くといい」

「ペアチケット？うん

そんなものもらっても、使い道に困って

「

「それじゃあな」

『あ、アキっ！そういえば、ウチ週末に映画を観たいと思っていたんだけど』

『あ、明久君っ！私も丁度観たい映画があっただけですけど！』

『ほえ？なにになに？どうして二人ともそんなに殺気だっているの！？このチケットは換金して生活費に痛ああっ！もげちゃう！人体の大事なパーツが色々と取れちゃうよ！』

「みんな、おは　　って、朝からいったい何が起きているの！？」

「星か……………お前も色々とやってくれたな？」

「えっと……………それは……………」

「……………だが、感謝している」

「騙され……………って、え？」

「お前は少なからず俺に協力してくれたからな」

「そっ？そっ言ってもらえるところね、ところで吉井のはいいの？」

「ほっとけ、あんなの……………」

「酷いね……………」

その後も、吉井の悲鳴は聞こえていた………

第24話（後書き）

ちなみに主人公は、如月ハイランドの乗り物の製作したので関係者で如月グループに事情を説明したら、すぐに了解しました

第25話

特別コラム↳鉄拳人生相談↳

「さて、このコーナーは鉄拳先生こと私西村宗一と」

「アシスタントこと私風見星が皆さんの悩みに応えていきたいと思っています！」

「よろしく頼むぞ」

「はい！」

「では、最初の相談にいつてみたいと思う」

「わかりました、最初の相談は………コレです！」

三年生 T村Y作さんのご相談

『鉄拳先生、ボクの悩みを聞いてください、実は僕には好きな人がいます

その人はとても可愛らしくて人気があります、ですがそのK下H吉さんは

どうやら戸籍上では のようなのです、これは同性愛になってしま
うのでしょうか

あと、最近転校してきたK見Sさんのことが気になっています、その人も

戸籍上では のようなのです、鉄拳先生、僕はどうしたら良いのか
教えて下さい』

「……………」

「最初から凄いい相談がきましたね」

「…………… すまない、いきなり凄いい相談がきたので困っている、正直、
このコラムを
引き受けなければ良かったと後悔しているくらいだ、君が好きにな
ったその相手
には双子の姉がいるはずだ、容姿に惚れたのであれば彼女に思いを
告げることだ」

「それは、双子の姉に失礼なのは？」

「生徒を守るためには私は鬼にもなろう……………話が逸れたな、もし
容姿ではなく
内面に惹かれたのであれば 冷静に考え直すことだ、一部の
生徒の間では
“彼は第三の性別『秀吉』である為同性愛ではない” という説があ
るが……………」

「それはもう個人名を出しているのでは？」

「決してその説に惑わされないように！
君が健全な学園生活を送れるように祈っている」

「もうその時点で健全な学園生活ではないでしょ」

「それに、君が気になっている人は“彼は第四の性別『星』である
為同性愛ではない”

という説もあるが……………」

「その説も決して惑わされなくてください！」

「ふー……………思ったよりも時間が経ったな」

「そうですね、続きは次回ですね」

「次は“まともな”相談を待っている」

「無理だと思えますけど……………では、皆さん、また次回」

とある昼休みの教室で

「バイト?」

「うん、星もどうかな?」

「いいけど……………何で?」

「実は……………」

話を聞いてみると、親からの仕送りがなくなって自分で稼ぐことになっただけ

ちょうど駅前の喫茶店【ラ・ペディス】がバイトの募集をしているので

その面接に行くらしい、ちなみにメンバーは吉井と坂本に秀吉と土屋、私

「時給は?」

特に予定はないけど、時給がどのくらいか知りたいので坂本に聞いてみる

「確か、今週土曜日だけの募集だったな

11:00~20:00勤務で8800円程度、未経験者歓迎とか

「……………それ、何かあるんじゃない?」

9時間勤務で8800円なんて、かなりの時給だよ?

「確かに珍しい募集じゃが、そう訝しむほどのことでもなかるう
大方、突然人員が減って急場をしのぐ為に募集をかけておる、と
かその程度じゃろ」

それだったらわかるね

未経験者を歓迎しているあたり、かなり切羽詰まった状況だよ

「そうと決まれば、早速今日の帰りに面接に行こうよ、募集が終わ
っちゃっても困るし」

「そうだな、そうすつか」

「了解じゃ」

「……………（コクリ）」

「それじゃ、放課後」

それから私たちは学校帰りに喫茶店に寄り、その場で面接を受けて
全員採用になった

「ああ……………よく来てくれたね……………今日一日宜しく頼むよ……………」

「は、はい、宜しく願います」

そしてアルバイトの土曜日

開店一時間前に集合した私たちを、店長は倒れそうなほどの弱々しい姿で迎えてくれた

（あの店長、大丈夫かな？）

（……………きかっけがあればすぐに樹海に向かいそう）

土屋の感想は合っている気がする、この人が橋にいたら通行人が声をかけるだろう

（これは噂なんだが…………この店長、どうやら奥さんと娘に逃げられたらしい）

坂本が声を潜めて言う

坂本？そんな噂は知っていても言ったら傷つくからダメだよ？

（あれ？でも、前に来た時はバイトの女の子も何人かいたはずだけど…………）

（その連中がどうしたのか知らないな、ここにいないってことは何かあったんだろ）

その人たちはやめちゃったのかな？店長はあんな状態だし…………

「それじゃあこれ、君たちの制服…………サイズが合わなかったら言うてね…………」

店長が私たち全員に置かれた制服を渡してくれる

「…………サイズが合いません…………」

渡された瞬間、吉井と坂本と土屋の声が重なった
サイズが合わないのはまだいいよ、こっちは……………

「性別が合いません（ぬ）」

私と秀吉はウエイトレスの制服を渡された、何故かサイズは合っている

「あれ…………？おかしいな…………きちんと目測したつもりだけど…………」

店長が首を傾げている、どう考えても目測で性別を間違えるのはおかしいでしょ

「店長、僕のは若干小さいだけですけど雄二とムツツリー二
じゃなくて

坂本と土屋のサイズは明らかに合っていないと思います」

確かに、坂本の制服はSサイズで土屋はLサイズという明らかにサイズが逆である

店長は目でも悪いのかな？そうでなければ、間違えたただけだろうか？

「そうかな…………でも、坂本君はSで、吉井君はMで

土屋君はEロ　　じゃなくてLサイズに見えたんだけど…………」

この店長は目測で人の性癖を見抜けるのか！？

「……………Eロなどに興味はない」

「なにいつ！？」

土屋はなんてウソを言うのだろう

私と秀吉は声は出していないが驚いた表情をしていると思う

「ムツツリーニ、いくらなんでもそのウソはないよ」

「そつだぞムツツリーニ、ウソは人を騙せる範囲でつくるものだ」

「……………（ブンブン）」

二人とも？いくらウソだからって、そこまで言わなくても……………

「まあ、それは置いといて僕のサイズは多分しだから、ムツツリー
ニと交換しますね」

「……………Mなら丁度いい」

「店長、俺はきつとLLになるので、交換してもらえますか？」

「そつか……………そつだよね……………うっかりして制服と性癖を間違えちゃ
つたよ……………」

なんて間違いなんだ、私たちの制服も交換しないと……………

「じゃから、ワシらのは性別が合わぬと言っておるのに……………」

「店長、私と秀吉の制服も交換……………」

「ん？……………君たちも早く着替えたら？」

ダメだこの店長、間違えに気付いていない
私と秀吉は制服を交換できず、そのままロッカー室に向かう

「お待たせ、三人とも」

「……………待たせた」

先に着替えていた吉井と土屋が出てくる
黒のズボンとYシャツに同じく黒のベストを重ねた…………ギャルソン
スタイルだっけ？

二人ともよく似合っているな……………

「ははっ、意外と似合うもんだな、それっぽいじゃないか」

「なかなかの男前じゃぞ、二人とも」

「その格好、似合ってるよ」

「そ、そうかな……………？」

「……………照れ臭い」

二人とも褒められて顔がちよっと赤いね、さて……………

「では、ワシらも着替えるとするかの」

「そつだな」

「さつさと着替えるね」

秀吉、坂本、私は制服を持ってロッカー室に入る

『バカ雄二！何を堂々と秀吉に星と一緒に着替えようとしているのさ！』

『……………万死に値する……………っ！』

吉井と土屋が急にドアを叩きながら声を出している

「お前らは何を言っているんだ？

一緒に着替えも何も、男同士なんだから全然問題ないだろうが」

坂本が呆れたような声で答える

確かに男同士なんだから問題はない、あの二人は何で怒鳴っているのだろう？

『雄二！それはあくまでも戸籍上の話だよ！』

「待つのじゃ明久！事実でもワシは男じゃぞ！？」

「そつだよ吉井！私も秀吉も男だよ！？」

流石に今の発言には否定しないといけない

「あー、わかったわかった

着替えが終わったら話を聞いてやるから、今は落ち着け二人とも」

そうだね、着替え終えてからじっくり話し合えばいいよね

『雄二っ！どうしても考えを改めないのなら』

「あん？突入はするなよ？ドアの弁償なんて冗談じゃないからな」

『霧島さんにこの状況を包み隠さず暴露する！』

ガチャッ

「俺は廊下で着替えよう」

流石に霧島さんは怖いか……

「むう……背中 của ファスナーが上がり……雄二

すまぬが少々手伝って うん？雄二はどこに行ったのじゃ？」

『悪いな秀吉、俺は自分の命が惜しいんだ』

祈りまで懸かっているんだね

「秀吉、私がやってあげるよ」

「そつかの？すまぬ」

「いいよ別に……」

着替えには意外と時間がかかってしまった

店長のところに向かう途中、廊下で着替えていた坂本と合流して一

緒に行く

「むう……………やはりこの制服は……………」

「諦める秀吉、これも仕事だ」

「演技をやるつもりでやればいいんだよ」

「……………確かにこれも給金のうち、諦めるかの……………」

「あ、三人とも、結構時間がかかって　　っ!？」

吉井がこちらの格好を見て驚いた

「すまぬ、この服は存外複雑な作りで、着付けに難儀しておったのじゃ」

私と秀吉の今の格好はヒラヒラのエプロンドレス……………歩きづらい

「ふ、二人とも、その……………凄く似合って　　」

「ディア・マイドウタアアアアアア　　ッッッ!！」

店長が両手を大きく広げて飛び込んできた!？」

「な、なんごとじゃ!？」

「い、いったい何が起きているの!？」

「て、店長!？何をトチ狂っているんですあ!？」

「ディア・マイドウタアアアアアア

ツツツ!」

言葉が通じない!

「仕方ない!雄二、迎撃を!」

「了か ダメだ、あたらねえ!なんて動きだ!？」

「ムツツリーニ!店長にスタンガン!」

「……………目標が絞れない……………!」

なんて動きだ、あの坂本と土屋が対応できないなんて!

「二人とも!」

「な、なんじゃ!？」

「店長の動きを止める!」父親に勝手に日記を読まれた思春期の女の子の

台詞を大声で叫ぶんだ

なんてピンポイントな台詞だ

「わかった」

「よ、よくわからんが了解じゃ!」

お互いにタイミングを合わせる、三、二、一……………!

『お父さんなんて、大っつつキライ！！！！』

「そうかつ！それじゃお父さんと一緒にお風呂に入るうつ！」

会話が成り立っていない！むしろ悪化している！

「こうなったら実力行使しかない！

二人は下がって急いで服を着替えて！雄二、ムツツリーニ！全力で行くよ！」

「了解っ！！！！」

「ディア・マイドウタアアアアアアア ツツツ！！！」

急いで服を着替える為、私と秀吉はロッカー室に向かった

「で、どうしようか」

「どうするもクソも、店長がこんなじゃ何も

できないだろ『本日臨時休業』とでも書いて入口に貼っておこうぜ」

先ほどまで暴れていた店長は、白目を剥いて倒れている

幸いにも店内の被害は特になかったが、私たち五人でこのまま店を開けるには無理がある

初めてのバイトはとても危険なものになりそうです

第25話（後書き）

前回の話・星がキャラ崩壊したと思うので謝罪します、すみません

第26話

特別コラム〜鉄拳人生相談〜

「さて、このコーナーは鉄拳先生こと私西村宗一と」

「アシスタントこと私風見星が皆さんの悩みに応えていきたいと思っています！」

「今回は“まともな”相談であることを期待している」

「前回のがアレでしたからね」

「それでは今回の相談にいつてみたいと思う」

「今回もまともじゃない気がしますが……
わかりました、今回の相談は………コレです！」

二年生 K保丁光さんのご相談

『最近、寝ても覚めても僕の頭から離れない人がいます彼
Y井A久君が

笑う姿を見ると僕も幸せな気持ちになり、彼が沈んだ表情をしてい
ると僕も悲しく
なります、相手は同姓なのですが………この気持ちは恋愛感情な
のでしょうか』

「……………今回も同性愛の相談ですね」

「なぜこのような相談しかこないのだ！」

「そんなこと言わずに……………この相談にどう答えますか？」

「そうだな……………君はここ最近の間に強く頭を打っていないだろうか、記憶にない

としても念の為に病院で診察を受けることを推奨する、同性愛云々の話はその後だ！」

「たぶん彼は勉強のしすぎで脳が疲れているのだと思います」

「確かにそうかもしれない……………皆も勉強もいいが偶に息抜きもするように」

「コレで今回の相談は終わりです」

「次回の相談は“まとも”で合ってほしいと私は祈っている」

「無理だと思いますが……………それでは皆さん、また次回」

（side 畢）

店長を吉井と坂本と土屋の三人がかりで沈めたが
このままでは店を開店することができず、バイトを諦めていた

「バイトはまたの機会じゃな」

「そうだね」

ちなみに私と秀吉はエプロンドレスからギャルソンスタイルに着替
えた

「仕方ないな、また他のバイトを探すとするか」

「……………残念」

「え？つてことは、バイト代は」

「出るわけないだろ、働いてないんだから」

「そ、そつか……………そうだよね」

とても残念だな……………バイト代はともかく働きたかったな……………

カランコロソ

ん？お客さんかな？今日は臨時休業と言って帰ってもら

「いらっしやませ」

って、なにタイミングよく挨拶しているのは誰！？

「良かった、あいているみたい、時間潰す場所なくて困ってたのよ
ね」

「ほんと、助かったね」

さっき言ったのは吉井か！今さら『本日休業です』だなんて言えな
いよ

（おい明久！何を勝手に招き入れているんだ！？）

（「う、ごめん！わざとじゃないんだ！ちよつと頭の中で
シミュレーションをしていたらタイミングよくお客さんが来ちゃっ
たから……！」）

あまりにもタイミングが良すぎるでしょ！

（参ったのう、もはや追い返すこともできぬような雰囲気じゃし……
…）

（二つなったら……）

（……………店長が目を覚ますまで頑張るしかない）

(うう……ごめん……)

(やれやれ、仕方ないな……まあ、メニューを限定したらなんとかなるかもしれないし)

できるだけやってみるか、明久と秀吉、星はウェイター、ムッツリーニはキッチンを

頼む、俺はドリンク関連を担当する)

(了解じゃ)

(はい)

(………わかった)

坂本はカウンターに入り、土屋はキッチンへ向かい私と吉井と秀吉はウェイターなのでホールに残る

(まずワシが行くから、お主らは次に来た時の準備を頼む)

(わかった)

(うん、わかったよ)

秀吉はメニューを片手にお客さんの前に歩き出す

「二名様ですね？それでは、こちらへどうぞ」

お客さんを席へ案内し、一旦その場を離れ、お水をトレイに載せて再びその席に向かう

「ご注文がお決まりになりましたらお呼び下さい」

お客さんは特に違和感ないみたいだし……完璧だ

「流石秀吉、違和感が全くなかったよ」

「完璧だね」

「うむ、舞台じゃと思えばどうということもないからの
むしろ観ている人数が少ない分余裕があるくらいじゃ」

「なるほど……演劇のつもりでやれば多少やりやすくなるね」

それに、この前の学園祭の喫茶店と同じようにやればいいよね

「よしっ、僕も頑張るぞっ」

「その意気じゃ……が、あまり気負いすぎるでないぞ
緊張は身体の動きや滑舌に影響を与えるからの」

「リラックスすれば、失敗は少なくなるよ」

秀吉が演劇部での注意を言ったので、それに便乗し吉井にアドバイ
スを送っておく

カランコロン

次のお客さんが来たみたいだね

「私が行くね」

吉井より先にお客さんの前に行く、今の吉井だとミスをしそうだ

「いらっしやいませ」

お客さんはO.L.さんで、三人いる

「三名様ですね？それでは、席へ案内します」

お客さんを席に案内して、お水をトレイに載せて持っていく……あつ、メニュー忘れてた

その後、お客さんにメニューを持っていき、秀吉たちのところに戻る

「ゴメン、メニューを忘れてた」

「じゃが、なかなかよかつたぞ」

「そうだね、気にしなくていいよ」

次からはメニューを忘れないようにしよう

カランコロン

次のお客さんも来たみたいだ

「今度は僕が行ってくるよ」

「頑張つてね」

「くれぐれも緊張せぬようにな」

『すいませーん』

最初に来たお客さんの注文が決まったみたいだ

「秀吉、ちよつと行ってくる」

「了解じゃ」

先ほど注文が決まったお客さんの席に向かう

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「エスプレッソ二つとレモンティーと季節のシャーベットを三つ下さい」

「畏まりました、ご注文の方を繰り返させてもらいます
エスプレッソ二つとレモンティーと季節のシャーベットの三つでよろしいでしょうか？」

「お願いしまゝです」

「わかりました、少々お待ち下さい」

メモを取り、キッチンへ向かう

「エスプレッソを二つ、レモンティーを一つ、季節のシャーベットを三つ」

「あいよ」

「……………（コクリ）」

注文を伝えたら、坂本と土屋が動き出す
ん？吉井も注文を取って戻ってきたみたいだ

「ホットココア、オレンジジュース、ミルクティー、チーズケーキ
ホットケーキ、モンブランを一つずつと……………」

吉井もうまく注文を取ることが

「……………頑張つてを三つ」

商品で無い物が聞こえた

「……………なんで客に励まされているんだ？」

「……………早速何かあった？」

「……………そんな商品はないよ？」

その後、吉井が料理をお客さんに持っていたら『よくできたね』と
聞こえた

それから少し時間が流れ……………

カランコロン

「いらっしやいませ、何名様ですか？」

学園祭の時のように忙しくなく、いいペースでお客様が入ってくる
今度きたお客さんは初めて男性客である、ここって結構女性のお客
さんが多いんだよね

「いらっしやいませ、何名様ですか？」

「おう、二人だ　　って吉井か！？お前何やってるんだ！？」

やってきたお客さんは吉井を見て驚いている、この声もしかして…

………！

「ああっ！変態先輩だ！」

「吉井、違うよ！チンピラB先輩とチンピラ坊主だ！」

「どつちも人の名前じゃねえだろ！？」

「常村と夏川だ！どつちも記憶力しているんだ！？」

そんな記憶力です

「すみませんでした」

「失礼しました、お席にご案内します」

「本当に失礼だぞ………」

いくらチンピラとは言え、今は“一応”お客様だから頭を下げておく

「おい、三人とも」

カウンター越しに坂本が話しかけてきた

「どうしたの雄二？」

「ドリンクなんだが、今日はミルクの搬入が遅れているようで
もう在庫がない、注文が入ったら気をつけてくれ」

牛乳がないのか……………注文が入ったら気をつけないと

「わかった」

「了解じゃ、ミルクを使うものには気をつけよう」

「ああ、宜しく頼む」

言い終えたら坂本はカウンターの奥に戻った

『すいませーん』

お客さんから声がかかる、あそこは秀吉の担当のお客さんだ

「はい、只今伺います」

秀吉がメモを片手に注文を取りに行く

『お決まりでしょうか？』

『はい、えっと、アイスコーヒーとアイスミルクティーを一つずつ』

『申し訳御座いません、只今ミルクを切らしておりまして
アイスミルクティーはアイスティーになってしまつたのですが、宜
しいでしょうか?』

『あ、そうなんです、それじゃ、アイスティーでいいです』

『畏まりました、アイスコーヒーとアイスティーですね、少々お待ち
下さい』

一礼して秀吉が戻ってくる

「うまくいったね」

「うむ、……………ん? 明久は注文かの?」

「うん」

吉井は今チンピラBとチンピラ坊主のところに行っている

『お決まりですか?』

吉井の注文を取る声が聞こえる

『ああ、俺はアイスコーヒー』

『俺はアイスミルクだ』

ミルクが出たけど吉井はうまく対応できるかな?

『お客様、申し訳ありません』

『ん？なんだ？』

『只今ミルクを切らしておりまして』

うんうん

『アイスミルクはアイスになってしまいます、ご了承ください』

ただの氷だよね！？

『それただの氷だろ！？』

『では、少々お待ち下さい』

『話聞けよ！』

これは怒るよ……………

『すいませーん』

「はい、ただいま」

お客さんが呼んでいるので注文を取りに行き、再びカウンターに戻ろうとした時……………

「「「つつ！？」」」

「「あ……………」」

チンピラ坊主の投げたコーヒーの中身が私と秀吉かかり
シャツがコーヒー色に染まっていくな、気持ち悪いな……………」

「す、すまねえ、アンタらを狙ったわけじゃねえんだ……………」

チンピラ坊主は頭を下げて謝罪している
行為でやったのなら切れているところである

「いえ、お気になさらず、お客様」

「大丈夫です」

笑顔で返してあげよう……………殺意を込めて

(巻き込んでごめん、二人とも)

(なに、気にするでない、着替えれば済むことじゃ)

(そう言ってもらえると助かるよ)

(それじゃ着替えてくるね)

(うん、わかったよ)

吉井と小声で話した後、着替えをする為にロッカールームに向かう

替えの制服ってまだあったっけ？

着替えに時間がかかり再びホールに戻つてくると、そこは……

「……………何コレ？」

戻ってきたら、霧島さんが坂本に攻撃態勢をとっており

吉井は島田さんと姫路さんに追い詰められて、土屋がデジカメのシッターを切る

光景が目の前で繰り広げられている、……………ここって喫茶店だよな？

カランコロン

あっ、お客さんだ、マズイ……………この光景はいろいろと……………！

「ごめんね、遅れちゃった　　って、皆何をしているの……………？」

そこに来たのは木下優子さん、秀吉の双子の姉である

最近、秀吉の家に行くことが多くてよく会うんだよね……………
間違えて木下さんの部屋に入った時は木下さんの趣味に驚いたけど

木下さんが来たことでその場はなんとか収まった、よかった……………

「うむうむ、姉上も良いこと言っつもの」

「そつだね秀吉お姉さんのおかげで助かった　　って、その格好はどうしたの？」

今の格好は最初に着ていたエプロンドレスだ

「うむ、それがじゃな

サイズの合う替えの制服が見つからなかったので、こっちで代用しておるのじゃ」

「そうなんだよね、他のサイズは大きいのばかりで合うのがコレしかなかったんだよ」

「まあ、いいんじゃない？」

お客さんもウェイトレス姿の方が嬉しいだろうし」

「そういつものかのう？」

「そういつもんだよ」

さて、そろそろ仕事の続きを

「二人とも、ちよ~~~~~~~~といいかしら？」

しようと思ったら、木下さんに止められた

「んむ？なんじゃ姉上？」

「木下さん？」

ガツシリと手首を掴まれてしまった、何をしたいのだろう？

「いいからいいから、吉井君、このお店ってトイレはどこにあるの

「？」

「え？向こうの奥だけど」

「そう、ありがとう」

木下さんは私と秀吉の腕を掴みそのまま歩き出した

「あ、そうそう、代表と島田さん」

トイレに入る前に一言

「さっきの台詞、撤回するね、他のお客さんに迷惑でも

気に入らないものは気に入らないもの、存分にやちやいましてよ」

そして“ボタン”とトイレのドアが閉められた

……………え？いったい何が気に入らないものなの？

「姉上よ、どうしたのじゃ？何故ワシの腕を掴むのじゃ？」

「木下さん、いったい何が気に入らないの？」

「秀吉、どうしてそんな短いスカートで動き回っているのかしら？前に私言わなかったっけ、アンタが余計なことをすると私までそういう

目で見られるからやめろ、って」

「はっはっあ、何を言っておるのじゃ、姉上は家におる時はほとんど下着姿で生活を

しておるではないか、そんなことをしておるから星に　あ、

姉上っ！ちがつ！

その関節はそっちに曲がらなっ

「！」

……………間違えて木下さんの部屋に入った時の状況は

ベッドの上で下着姿の木下さんが薄い本を読んでいるところを見て
しまい、それらしい

秀吉が何か問題を起こしたら私も一緒に折檻されてしまう、何でも
連帯責任らしい

「風見君？」

「はい！」

考え事をしていたので、急に呼ばれて驚いた

振り返ると、そこには変わり果てた秀吉が……………い、生きてる
よね？

「風見君？秀吉が何か変なことをしないようにお願いしたわよね？

なのに、なんで秀吉やアナタがこんな恰好をしているのかしら

最近じゃ、木下さんは百合じゃないのか？って噂が出ているのよ！」

「それは秀吉を木下さんと勘違いして、私を女と間違えているだけ
だよな

そういうえば誤解はなくな　　き、木下さんっ？私の腕が変な
方向に

曲がりかけ　　「！」

その後、木下さんに腕を曲げられました

……………私なにか悪いこと言ったかな？

ちなみに店内では店長が暴走してめちゃくちゃになっていたとか

第26話（後書き）

次回はちよつと過去の話

星が秀吉の家に遊びに行く話をしたと思います

第27話（前書き）

オリ話を作ってわかったこと……考えるのが難しい！

かなりぐだぐだですが、すみません

第27話

特別コラム↳鉄拳人生相談↳

「さて、このコーナーは鉄拳先生こと私西村宗一と」

「アシスタントこと私風見星が皆さんの悩みに応えていきたいと思っています！」

「今回の相談で最後なんだな？」

「そうですね」

「最後の相談が長かった……………風見、頼む」

「わかりました、最後の相談は……………コレです！」

二年生 S水M春さんのご相談

『私には一年生の頃からずっと好きなお姉さまがいます、ですが、最近そのお姉さまが悪い男に騙されています、どうしたらその男を殲滅できるか教えてください』

「最後の最後まで同性愛の相談ですか!？」

「貴様らには同性愛以外の悩みはないのか!」

「逆にすいいです……………」

「以上このコーナーを終了する」

「お疲れ様です」

（side星）

「まだ痛いんじゃない」

「右に同じく……………」

「二人とも自業自得でしょ」

「確かにそうだけど……………」

喫茶店のバイトが終わり木下姉弟と一緒に家に帰っている途中である
あの後、店長を止めるのが大変であった、ちなみにちゃんと給料は
でた

「まったく……次からは何も問題を起こさないようにしてよ？」

「……わかりました」

「……了解じゃ」

また、折檻されるのは御免だ

「けど、木下さんって家だと何で……ごめんなさい」

言いかけたところで木下さんが睨んできたのでやめる……怖い

「別にいいでしょ、家の中ぐらい自由にしたって」

「それはそうだけど……」

「……何？」

「……なんでもありません」

目に殺意が見えたのですぐに訂正する

「姉上は家ではズボ　あ、姉上っ！ちがっ！その関節はそつちに……！」

「ストップだよ、木下さん！それ以上やったらその関節は戻らなくなってしまうっ！」

一日二回も関節を曲げられたら戻らない可能性がある

「しかたないわね……………」

木下さんも諦めてくれてよか

「……………明日にしてあげるわ」

諦めていなかった！そんなにも言おうとしたのが許せないの！？

「それにしても……………」

「どうしたのよ、風見君？」

「ちょっと木下さんの家に遊びに行った日のことを思い出していた」

「なつかしいのう……………あれは学園祭の後じゃったか？」

「……………そうね」

木下姉弟の家に遊びに行ったのは学園祭の後のことである

〈回想〉

私は今、秀吉の家に向かっている

学園祭も終え、今日は代休日となっている

「………」

玄関に“木下”と書いてあるので間違いないだろう

「……よし」

ピンポーン

少し待つと家の中から足音が聞こえてくる

「来たようじゃな、あがってよいぞ」

「おじゃまします」

「飲み物を用意するからのおう、先に二階のワシの部屋に上がってほしいのじゃ」

「わかったけど……どこ？」

初めて来たばかりだから、秀吉の部屋がわからない

「階段を上がったら右の部屋じゃ、間違えぬようにな」

「わかった」

さて、階段を上がり右の部屋………つて、アレ？

階段から見て右？それとも上がってから見て右？どっち？

「………こつちかな？」

私は階段から上がり振り返り、右の部屋の扉を開けた
部屋には本棚があり薄い本が大量に存在し、ベッドの上には女物の

下着姿の秀吉が……？

「……………秀吉？」

私は秀吉？に声を掛けてみた

（side 優子）

「何でそれを思い出すのよ！？今すぐ忘れなさい！」

「う、腕が！無事な方の腕が変な方向に……………！」

誰だつて下着姿を思い出されたら怒るわよ！

「やめるのじゃ、姉上！それ以上曲げてしまえば元に戻らなくなってしまうのじゃ！」

「……………確かに秀吉と比べたらそんなに頑丈じゃなさそうだから今はやめてあげるわ」

「いや、今日か明日かの問題じゃないのじゃが……………」

「何か言ったかしら、秀吉？」

「ワシは何も言っておらぬのじゃから、手を下げて欲しいのじゃ」

しかたがないわね……………

「あれは風見君が悪いのだから罰を受けて当然よ」

「下着姿を見た罰が手足の関節を外すのは、かなりの罰じゃと思うのじゃが？」

「……………気のせいよ」

恥ずかしかったから、ちょっとやり過ぎただけよ

「けど、あの時の木下さんの反応は可愛かったよ？」

「か、可愛かった!？」

い、いきなり何を言うのよ!そんなことを言われても……………

「……………姉上よ」

「な、何よ?今考え事をしているんだから」

だって、いきなり可愛いって言われたのよ!

「考え事をしながら星の腕を曲げるのはどうかと思うのじゃが」

「……………え?」

私の手には風見君を腕があり、それが曲がりかけており

風見君がものすごく痛そうな顔をしているのがわかる、って私は何をやっているのよ!

「き、木下さん?とりあえずう、腕を……………!」

「あつ、ごめんなさい」

「姉上が照れ隠しとはお　あ、姉上！三回目はやめてほしいのじや！」

「秀吉？」

「な、何じゃ姉上？」

「アンタ、少しは黙っていなさい！」

「はいつ！」

私は、二人を置いて先に家に向かう
アンタが下手な案内をするから、あんな変な出会いをしたんじゃない
い……………

く回想く

今日は学園祭での代休日

私は下着姿でベッドの上でBL本を開く
やっと新刊が出たから今日はずっと読もうと決めていたのよね

「~~~~~」

さて、早速……………

ガチャッ

ん？秀吉かしら？

振り向いたら……………確か、風見君だっけ？

秀吉みたいで男なのに女みたいな顔をしている人よね？……………何でここにいるのよ！？

「……………秀吉？」

違うわよ！と訂正したら私だとバれてしまっ、こっぴなったら……………

「ど、どうしたのじゃ星よ？」

秀吉になりきって、この場を……………

「？おかしいな……………？秀吉、さっき飲み物を持ってくるとか言っ
てなかったけ？」

「先に部屋を片付けようと思っつての、熱いから服は脱いでしまっつた
わい」

私が言うのもなんだけどかなり苦しい言い訳だ

「それに格好も変わっているし？ん？よく見ると秀吉と何か違っつよ
うな……………？」

「な、なんのことじゃ？」

風見君が私に近づいて顔を見る

ここであればたら学校に変な噂が流れてしまっ、どっやっつてこの場を

……

『ん？星が部屋におらんのう……どこに行ったのじゃ？』

まずい！秀吉の声が！

「今の声は……秀吉の声？けど、目の前にもいるし……あれ？」
くっ！どうすれば

「姉上、部屋に入るぞ………星、ここにおったのか
ワシの部屋は隣のアルゼンチン・バックブリーカーいきなり食らわ
すとは何事じゃ！？」

「私の努力を一瞬で消したアンタが何を言っているのよ！」
なんでアンタは空気を読めないのよ！

「……えつと？秀吉が二人？
………そういえば、秀吉には双子のお姉さんがいたんだ
木下さん？
どうして私の腕を掴んで逆方向に曲げようと　　っ！」
き、

「今起きた出来事を全て忘れなさい！」

「頭が！頭が凄く揺さぶられて視界が………っ！」

その後、二人を気絶させ服を着て説教をした

秀吉は学校で変な噂が流れないようにすること、風見君には止め役
になってもらうこと

にしておいた、特に風見君には今日あったことを学校に言わないよ
う念を押しした

まったく……………恥ずかしい思いをしたわよ

〈side 星〉

「星よ、大丈夫かの？」

「かなり痛い……………」

島田さんといい、木下さんといい……………

どうしてこの学校の女子は攻撃力が高いのだろう？不思議だ……………

「今のは、星が悪いぞ？」

「そうなの？」

全然わからない、いったい何が悪かったの？

「謝った方がいいかな？」

「それは、それで血の雨が出そうなのじゃ」

なにそれ……………すごく怖い

「とりあえず、ほっといた方がいいのじゃ」

「まっ、そういうことなら……」

追及はしないでおく

「それより今日は大変じゃったのう……」

「確かに……」

木下さんの折檻が終わったら、店長が吉井に襲いかかろうとしていて坂本は霧島さんに捕まり、土屋はカメラ……土屋っっていうもカメラを持っていてるよね？

その後、木下さんと協力し少しずつ場を静めていた

「次からはバイトをする時は下見をする」

「確かにのう」

次からは下見をしてからバイトしよう、今回のバイト騒動で学んだことである

第27話（後書き）

本当にぐだぐだですみません
b y 作者より

第28話(前書き)

原付の免許……………取れなかった

あと一問、あと一問で……………！

第28話

坂本夫婦のマル秘講座〜恋愛テクニック編〜

「……おい翔子、とりあえず俺にわかるように状況を説明しろ」

「……これは、私たち夫婦が恋愛の秘訣を皆に教えるコーナー」

「驚いた、このタイトル、『の』以外全部嘘のことしか書いてないぞ」

「……今回はアシスタントを呼んでいます」

「無視をしないでもらいたいが、誰だ？」

「皆さんこんにちわ、アシスタントこと風見星です」

「お前かよ！なんでここにいるんだよ？」

「さて、最初のハガキに行きたいと思います」

「……では、ハガキの紹介」

「二人とも、俺の話を聞けよ！」

「……突然ですが、仲良し夫婦のお二人に相談です」

「本当に突然ですね」

「ハガキの差出人よ、よく聞いてくれ

俺は今、手足を縛られて床に転ばされている

コイツが本当に恋愛相談の相手に相応しいか、もう一度考えてみて欲しい」

「……………私には婚約者がいるのですが、その人が周りの女の人の誘惑に負けて

浮気をしないか心配です、どうしたら良いでしょうか?」

「いや、どうしたらと言われてもな」

「困りますね……………」

「……………夫の浮気には私にも困っている、他人事とは思えない」

「頼むから他人事だと思ってくれ」

「……………だから、私の考えた浮気防止法を教えてあげる」

「翔子よ、それは俺の身に降りかかる不幸の予告と見なしていいんだらうか?」

「……………用意するものは三つ」

「持ってきました」

「?浮気防止に道具が必要なのか?」

「……………一つ目は」

「一つ目は？」

「『手錠』」

「翔子、ストップだ、いきなり犯罪臭がする」

「その手錠は私が丹精込めて作った力作です」

「お前か！お前なのか！？最近、手錠が丈夫になっている原因は！？」

「左右には『坂本』と『雄二』と彫っております」

「……………気が利いている」

「利いてねえよ！」

「……………一つ目は」

「やっぱり聞いてないな、んで、一つ目は？」

「『エプロン』」

「ちょっと待ってくれ、急にお前の考えが読めなくなったというか、その組み合わせで俺に何をするつもりなんだ」

「えっと、このエプロンは霧島さんの手作りみたいです」

「……………雄二の為に作った」

「俺の為だと思つのなら、エプロンに付いているフリフリを取って
もらいたい」

「……………そして、三つ目は」

「三つ目は？」

「『ビデオカメラ』」

「貴様何を撮るつもりだ！？」

「エプロンと手錠でドレスアップされた俺の何を撮るつもりだ！？」

「……………その三つを用意して、夫に浮気の怖さを教えてあげるとい
い」

「俺は今、何よりお前が怖い」

「……………以上、『バカなお兄ちゃん大好き（11歳）』ちゃんから
のおハガキでした」

「差出人小学生かよ！？世も末だな！」

「……………ところで翔子、さっきのは冗談だよな？」

「……………カメラは五台以上が望ましい」

「まあ待て、じっくりと話し合おうじゃないか」

「カメラを五台持ってきました」

「……………ありがとう」

「翔子？何でエプロンを持って俺に近づいてくるんだ？
星、何故カメラをセットしている？」

「……………大丈夫すぐ終わるから」

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

「以上、このコーナーを終了したいと思います」

あつ、霧島さん、いくらなんでも薬はダメだよ！」

（side畢）

週明け、夏に入りいつもより暑くなっている教室でのこと
朝のHホームルームLが始まるまでの時間、吉井と坂本の愚痴を聞いていた

「ってなことがあって、おかげで散々な週末だったよ」

吉井の説明では、家で坂本と炭酸ジュースを浴びてしまい、坂本がシャワーを浴びよう

としたらお湯でじゃなくて水が出てきたので、温水のである学校のシャワーを浴びて

ついでにプールで泳いでいたら、西村先生に見つかり、プール掃除をしると……

「自業自得じゃん」

普通に考えて夜に学校のプールを泳いでいる時点でダメでしょ

「……………重労働」

「だよ、あんな広いところを掃除するなんて、考えただけでも気が滅入るよ」

「文月学園のプールって他と比べると広いもんね」

土屋が重労働と言った意味もわかる

「褒美というほどじゃないが

『掃除をするのならプールを使ってもいい』と鉄人に言われたぞ」

「え？そうなの？」

「ああ、だから秀吉とムッツリー二と星も今週末にプールに来ないか？」

今週末か……特に予定もないし、いいかな

「ただし、ムッツリー二には掃除を手伝ってもらうけどな」

「……………」

なぜ土屋だけ？

「ちなみに、姫路と島田にも声をかけるつもりだ」

「……………」ブラシと洗剤を用意しておけ」

即答！？

「うむ、そうじゃな

貸切のプールなぞ、こんな時でなければなかなか体験できんじやろっし

相伴させてもらうかの、無論、ワシも掃除を手伝おう」

「私も掃除は手伝うよ、あの広さじゃ大変そうだし」

「え？結構大変だと思うけど、いいの？」

「うむ、お安い御用じゃ」

「オーケー」

「んじゃ、あとは向こうの二人だな、おーい、姫路、島田」

坂本が卓袱台で話しこんでいる二人を呼ぶ

「どうしたの坂本？何か用？」

「呼びましたか、坂本君？」

「二人とも今週末は暇か？学校のプールを貸切で使えるんだが、良かったらどうだ？」

「……………え？」

プールという単語に反応する二人

「あ、さては二人とも予定があつたりする？」

二人とも予定があるのならタイミングが悪かったな

「い、いや、別に予定はないんだけど

その、どうしようかな……………？プールっていうと、やっぱり水着だし……………」

「そ、そうですね、水着ですよ……………その、えっと……………」

水着に何か嫌なことがあるのかな？

「まあ、お前らにはお前らの悩みがあるんだろつが……………」

「一つ言っておくと、秀吉と星は来るぞ、明久に水着を見せに、な」

？何で吉井に水着を見せに行くことになっているの？

「ひ、卑怯よ！自分は自信があるからって！」

「そ、そうですっ！二人ともズルいです！」

「????お主らは何を言っておるのじゃ？」

「まったくわからない」

いったい何が卑怯なの？

「で、どうするんだ二人とも？」

「い、行くわ！その、イロイロと準備して……………」

「そ、そうですね、準備は大事ですね」

二人ともOKみたいだ

しかし、水着か……………前ので大丈夫かな？そんなに体型は変わっていないし

「あ、そうだ雄二、霧島さんにきちんと声をかけておいてね」

「……………言われなくてもそのつもりだ」

あれ？珍しい……………

「うんうん、雄二も大人になったね」

「いや、そういう問題じゃない」

「????それじゃ、どういつ問題や」

「いいか、想像してみる

俺の立場で、後々になってからこのことが翔子に知られるという状況を」

確かに、霧島さんが知ったら坂本がとても危ういことになる

「樹海の奥……いや、湖の底………」

なんで、処理方法？

「俺の死体の処理方法を想像する必要はないが、まあそんなところだ」

否定できないんだね……

「とにかく全員オツケーのようだな、んじゃ

土曜日の朝十時に校門前に待ち合わせだ、水着とタオルを忘れるなよ」

坂本が締めめの台詞とほぼ同時に、西村先生がやってきて解散となった

「いい天気だな………」

その週末、雲一つない青空
今日はとてもプール日和である

「兄貴ー！行くぞー！」

「兄さん、早く行きましょ！」

月に空も準備できて玄関で待っている

私だけ行くのもなんだから二人も連れて行くことにした

私は荷物を持ち、早足で玄関に向かう

「さっ行こうか？」

「うん！」

私たちは文月学園に向かって歩き出した……………

……………

……………

……………

…

集合場所に着いたらみんな集まっている、どうやら最後だったようだ

「みんな、おはよー」

「おはよー」

「おはようございます」

「おはよう星、月ちゃんに空ちゃんも来たんだ」

「せっかくだからね、ダメだった？」

「かまわないぞ、他にも連れてきている奴はいるからな」

「可愛いお兄ちゃんっ！お久しぶりですっ！」

「葉月ちゃん……おっと」

葉月ちゃんが近付いてきたが、転びそうになったので支えてあげた

「大丈夫か？」

「大丈夫です、ありがとうなのです可愛いお兄ちゃん！」

お兄ちゃんはいいけど……何で可愛いが付くのだろう？

「風見君、おはよう」

「……………」

……………何でここに木下さんがいるの？

「ちょっと、何で返事をしないのよ？」

「……おはようございます、木下さん」

「何で敬語なのよ!………後ろの二人はアナタの妹？」

「……妹で双子、二人とも挨拶」

「オレは風見月って言うんだ、よろしく」

「私は風見空です、よろしくおねがいます」

「私は木下優子よ、二人ともよろしくね」

「んじゃ、自己紹介も終えたし早速着替えるとするか女子更衣室の鍵は

翔子に預けてあるからついていってくれ、着替えたらプールサイドに集合だ」

坂本の言葉通りに男女に別れる

私と秀吉と坂本と土屋と葉月ちゃんと吉井に　　って、あれ？

「くらくら」

葉月ちゃんと秀吉と星は女子更衣室でしょ、霧島さんについていけないとダメだよ」

「えへへ、冗談です」

「ワシは冗談ではないのじゃが………」

「吉井？私はこっちで合っているよ？」

何で私が女子更衣室に行くんだ？

「ほら、遊んでないで行くわよ葉月、木下、風見」

「島田さん!？」

「し、島田!？お主までそんな目でワシをみるよつに!？」

「島田さん!？秀吉は男よ!」

「兄貴？さつさと行くぞ？」

「兄さん？遅れないでください」

「月に空!？何で当然のように言つの!？」

「二人とも!いくら兄妹だからって一緒に着替えるのはダメよ!」

いくらなんでも限度がある

「あの………それなら、二人は別の場所で着替えるっていうのはどうですか？」

姫路さんが手を挙げて提案してくれた

「そ、それなら………」

「残念だ………」

「せっかくのチャンスが………」

木下さんは納得してくれたが

月と空は残念そうに……………空？いったい何がチャンスなんだ？

「ぬ、ぬう……………得心行かぬが、この際我慢じゃ……………水着を見せればきつと……………」

そういえば、木下は新しい水着を買ったそうだけど、どんな水着かな？

「よし、決まったならさっさと行こうぜ、時間が勿体ない」

「うん、そうだね」

「……………（コクリ）」

こうして私たちはそれぞれの更衣室に向かう

第28話（後書き）

あと一問で、合格だったのに………！

以上、作者より

第29話（前書き）

久しぶりの投稿です

話が長いので書くのに時間が掛かってしまいました

第29話

「……………土屋に」

「工藤と」

「風見の」

「」「性活小唄っ！」「」

「はい、このコーナーでは

日々の生活に根ざしたちよつとエッチな小唄をボクこと工藤愛子とムッツ」

「……………土屋康太」

「ムッツリーニ君とアシスタントの風見星君が紹介していくというものです、今日はよろしくね風見君」

「よろしくおねがいします、工藤さん」

「……………最近、星以外に本名を呼ばれない……………」

「それじゃ、さっそく本日のお題にいつてみたいと思います」

「では、今日のテーマですが」

「……………本名……………」

「……『シャワーの正しい使い方』です」

「……………っっ！！（ドバッ）」

「ええっ！？もう鼻血！？ムツツリー二君、想像力豊か過ぎない！？」

「400m？っ」と

「風見君！？何で冷静になって鼻血の量を測っているの！？」

「……………構わず続ける」

「う、うん」

えっと、ちょっとエッチなお話ということなので

ボクの体験談をお話します、実は先日、学校帰りに急に雨が降ってきて

「……………っ！（ダラダラ）」

「700m？」

「運の悪いことに、その日は部活でふざけていたらプールに着替えを落としちゃって、下着がビショビショになっちゃったんだ」

「……………っっ！！（ダバダバ）」

「下は流石に我慢して履いたんだけど、上は　　ってムツツリー

「二君!？」

もう二リッターくらい血が出ているみたいだけど本当に大丈夫なの!？」

「違つよ工藤さん」

「え?何が違つなの?」

「正確には2・4?だよ」

「今は正確さを求めているよ!？それに今ので一リッター以上出たの!？」

「……………構わずに、続けるんだ……………っ!」

「そ、それで、雨でシャツが透けてきちゃって」

「……………つつっ!!! (ブシャアアアアア)」

「鼻血が3?を突破した!？」

「風見君!？今そんな場合じゃないでしょ!？やっぱりこの企画無理があるよ!

まだシャワーの話に入っていないのに相方がグロッキーになっているんだもん!」

「……………死しても尚、魂で聞き続ける……………っ!」

「そんなの無理に決まってるでしょ!？」

「こんな時でなければカッコイイ台詞なのに……!」

「気にするところが違うでしょ!？」

とにかく今回はこれで終わり!それではまた次回お会いしましょう
!お元気で!」

「……………続きが気になる」

「それより先に保健室!」

「ねえ、工藤さん」

「何?」

「11の舞曲……………びんなん?」

「……………」

（side 星）

あれから二十分

「着替え終わった？秀吉？」

「うむ、時間が掛かったが終わったぞ」

私と秀吉は校舎で水着に着替えていた

「しかし、この水着は男物のハズじゃのに何故上があるのじゃ？」

「さあ？普通はないんじゃない？」

それについては何もわからない、秀吉の水着はスポーツタイプ
上はタンクトップ、下はパンツの上にショートタイプのような水着
を履いた格好だ

「そう言うが、星の水着も上があるぞ？」

確かに私の水着にも上があり、上は秀吉と同じタンクトップだが
下はショートタイプの水着だけで、秀吉のようにパンツはない

「本当は上はいらんだけど………」

「いらないが？」

「……上がないとプールに入る許可が出なかった」

何故か知らんが上がないとダメだと先生や女子に言われしかたなく上のある水着を着ている、ちなみに小学校からだ

「……………そうじゃったのか、なら上はいらないのかの？」

「ん……………アメリカのことだから

日本と違うかどうかわからないし……………一応、着けておいたら？」

「そうじゃな、着替えにも時間が掛かったことじゃから早く向かうかの」

「そつだね」

私と秀吉はプールに向かう

side 明久

「う、う……………俺は未だに目が見えないんだが……………全員そろった

か？」

霧島さんに目を突かれ涙を流している雄二が目を開けずはこちらを向いた

「いや、秀吉に星と月ちゃんと空ちゃん、あと木下さんがまだ来ていないかな」

秀吉と星は校舎で着替えて時間がかかっているみたいだし

姫路さんが言うには月ちゃんと空ちゃんと木下さんの三人は二人を迎えに行ったらしい

「……………秀吉は、トランクタイプ……………」

ムツツリーニが寂しそうに一言洩らす、うんうん

君の無念はよくわかる、秀吉が新しくトランクスタイルを買うなんて折角あんなに可愛いんだから、水着もそれ対応のものを用意するべきなのに！

「バカなお兄ちゃん、どうしてそんなに哀しそうな顔をしているの？」

葉月ちゃんが心配そうに僕の顔を覗きこんだ、いい子だ……………

「心配かけてごめんね葉月ちゃん

ちよっと寂しくなっちゃっただけなんだ、気にしないで」

「そうよ葉月、アキのことなんて心配するだけバカらしいから、気にしないで」

そんな言葉の途中で、美波が何かに絶句していた、なんだ？

「待たせてすまぬ

着替えはさほど手間取らなかったのじゃが、いかんせん校舎からプールまでが遠くての」

「ごめんなさい、時間が掛かっちゃって」

この声と口調は秀吉と木下さんかな

しばらくしたら、ボロボロな秀吉と木下さんが来た

「……体がまだ痛い……」

「兄さん、大丈夫ですか？」

「兄貴、しっかりしろよ」

その後に来たのはボロボロな星と月ちゃんと空ちゃんだ、これで応全員集合だ

「
×（ううん、そんなに待ってないよ）」

「落ち着け明久、ここは地球だぞ」

雄二の冷静なツツコミが入る、でも、それは雄二が未だに目が見えていないから

できることで、この光景を見たらそんなことが言えるワケじゃない！

「ど、どうじゃ……？これで少しは、ワシも男らしく見えるかの…

……」

「わっ、お姉ちゃん、とっても可愛いですっ」

「んむ？『可愛い』じゃと？」

島田妹よ、何を勘違いしておるのか知らんが、ワシは見ての通り男じゃぞ？」

「な、なんじゃと!？」

そう、秀吉の水着はトランクスと言えばトランクスだった………
ただし、女物の

「き、木下………! アンタ、どこまでウチらの邪魔したら気が済むの………!」

「木下君卑怯です………!」

トランクスだなんて私たちを油断させておいて、最後の最後に裏切るなんて………!」

「二人とも、私も秀吉に言うておくから抑えて」

木下さんが二人に止めるように声をかける

木下さんの格好はオレンジのワンピースタイプで可愛い水着だ、
流石は双子

「やっと、体の痛みがなくなってきた………」

「あれは兄貴が悪いぜ」

「まったくです」

「あつ、星に二人とも　　っ！！」

「……………っっ！！！（ブシャアアアアア）」

なんて光景だ！目の前に生物兵器が……………二人だと！？

秘儀のセルフ潰しをやる前に見てしまったので完全に油断していた！

月ちゃんは露出の多い赤のビキニを着た大胆な水着で

空ちゃんは青のビキニだが月ちゃんと反対で露出が少ないが

二人とも強調されるところは強調されていて僕の鼻から赤い汗が大量に流れている

「……………雄二、目、大丈夫？」

「ん？ああ、大丈夫だ翔子、だいぶ見えるようになってきた

だが、心配するなら目潰しなんか（ブスッ）うおおおおおおお！

さ、三度目！？お前は俺に何か恨みでもあるのか！？」

「……………ここには雄二に見せられないものが多すぎる」

プールに来たというのに、雄二は水に入る前に病院に運ばれそうな勢いだっただ

（side 星）

私はプールで今は泳いでいる、暑い時に泳ぐと気持ちいい
月に空も久しぶりに泳げるのか二人してはしゃいでいる、喜んでい
るみたいだ

二人を連れてきて良かった……

「こうして見ていると、美波と木下さんはAで姫路さんがF
みたいだね」

「寄せて上げればBくらいあるわよっ！」「」

「ぐべあっ！？」

急に吉井が島田さんと木下さんに殴られている、何があったの！？

『……雄二、ちなみに私はCクラス』

『？何を言ってるんだお前は？』

離れたところにいる霧島さんと坂本も不思議な会話をしている、何
の話だ？

「オレはDクラスだな、空は（モニユモニユ）っ」と

「きゃっ！月、いったい何をするの！？」

「空もやっぱりDクラスだな」

????やっぱり何の話か私にはわからない

「……………っつ！！！（ブシャアアアアア）」

ちなみに、遠くでは何故か土屋が鼻血を出して倒れていた

「お兄ちゃんっ」

「わぶっ！?」

プールで泳いでいたら葉月ちゃんが吉井に乗って、吉井が水中に沈んでいる

「な、何!?」

「ダメだよ葉月ちゃん、いきなりそんなことをしたら」

「えへへー、ごめんですっ

お兄ちゃんと遊んでほしかったのですっ」

だからって、背中にいきなり乗るのは危ないんだよ?吉井だからいいけど……………」

「うん、いいよ、何して遊ぼうか？」

「じゃあ、『水中鬼』をしますっ」

「水中鬼？」

「要するに水中でやる鬼ごっこのことかな？」

水中でやる鬼ごっこだから水中鬼なんだね……何で『ごっこ』って付いてないんだろ？

「水中鬼は、鬼になった人がそうでない人を追いかけるです、それで、鬼が他の人を」

うんうん、いたって普通のプールの中での鬼ごっこ

「鬼が他の人を水の中に引きずりこんで、溺れさせたら勝ちですっ」

「「鬼だ！それは確かに鬼だ！」」

だから『ごっこ』がないのか！日本ではプールでなんて危ない遊びをするんだ！

「でも、ダメだよ葉月ちゃん、そんな遊びは危ないんだよ」

「あう……………ダメですか？」

危ない遊びを葉月ちゃんと一緒にするのはダメだ

「いい、葉月ちゃん？その遊びはとっても危険なんだ

今からそれを教えてあげるね

おーい、霧島さん！

え？何で教えるのに霧島さんと呼ぶの？

「……………なに？」

すると、少し離れていた霧島さんがやってきた、泳ぐのが上手い

「雄二と水中鬼っていう遊びをやって見せて欲しいんだ」

なるほど、葉月ちゃんに水中鬼の危険性を教えてあげる為に霧島さんを呼んだのか

「ルールは簡単で

雄二を水中に引きずりこんで、溺れさせたあとで人工呼吸をしたら霧島さんの勝ち」

「坂本　！危険だー！！逃げてー！！？」

「……………行ってくる」

坂本に逃げるように声をかけるが、霧島さんがものすごい速さで水中から坂本に接近する

「ん？星か？いったいどうした　って、お？なんだ？

いきなり足が……………おわあっ！？だ、誰だ！？誰が俺を水中に（ガボガボガボ）」

「……………雄二、早く溺れて」

『ぶはあっ！しょ、翔子！？何をトチ狂って……！（ガボガボガボ）』

遅かったか……

「ね？危ないでしょ？」

「はいです……葉月、水中鬼は諦めるです……」

葉月ちゃんがわかってくれたので良かったが、この水中鬼を考えた人が気になる

「吉井、逃げなくていいの？」

「え？」

「明久っ！てめえの差し金だな！？」

「うわっ！ダメだよ霧島さん！きちんと捕まえておいてくれないと
！」

「……………ごめん」

「わっ、お兄ちゃんたち、泳ぐのとっても速いですっ」

吉井と坂本と霧島さんの水中鬼が始まった

「あ？プール使ってるのは誰かと思っただら代表だったの？」

聞き慣れない声がプールに響いた

「……………愛子？」

霧島さんが代表ってことはAクラスの人かな？それにしても聞いたことがあるような？

「Aクラスの工藤か、どうしてこんなところにいるんだ？」

やっぱりAクラスの工藤さんだ

「ボク？ボクは水泳部だから」

「そうか、だが、今日は水泳部は休みになっているはずだぞ？」

「うん、すっかり忘れていて学校に来てやっと思い出したんだ

けど 人の声がしたから寄ってみたんだ、良かったらボクも混ぜてもらっていい？」

「ああ、別に構わないぞ、俺たちのプールってわけでもないし

」

言葉を区切って島田さんたちがいる方を指差す

「既に一人、誰か増えているみたいだしな」

見てみると、そこには見たことのある人がいた

『お姉さまっ！どうしてプールに行くのならミハルに声をかけてくれないのですか！？ミハルはこんなにもお姉さまのことを愛していますのに！』

『ミハル！？アンタどうしてここにいるのよ！

プールで遊ぶなんて誰にも言わなかったはずなんだけど！』

『ミハルにはお姉さまを害虫から護る為のトクベツな情報網がありますから！』

……………今は他人のふりでもしていよう

「なにやら賑やかになってきたのう」

声の方に振り向くと、秀吉と木下さんに葉月ちゃんと姫路さんと月と空がいた

どうやら、こっちに逃げてきたみたいだ

「あれ？優子が二人　　じゃないみたいだね、君は弟君だったけ？」

「ふむ、そうじゃが、お主は姉上の友人かの？」

「うん、クラスメイトなんだ」

そういえば秀吉は会ったことがないんだっけ？

「風見君、久しぶりだね」

「久しぶりだね、工藤さん」

「なんだ？星は工藤と知り合いだったのか？」

「この前、知り合ったばかりなんだ」

今日のコーナーで初めて会ったんだけどね

「あのさ、僕も泳いでいいかな？」

「ん？遠慮することはなからう、ここは学校のプールじゃからな」

「ありがとう、それじゃ、水着に着替えてね」

工藤さんがスポーツバックを掲げて更衣室に向かう工藤さん
何故か更衣室に行く途中に振り返る工藤さん、嫌な予感がする……………

「覗くなら、バレないようにね」

このメンバーになんて爆弾発言を残して行くんだ、工藤さん！

「……………雄二、今動いたら捻り潰すから」

「明久君、余計な動きを見せたら大変なことになりますよ？」

「アキ、動いたらどうなるかわかっているでしょうね?」

なんだろう、あの三人からとてつもない殺気を感じる自分がいる

「秀吉? アナタもわかってるわよね?」

秀吉は木下さんに何か言われているし

「空、兄貴をロツク!」

「はいっ!」

「ぐはあ!?」

何故か月に腕を押さえられ、空に顔を掴まれている

これがアイアンクローか! まさか自分が体験するとは思わなかったよ!

「…………… (ドクドクドクドク) 」

土屋は向こうで血液の補充をしていた

side 明久

僕はプールサイドのベンチに腰掛け、休憩していた

姫路さん、霧島さん、月ちゃん、空ちゃん 対 美波、木下さん、
工藤さん、清水さんの
八人が水中バレーをしていたが………

『負けた方が諦めるって約束、忘れていないわよね!』

『もちろんです!美波ちゃんこそ負けても約束を破らないで下さい
ね!』

とか

『行くわよ!月ちゃんに空ちゃん!』

『来い!オレは絶対に勝利してやる!』

『絶対に勝ってみせます!木下さん!』

や

『お姉さま』

『……………星、新しい手錠は?』

『今度の週末に完成するから、もう少し待って下さい』

『なんだかすごいことになっちゃったね』

あれ？今おかしな会話があった気がする、気のせいだろうか？

「翔子！？いったい何を注文していやがる！？」

……………どうやら気のせいじゃないみたいだ

結局、水中バレーの決着はビーチボールが割れて保留となった
その後、プールの掃除の話になったんだけど……………

「あ、そうでしたっ、それならっ」

姫路さんが掃除が出来ない代わりに何か良いことを思い出したかの
ように手を打つ

その瞬間、僕と雄二とムッツリー二と秀吉は本能的に何かを感じ取
った、もしか……………！

「ちょっと失敗しちゃって人数分用意できなかったから黙っていた
んですけど」

姫路さんが何かを出そうとする時、僕ら四人はアイコンタクトをや
り取りしていた

「実は、今朝作ったワッフルが三つ」

「第一回っ！」（雄二の声）

「最速王者決定戦っ！」（僕の声）

「ガチンコ水泳対決　　っ！！」(僕&雄二の声)

「イエーツ！」(秀吉&ムッツリーニの声)

突然の出来事に女子は全員が目を丸くしていた

「明久、ルールの説明だ！」

「オーケー！ルールはとっても簡単、このプールを往復して最初にゴールした人の勝ちという、誰でもわかる普通の水泳勝負です」

この勝負は一位とそれ以外の順位の間には大きな間違いがある、なぜなら

姫路さんの特製殺人ワツフルは三つ、僕らは四人、つまり生き残れることが

できるのは一人だけである、二位〜四位に待ち受けるのは困難に変わりない

「よくわかんないけど、四人の中で誰が一番速いのかは興味あるわね」

「そうですね、体力なら坂本君が一番に見えますけど……………」

「……………動きの速さなら吉井や土屋も引けを取らない」

「けど土屋君は鼻血を結構出していたから弱っているはずよ」

「いや、アイツならエロパワーでやるかもしれない」

「月？エロパワーってなに？」

「空、君には関係ないことだから耳を閉じなさい」

そんな暢気な言葉が聞こえるが僕らにとっては明日を迎えられるかどうかだ！

「へえ、面白そうだね、それじゃ、僕が審判をしてあげるよ」

このプールは25メートルだから、往復して50メートルである。僕らは闘志を燃やしなからスタート位置に向かう、右隣は雄二、左隣には秀吉がつく

「はい、行くよ！位置について」

工藤さんのコールが響く、僕は飛び込みの構えを取りながら考えた。ムツリーニは強敵だが今日は大量出血で弱っているから大丈夫。秀吉は弱くないけど、きつと体力で負けることはないはず

「よーい」

罰を免れるのは一人だけ、僕が取る行動はただ一つ………！

「スタートっ！」

「くたばれええっ！！」

目の前にいるコイツを倒さなければ！

（side 畢）

『くたばれええっ！！』

開始の合図と同時に吉井と坂本がお互いに飛び掛る、何をやっているんだ？

「あの二人は何をやっているのよ？」

「いつものことだから、気にしなくていいよ」

本当に彼らの行動はよくわからない

「ねえお姉ちゃん、水泳なのに」

どうしてお兄ちゃんたちはまだプールに入らないですか？」

「見ちゃダメよ葉月、バカがうつつちやうからね？」

あの光景を見たらうつるかもしれない

「へー、プールに入る前に取っ組み合いをするのか？」

「でも、危ないですよ？何でやるのでしょうか？」

……うつりかけている、月と空がいた

「あのさ、二人とも」

取っ組み合いもいいけど、木下君とムッツリーニ君はそろそろ折

り返しだよ?」

いつのまにか秀吉と土屋は残り20メートル地点にいる

吉井と坂本は一時休戦したのか、秀吉と土屋の前に立ちふさがる

………あの二人はもう一位になれないことに気付いていないのかな?

「逃がすもんかあああつ!」

吉井の声が聞こえ

ズルッ

何かが脱げる音がした

「あ、明久君っ!なにをしているのですかっ!?!」

え?吉井が何かしたの?

「へ?」

「それです、それ!」

姫路さんのが吉井の手を指差している、あれは………!

「あはは、そういえばコレ、秀吉の水着に似ているね」

「んむ?そういえば胸元が涼しいのう」

吉井の手には何故か秀吉の水着が握られている

「……………死して尚、一片の悔い無し……………!!」

そして、鼻血を出しながらプールに沈んでいく土屋、プールがどんどんと朱くなっている

「って、やっぱりコレ秀吉の水着!？」

「ごごごめんなさいっ!神に誓って僕は何も見えていないから!」

「待つんじゃ明久!ワシは男じゃぞ!どうしてそこまで慌てるのじゃ!?!」

「うおっ!大丈夫かムツツリーニ!?この出血量はマジでヤバくないか!?!」

「……………構わない、むしろ本望……………!」

「わああっ!ムツツリーニが大変なことに!?
血がものすごい勢いで出ているんだけど!?!」

「き、木下っ!とにかく胸を隠しなさい!土屋の血が止まらないから!」

「いいいやじゃっ!ワシは男なのじゃ!胸を隠す必要はないのじゃ!」

「秀吉!今はそんな場合じゃないでしょ!」

「木下君、我儘言っちゃダメです!土屋君が死んでしまいます!」

「……………愛子、救急車の手配、頼める？」

「はい、やっぱりFクラスの皆は面白いねえ」

「工藤さん、急いで！」

「おっ、朱いプールが出来たぞ！空、泳ぐか？」

「月、何を言っているの！？鼻血のプールよ！？」

「バカなお兄ちゃんたち、いつも楽しそうで羨ましいですっ」

「お姉さま、愛しています……………」

結局、土屋は私たちと救急隊員の懸命な延命措置で一命を取り留めた

第29話（後書き）

さて、次回はいよいよ『強化合宿』編です、楽しみに待っていてください

第30話(前書き)

一週間振りの投稿

テストが近いのに勉強をせずに投稿なんて……自分は何をやって
いるのだろ？

第30話

問 傍線部『私』がなぜこのような痛みを感じたのか答えなさい
父が沈痛の面持ちで私に告げた

『彼は今朝早くに出て行った、もう忘れなさい』

その話を聞いた時、“私は身を引き裂かれるような痛みを感じた”
彼のことはなんと

思っていなかった、彼がどうなるうとも知ったことではなかった、
私と彼は何の関係も

ない、そう思っていたはずなのに、どうしてこんなにも気持ちが揺
れるのだろう

姫路瑞希の答え

『私にとって彼は自身の半身のように大切な存在であったから』

風見星の答え

『私にとって彼は自身の半身のような大切な存在であったから』

教師のコメント

そうですね、自分の半身のように大切であった為、いなくなったこ
とで

『私』はまさに身を引き裂かれたかのような痛みを感じたというこ
とです

吉井明久の答え

『私にとって彼は自分の下半身のように大切な存在だったから』

教師のコメント

どうして下半身に限定するのですか

土屋康太の答え

『私にとって彼は下半身の存在だったから』

教師のコメント

その認識はあんまりだと思います

〈side星〉

私が文月学園に転校して約二ヶ月が経過した
始めはクラスに馴染むことはできなかったが、
少しずつだが慣れてきた

そして、明日からは強化合宿があるので私は楽しみにしていた
四泊五日の合宿だけど私にとったら修学旅行みたいに感じる
私は浮かれていたのか今日はいつもより早めに登校して……………ん？

「……………雄二、返して？」

「だれが、返すか」

登校中に坂本と霧島さんを発見した、相変わらずだな

……………何を話しているんだろう？気になるな……………ちょっと話しかけてみるか

「おはよう、坂本に霧島さん」

「……………おはよう」

「おはよう、星」

二人に軽い挨拶をする

「霧島さん、坂本に何か取られたみたいだけど、何を取られたの？」

「……………MP3プレーヤー」

音楽を聴く為かな

「機械オンチのお前がコレを持っていたから不思議に思って没収したんだ」

霧島さんって機械オンチだったんだ

「へー……………霧島さん、あれって何が入っているの？」

「……………普通の音楽」

「……………本当か？」

ピッ 《優勝したら結婚しよう、愛している、翔子ー！》

「……………」

「……………普通の音楽」

なんだろう、ものすごい罪悪感を感じる

「これは削除して明日返すからな」

「……………まだお父さんに聞かせてないのに酷い……………手もつないでくれないし……………」

流石に手ぐらいつないであげようよ？

「お父さんってキサマ……………これをネタに俺を脅迫する気か？」

「いくら霧島さんでそんな……………」

「……………そうじゃない、お父さんに聞かせて結婚の話を進めてもらっただけ」

予想を遥かに越えていた

「翔子、病院に行こう」

今ならまだ2、3発シバいてもらえば治るかもしれない」

「……………子供はまだできていないと思う」

「行くのは精神科だ！」

はー……………どうすればいいんだろ？

ピラッ

ん？

「霧島さん、何か落とし

『私と雄二の子供の名前リスト』

？」

「ちよつと待てやコラ！」

「……………お勧めは、最後に書いてある私たちの名前を組み合わせた
やつ」

えつと……………

「……………『じょうじ』と『ゆづじ』で……………『じょうゆ』」

「翔子？なぜそこを組み合わせただ？」

なんで名前が調味料なんだろう？

「……きつと味のある子に育つと思つ」

「俺には捻くれ者に育つ未来しか見えない」

「坂本に同意」

「……ちなみに、男の子だったら『こしょう』が良い」

「『しょうゆ』って女の名前だったのか……」

「それよりも、どちらの名前も調味料だと思っただけ……」

あの後、坂本は走って教室に向かった

なんでも、土屋にMP3プレイヤーの録音の犯人を突き止めて貰うためらしい

私は坂本の後を追いかけて、ゆっくりと教室に向かう

この前の学園祭で卓袱台と座布団を買ったので教室は前よりは良くなった

しばらくしたら、教室の前に到着した、私は重い扉を開け

「おはよ「What's up Hideyoshi? Every
thing goes so well……」」

「異常事態じゃな」

教室に入ると何故か吉井が英語をしゃべっていたので驚いてしまった

「二人して何をしているの？吉井は何か様子が変だし」

「おはようじゃ星、お主もそう思っじゃろ？」

「さ、流石は演劇部………僕の完璧な演技を一瞬で見破るなんて………」

「あれって演技だったの？とてもそうには見えなかった………」

「いや、演技以前に言語の問題なのじゃが………」

吉井が英語を言っている時点で完璧な演技ではないと思う

「と、とにかく大したことじゃないから、見なかったことにしてくれない？」

吉井は両手を胸の前に合わせてお願いのポーズを取る、そこまで見逃してほしいの？

「む、むう………明久がそう言うのであれば深くは関わらんが………」

「そこまで言っているから別にいいよ、見られたくないものみたいだし」

個人のプライバシーは侵害したらダメだからね

「ありがとう助かるよ！それじゃっ………」

吉井は鞆を持ち、走って教室を出て行く

「秀吉、いったい朝から何があったの？」

吉井が何故あのようなことになったのか秀吉に聞いてみる

「ワシにも、よくわからんのじゃが……………」

「けど、何か慌ててたみたいだし……………」

もしかしたら、ラブレターとか『最悪じゃあーっ！っ！』……………
…じゃなさそうだね」

「……………一体何があったのじゃ？」

教室に吉井の叫び声が聞こえた

しばらくしたら、吉井が帰って来た

「吉井、教室から勢いよく出た時と顔が変わっているよ？」

まるで、天国から地獄に落ちたみたいな顔だ

「べ、別になんでもないよ、あははっ」

「ウソばかり、さっき窓から妙な叫び声が聞こえてきたし、何か

隠しているでしょ？」

秀吉の後ろから島田さんが現れた

「あ、美波、おはよう」

「おはようアキ、それで、何を隠しているのかしら？まさか……………」

島田さんの目が吊り上がり、攻撃態勢をとっているような気配を感じる

「やだなあ美波、本当に何も隠してなんか」

「まさか、またラブレターを貰ったなんて言わないわよね？」

「美波、言葉に気をつけるんだ

ラブレターという単語に反応して皆が僕に向かってカッターを構えている」

決して大きくない声だったハズなのにクラスの全員がカッターを構えている

なんて、恐ろしいクラスなんだ……………それに慣れている自分も何か怖いな

「皆、カッターはまだ早いわ、落ち着きなさい、だいたい、どう考えてもアキが

ラブレターなんてもらえるわけないでしょう？隠しているのは別の物に決まっているわ」

島田さん……………それはそれで酷いよね？

「ふふん！そのままかさ！今朝僕の靴箱にラブレターが」
ドスッ！

島田さんの投げたカッターが畳に深く突き刺さった

「次は耳よ」

「心の底からごめんなさい」

「それじゃ、正直に答えなさい、何を隠しているの？」

「はい、実は僕が隠していたのは、きよ」

急に吉井が言葉を止める、どうしたのだろうか？

「きよ、きよ……………」

しかし、『きよ』って何だろう？きよ、きよ……………さっぱりわからない

「『きよ』、何よ？」

「きよ、競泳用水着愛好会の勧誘文！」

今ほど友達を変態だと思ったのは初めてだ

「ほ、本当なの、アキ？」

島田さんが疑いの眼差しで吉井に問いかける

「勿論本当さっ！」

「……………友達を選びなおした方が良いかな？」

「そ、それにしても捨てる素振りがなかったけど……………もしかして、入会する気なの？」

「ま、まあね！前から興味があつたからね！」

吉井……………そんなに競泳水着が好きなのか？

「そ、そうだったの……………初耳だわ」

たぶん、ここにいる皆が初耳だと思う

「でも、よりによって普通の水着じゃなくて競泳用だなんて……………一体どのへんに興味を持ったの？」

確かに、吉井は競泳水着のどこに興味を持ったのかな？

「そ、それは……………」

「うん」

「密着具合」

「変態だぁーっ！っ！」

あまりにも衝撃的なカミングアウトなので叫んでしまった
密着具合ってなに！？もう、普通の変態じゃなくてただのド変態じ
ゃないか！

「二人とも、わかっておるとは思うのじゃが一応言っておくと
今のも全部明久の嘘じゃからな？明久にそんな趣味があるわけな
かるう？」

「ええっ！？凄いいリアルなウソだったから危うく騙されるところだ
つたじゃない！」

「傷ついた！今の一言で僕は枕を毎晩涙で濡らすほどに傷ついた！」

「嘘だ！？吉井の性格から考えてそんな趣味があるド変態だと思っ
ほどだったのに！」

「割れた！今の追い打ちで僕のガラスのハートが砕け散るように割
れた！」

「ガラスのハートじゃなかるうに……………」

吉井のハートは少なくともガラス製ではないと断言できる

「これが最後よ、今度こそ正直に言いなさい、何があったの？」

「実は、今朝僕宛に脅迫状が届いたんだ」

脅迫状か……………なるほど、隠したい気持ちはわかる

「あ、なんだ、良かった」

え？そこは安心するところなの？

「して、その脅迫状にはなんて書いてあったのじゃ？」

「えつと……これには

『あなたの傍にいる異性にこれ以上近付かないこと』って書いてあるんだ」

「文面から考えて、手紙の主は吉井の近くにいる異性に対して強い気持ちを抱いている」

「大方嫉妬じゃろうが、つまり」

「うん、この手紙の主はこのクラスのたった三人の異性
つまり、姫路さんか秀吉か星に好意を寄せているヤツだったこと
がわかるね」

「バタンッ！」

「明久、金属バットを取りに行った島田が戻ってこないうちに逃げるのじゃ」

「一瞬にして教室を出るなんて……」

このクラスには人外な人が多すぎる

「ところで何をネタに脅迫受けておるのじゃ？」

「あ、そういえばまだ知らないや」

なにに、『この忠告を聞き入れない場合、同封されている写真を公表します』か

写真って、こっちの封筒に入っているやつかな？」

どうやら写真は三枚有るようで、一枚の写真をみると

メイド服姿の吉井

「この前の学園祭の服装じゃな」

「い、いつのまに撮影なんて……………」

「土屋がいるから不思議じゃないけど……………一枚目は？」

「ちょっと待ってね……………」

吉井が写真を見て固まってしまった

「明久、どうしたのじゃ？」

「……………トランクスだからセーフ、トランクスだからセーフ、トランクスだから……………」

「あ、明久！？自我が崩壊するほどのものが写っておったのか!？」

「次の写真に行こうか？」

「お主は驚くほどのマイペースじゃな!？」

トランクスって言っているみたいだから着替え中でも撮られたんだろっ

「三枚目は……………もついやあああつっ!」

「何じゃ!?! 一体何が写っておったのじゃ!?!」

「見ないで!こんなに汚れた僕の写真を見ないでえっ!」

「競泳水着の時点でもう汚れているよ!」

「ぶうっ!」

「よ、よくわからんが落ち着くのじゃ!皆が注目しておるぞ!」

騒いでいたせいか、皆の視線が集まっていた

「はあ、はあ、はあ……………恐ろしい威力だった……」

これは僕を死に追い詰める為の卑劣な計略と言っても過言じゃない……………」

「考えすぎではないかのう、メイド服くらい、人間一度は着るものじゃ」

「そうそう」

確か3、4回はメイド服を着たハズ

「明久君、木下君、風見君、おはようございます」

後ろから姫路さんの声が聞こえた

「この声は　　やっぱり姫路さんか、おはよう」

「姫路さん、おはよう」

「姫路か、おはよう、今朝は遅かったんじゃない」

「はい、途中で忘れ物に気がついて

一度家に帰ったので、ギリギリになっちゃいました」

だから、ギリギリに着いたのか

「丁度良い、先ほどの写真が騒ぐほど物でないと

姫路に証明してもらおうとしようかの………姫路、少々良いか？」

「はい、なんででしょう？」

「うむ、姫路に質問なのじゃが

明久のメイド服姿の写真があったらどう思うかのう？」

「うーん、そうですね……」

もしそんな写真があったら　とりあえず、スキャナーを買います」

………なぜ、スキャナー？

「へ？スキャナー？なんで？」

確かにスキャナーを何に使うのたる？

「だって、その……」

姫路さんが少し恥ずかしそうにして答えた

「そうしないと、明久君の魅力を全世界にWEBウェブで発信できないじゃないですか……」

ガラッ

「明久落ち着くのじゃ！飛び降りなんて早まった真似をするでない！」

「放して秀吉！僕はもう生きていける気がしないんだ！」

WEBで発信するとは思わなかった……

「そ、そうじゃ！ムツツリーニじゃ！」

ムツツリーニならばこの手の話には詳しいはずじゃ！事情を説明して

「ムツツリーニに笑われる？」

想像できないな……

「違う！事情を説明して脅迫班を見つけ出してもらおうのじゃ！」

「おおっ！なるほど！」

今頃になって気付いたのか

「ナイスアドバイスだよ秀吉！流石は僕のお嫁さんだ！」

「婿の間違いじゃろう!？」

「あの……どっちも間違いだと思いますけど……」

「姫路さん、あの二人に何を言っても無駄だと思っよ……」

今の状況では何を言っても聞こえていないと思う

「それじゃ、僕はムツツリー二に話があるから!」

吉井は土屋がいる、教室の隅に向かう

「ところで、明久君のメイド服姿がどうか……」

「ひ、姫路!ワシらと話でもせんかの!？」

「そうそう、少し話をしようか?」

西村先生が来るまで姫路さんと話をした

吉井の方は、なんとか土屋に依頼をすることができたようだ

西村先生が明日から始まる『強化合宿』について説明していく

場所は卯月高原という場所で、ここからだと言っても四時間くらいかかるらしい

はっ……向こうに行っても召喚システムの調整なんだろうな……

「特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ、クラスごとでそれぞれ違うからな」

Aクラスとかはリムジンバスかな?快適そうだな……

私たちFクラスは何で行くんだろう？小さいバスとかかな？

私は冊子の現地集合のページを開き、クラスの集合場所を確認した

「いいか、他のクラスと違って我々Fクラスは

」

『Fクラス 集合場所……………現地』

「現地集合だからな」

『『案内すらないのかよっ！？』』

私はあまりの扱いに涙を流した

第30話（後書き）

テストが残り二週間近くあり、投稿は遅くなりませんが

勉強が嫌になったり、疲れたりして………気が向いたら次も投稿
します

第31話(前書き)

試験勉強中に投稿するなんて………

第31話

強化合宿の一日目の日誌を書きなさい

姫路瑞希の日誌

『電車が停まり駅に降り立つと、不意にめまいのような感覚が訪れました』

風景や香り、空気までもがいつも暮らしている街と違う場所では何か素敵な事が起きる様な、そんな予感がしました』

教師のコメント

環境が変わることの良い刺激が得られたようですね、姫路さんに高校二年生という

今この時にしか作ることのできない思い出が沢山できることを願っています

風見星の日誌

『電車が停まり駅に降り立つと、不意に家にいる妹二人を思い出した。最近の世の中は物騒みたいなので、二人の身に何か起きたらと考えたら心配である』

教師のコメント

風見君は妹思いだね、最近は犯罪数も減っているみたいなので安心して下さい

土屋康太の日記

『電車が停まり駅に降り立つと

不意に眩暈のような感覚が訪れた、あの感覚はなんだったのだからか』

教師のコメント

乗り物酔いです

坂本雄二の日記

『駅のホームで息を吸い込むと、少し甘いような、仄かに酸っぱいような

不思議な何かの香りがした、これがこの街の持つ匂いなんだな、と感慨深く思った』

教師のコメント

隣で土屋君が吐いていなければもっと違った香りがしたかもしれませんがね

side星

私たちFクラスは現地集合のため電車で移動していた
電車に乗って一時間ぐらいで周りの景色が様変わりしているように
見えた

「あと二時間したら到着じゃな」

私の隣に座っている秀吉が腕時計を見て確認していた

「あと二時間か……………暇だね」

「暇じゃ……………」

特にやることもなく、眠くも無いのでどうしようか悩んでいた

「……………」

ちなみに、向かいに座っている土屋は電車に乗ってすぐに寝た

「退屈じゃのう……………明久たちの席に行ってみるかの？」

「……………そうだね、吉井たちのところに行こうか」

吉井たちの席は私たちの席の後ろなので吉井たちの席の方に顔を出
した

そこでは、島田さんが本を開いて吉井に問いかけていた
事情を知らないので近くに居る坂本に声をかけた

(坂本、吉井と島田さんは何をしているの?)

(星か、島田が明久に心理テストを聞いているんだよ)

それじゃ、あの本は心理テストの本ということか

「それじゃいくわよ、『次の色でイメージする異性を挙げて下さい』」

色のイメージか、その人に似合う人でいいのかな?

「『?緑 ?オレンジ ?青』それぞれ似合うと思う人の名前を言ってもらえる?」

緑にオレンジに青か、ん〜…………

(坂本はどう思う?)

(そうだな…………)

私と坂本は悩んでいる途中に吉井が答える

「ん…………順番に、『緑 美波 オレンジ 秀吉 青 姫路さん』って感じかな」

ブリイツ!

吉井が答えると、島田さんが持っている本が真っ二つになった顔が笑っているが、どう考えても怒っているように見える、さっきの心理テストの所為?

(どうして島田さんが怒っているのかな？)

(わからんが、明久の答えで怒っているのは確かだな)

(吉井の答え？)

あの答えで怒ったってどういことだろう？

「 どうしてウチが緑で瑞希が青なのか、説明してもらえろ？ 」

「 ど、どうしてと仰られましても…… 」

吉井は何故か戸惑っている、イメージが緑だから言ったのになんで怒るんだろ？

「 怒らないから正直に言ってみて？ 」

「 前に下着がライトグリーンだったから 」

「 坂本、窓開けて 」

「 あいよ 」

坂本が窓を開けたことで外の空気が入り込む

「 捨てる気！？ 僕を窓から捨てる気！？ 」

「 島田、窓からゴミを捨てるな 」

「雄二、美波を止めてありがとう、でも、今サラット僕をゴミ扱いしたよね？」

「いいのよ、ゴミじゃなくてクズだから」

「どうしよう、僕、ここまで酷い扱いを受けたのは久しぶりだよ」
久しぶりなんだ

「クズはきちんとクズカゴに入れるべきだ」

「そして雄二もクズを否定しないんだね……」

そんな吉井弄りが終わり、坂本が島田さんから本だったものを取り上げる

「あっ！ちょっと!?!？」

「どれどれ？緑は『友達』、オレンジは『元気の源』、青はなるほどなあ」

坂本は吉井と島田さんを交互に見て笑みを浮かべる、何が書いてあったんだろ？

「さ、坂本！返しなさいよ！」

「悪い悪い、面白そうだったもんで、つい借りちまった」

坂本が謝るが島田さんは坂本を睨んでいた

「なにか面白そうなことをやっておるの？」

「あっ、秀吉」

秀吉が私と同じように吉井達の席の方に顔を出した

「ワシも参加していいかの？」

「私も参加していい？」

「別にいいけど」

島田さんは私と秀吉が参加するせいか不満顔になっている

「ところで明久、さっきの答えじゃが『次の色でイメージする異性を挙げて下さい』とあったのじゃが、オレンジでイメージするのは誰じゃ？」

「秀吉」

「……………少し、嬉しいから困る……………」

何で嬉しいの

「ところでムッツリーニは参加しないの？」

「席に座って早々眠っておるぞ、色々調べ物しておったとか」
きつと、吉井と坂本たちの依頼した犯人捜しだろう

「あの、私も参加していいですか？」

「俺も参加するか」

結局（土屋を除く）全員が参加することになった

「ところで美波ちゃん、さっきの問題の『青の連想する異性』って

」

「第二問！」

島田さんが姫路さんの言葉を遮るように大きな声を出す、青の連想する異性って何だろ？

「『1から10の数字で、今あなたが思い浮かべた数字を順番に2つ挙げて下さい』」

「俺は5と6だな」（坂本）

「ワシは2と7じゃ」（秀吉）

「私は8と2の二つ」（私）

「僕は1と4かな」（吉井）

「私は3と9です」（姫路さん）

それぞれの答えを聞いた後、島田さんはページを捲った

「『最初に思い浮かべた数字は

いつもまわりに見せているあなたの顔を表します』それぞれ
「

島田さんが順番に指を差しながら

「クールでシニカル」 坂本

「落ち着いた常識人」 秀吉

「冷静沈着」 私

「死になさい」 吉井

「温厚で慎重」 姫路さん

と、告げた

「ふむ、なるほどな」

「常識人とは嬉しいのう」

「冷静沈着なんだ」

「ねえ、僕だけ罵倒されてなかった？」

「温厚で慎重ですか」

皆、それぞれ感想を述べる

「『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない本当の顔』それぞれ
「

再び島田さんが順番に指で差していく

「公平で優しい人」 坂本

「色香の強い人」 秀吉

「信念が固い人」 私

「惨たらしく死になさい」 吉井

「意志の強い人」 姫路さん

と、告げた

「秀吉は色っぽいのか」

「星は信念が固いそうじゃな」

「姫路さんは意志が強く見えるね」

「僕の罵倒エスカレートしてなかった？」

「坂本君は優しいそうです」

その後も心理テストをネタに盛り上がり、時間が過ぎていった……

……

……

……

…

心理テストを何問かやっていると

「あ、ムツツリーニ、おはよう」

「目が覚めたようじゃな」

土屋が起きたみたいだ

「……………空腹で起きた」

「あれ？もうそんな時間？」

携帯で時間を確認すると今は1時15分、いつもなら昼を済ませる時間だ

「確かに良い頃合いじゃの、そろそろ昼にせんか？」

「あ、お昼ですね、それなら」

姫路さんが鞆から何かを取り出そうとしている

「……実は、お弁当を作ってきたんです、良かったら……………」

姫路さんが取り出したのは大きな弁当箱である

大きさから考えて、皆で食べる為に作ったようにみえる

「姫路、悪いが俺も自分で作ってきたんだ」

「すまぬ、ワシも自分で用意してしまったの」

「……………調達済み」

「姫路さん、ごめんね？弁当を作ってきたんだ」

いつもより多く作ってしまったので姫路さんの弁当を食べることができない

「そういうわけで、明久にでもご馳走してやってくれ」

坂本は優しいな、吉井はお金がなくてお昼がないから姫路さんの弁当を少し貰うんだね

「ごめん、実は僕もこうして惣菜パンを」

パクッ

「すまんな明久、口が滑ってしまった」

一瞬にして吉井のパンが坂本の胃袋に収まってしまった

「……………！！（吉井と坂本のガンのくれ合い）」

「おっと、ゴメン雄二、僕も手が」

「滑らないようにきっちり掴んでおいてやるからな」

「……………！！（再びガンのくれ合い）」

この二人はどうして、すぐにこうなるのだろうか？

「あの、明久君、良かったら……………」

吉井に救いの手が

「あゝ、えっと、その……………」

「アキ、良かったらウチのお弁当も食べてみる？」

「ありがとう！美波も分けてくれるんだね！」

それならいつそのこと、皆でお弁当を広げて少しずつ摘まもつよ
「！」

なるほど、それはいい考えだ

私は吉井の提案に乗ろうとしたら……………

「わ、ワシらは向こうのせきなので遠慮させていただこうかの」

「……………！！（コクコク）」

「えっ、ちょっと」

秀吉と土屋に引っ張られて席に戻った

「さて、ワシらもいただくとするかの」

「……………いただきます」

「いただきます」

それぞれの弁当を広げて食べる準備をする

秀吉の弁当は二段式で上がオカズで下がご飯となっているタイプだ
オカズには卵焼きやウィンナーなどメジャーなものが揃っている
土屋の弁当は……………

「……………土屋、それは？」

「……………昼食」

何故、昼食でカップラーメンであるかのツツコミの前に
どこでお湯を入れたのかが気になる、しかも最近販売されたもので
あった

私が弁当を広げると秀吉と土屋が覗きこんだ

「星の弁当はすごい……………」

「……………驚き」

「そうかな？」

私の弁当はオードソックスのタイプで
手作りのハンバーグやポテトや野菜などをバランス良く盛り付けた
弁当だ

今回は力作だ

「これは星が作っておるのか？」

「そうだよ」

「……………少し貰いたい」

「いいよ」

お互いに弁当を少し分けて楽しく食事をした

目的の駅に電車が停まり下りる時、吉井が何故か死んでいる顔になっていた

第32話（前書き）

久々のバカテス

遅れた理由は、単に書く時間がなかったからです

第32話

問 我校の学園長の名前を答えて下さい

姫路瑞希の答え

『藤堂カヲル』

風見星の答え

『藤堂カヲル』

教師のコメント

正解して当然ですね

土屋康太の答え

『興味がない』

教師のコメント

少しぐらい興味を持ちましょう

吉井明久の答え

『妖怪』

坂本雄二の答え

『クソババア』

教師のコメント

この答えは後で西村先生に見せることにします

（side 星）

「大きいね……」

「ああ、こんなものに金を使うか？普通……」

「うむ、立派じゃのう……」

「……確かに……」

私と坂本と秀吉と土屋は、合宿所を見てそれぞれ思ったことを言う
まるで旅館を思わせる三階建ての建物であり、地下一階を風呂にし
た作りとなっている

……資料を見て思ったけど、ここまでする？

「……………」

そして、一人ぐったりと坂本の背中で眠っている……吉井
駅を降りた時からずっと寝ているけど、なかなか起きないのは何故
だろう？

「私は用事があるから先に部屋に行っていよいよ」

「わかった」

私は合宿所に入ると目的の場所に向かって行く

(たぶん、何時ものことだろうな……)

私は考え事をしながら歩いていた

……

……

……

……

…

さて、目的の場所に到着したので

トンッ！トンッ！

すると、中から

『入りな』

「失礼します」

許可を貰ったので中に入る

そこには文月学園の最高責任者がいる

「学園長、今回は？」

「召喚システムの調整さね」

やっぱり……嫌だな……

調整と言ってもシミュレーションや微調整などあり

いろいろとすることが多く、軽く一日は掛かってしまう

「そんな嫌な顔をするんじゃないよ、配線の確認だけでいいからね」

「配線の確認ですか？」

それなら、まだ時間は掛からないか

「ほれ、資料だよ」

学園長から資料を貰い目を通す

……これなら数十分あればできるかな？

「（これぐらいなら……）わかりました、終わり次第連絡しますの
で」

「任せたよ」

学園長室を扉を閉め、私は目的の場所に向かう

しばらくして、目的の場所に着いた

「此処か……とりあえず、中に入るか」

分厚い扉を開け中に入ると、そこには……

「うわぁ……………」

配線だらけで足場が全然ない部屋だった

資料より多くある配線の数に思わず引いてしまった

（この量は予想外だ……………大丈夫かな？）

確認ぐらいだから時間は掛からないよね？

そんなことを考えた時がありました

全然終わりません、配線の量がありすぎて無理です

タツタツタツ

さつきから上の方で騒がしいな……ちょっと確認してくるか
この上は確か、私たちの部屋だから……嫌な予感がする

私たちの部屋は、私、吉井、坂本、土屋、秀吉、の五人部屋である
そこが騒がしいということは……

「また、あの二人……かな？」

たぶん吉井と坂本が何か問題を起こしたのかな？とりあえず確認し
に行くか

扉を開けて部屋に

「……あつ」

戻ろうとしたら、扉の前に木下さんがいた

……何故か指を鳴らしながら

「風見君？ちよつといいかしら？」

「えつと……何かな？」

「大丈夫よ、別に怒ってないから」

「何に対して怒っているのかわからないんだけど？」

木下さんが何故か殺気を出しながら近づいてくる
私には何が何だかわからないんだけど

「大人しく白状した方が関節が増えることはないわよ」

「白状以前に何が何だかわからないよ！」

「あら惚ける気なの？」

「だから何を!？」

「アンタたちが女子風呂を覗いたことよ！」

「覗き!？」

覗きつて………吉井たちは何をやっているんだ？

「木下さん誤解だよ！私はずっと此処で作業をしていたんだから！」

とりあえず今は木下さんの誤解を解かないと

「覗きの？」

「違つよ!！」

誤解を解くはずなのに私も覗きに参加したことになっている

「さあ、とつと白状しなさいよ!！」

「だから、違つってさっきから 木下さん？」

どうして少しずつ関節を って、痛い！痛たたたた
たっ!！」

「どっつ？言つ氣になつた？」

「だから、ちが「まだ足りないよね」って、木下さん！？」

その関節はそつちに曲がらないから、それ以上は

「！」

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「えつと.....その.....ごめんなさい」

「いや、わかってくれたからいいよ」

誤解を解くのに時間が掛かってしまった

その間、関節技を喰らっていたので体中が痛い

「大丈夫？」

木下さんが心配し目で私を見てくる

「一応だけど大丈夫だよ、とりあえず事情を説明してもらえる?」

「わかったわ、実は……………」

〈説明中〉

……………なんとなくわかった

木下さんの説明によると女子風呂にカメラが仕掛けられていたらしく犯人はFクラスの吉井、坂本、土屋の三人と予想
制裁をするために女子が部屋に突撃、だから騒がしかったのか

「うーん……………」

「どうしたのよ、説明を聞いたら急に考え込んでしまった」

「ちょっと変じゃない?」

「変?何が?」

「脱衣所は入浴時間にならないと開かないし
私たちは此処に着いてからそんなに時間が経ていないから変だと思
う」

脱衣所は生徒が来てから先生が離れるのでカメラを仕掛けるのは困難
しかも、女子風呂は西村先生が担当していたはずだから不可能に近い

「確かにそうね……でも、誰が犯人だって言うの？」

「それについてはわからないけど……」

女子風呂の前に監視カメラがあったはずだから、それを見ればわかるかもしれない」

「えっ、そうなの？」

「先生の許可がないとダメだけどね」

普通に考えれば許可はしてくれと思うが一応言っておく

「それじゃ、さっそ『ぎゃあああああっ！』……」

「先に坂本たちを助けた方がいいね」

「そうね」

私と木下さんは坂本の悲鳴が聞こえたので部屋に向かった

「ホント、死ぬかと思ったよ」

「………酷い拷問だった」

「それより何故ワシが被害者扱いだったことが解せが」

私と木下さんが女子たちを説得し
不満だったみたいだが証拠不十分で釈放してもらった

「四人とも大丈夫？」

「痛みはすけど大丈夫だよ」

「……………問題ない」

吉井と土屋は大丈夫そうだが、坂本だけ返事がない

「坂本？大丈夫？」

「……………上等じゃねえか」

「え？」

「こっつなったら……………本当に覗いてやるっじゃねえか！」

坂本はキレていた

「雄二、そんなに霧島さんの裸が見たいなら、個人的にお願いしたらいいんじゃない？」

「バ、バカを言うな！翔子の裸なんかに興味があるか！
これは俺たちを脅している犯人を探すための作戦だ！」

覗きの時点で作戦も何もない気がする

「脅している犯人？覗きと関係あるの？」

「ああ、俺と明久を脅している犯人は

『尻に火傷』があり『女子生徒』であることが分かっている」

「……君たちは一体何を調べたの？」

土屋が調べたと思うけど情報がおかしい

「尻に火傷の痕がある奴を見つけたら全部解決するってわけだ！」

「なるほどね！ってそれにしても、相変わらず雄二は霧島さんのことになると

やる気が凄いよね、どうしてそこまで頑張るのかって疑問に思うくらいだよ」

「確かにのう……雄二よ、何故そこまで必死なのじゃ？」

「……実はこの前、いつものように翔子にクスリを嗅がされて気を失っていたんだが」

「ごめん、その前置きから既にイロイロと厳しいと思う」

「目が覚めたらヤツの家に拉致されていたんだ」

「拉致って……」

「ふうん、そこで霧島さんの両親と挨拶をしたとか？」

「いや、そうじゃない、ただ、ヤツの家に」

「家に？」

「俺の部屋が用意されていたんだ」

……………それ作ったの私だ

「あんな台詞を聞かれたら、間違いなく俺は、俺の未来は……………！」
最近坂本がよく壊れている姿を見ている気がする……………

「じゃあ、みんな頑張ってるね」

「えっ？星は協力してくれないの？」

「うん、私は別のやり方で犯人を調べてみようと思う」

「そうか、わかった」

「雄二、いいの？」

「俺達で直接的に犯人を探すのと星が間接的に探した方が情報は多いからな」

「ああ、なるほど」

「それじゃ行ってくる」

坂本たちは風呂の時間がギリギリなので急いで部屋から出ていく

「さてと……………」

私はパソコンを起動させ、監視カメラにアクセスを試みる
先生に頼むのもいいけど容疑者扱いになっているので断られる可能性がある

さて、女子風呂の通路の監視カメラのデータは……………これかな？

……………あっ、間違えた、これ学習室のやつだ、えっと……………こつち？
また、間違えた……………一体どれだよ！データが多すぎる

かれこれ数十分調べても見つからなかった

（今日はこれぐらいかな……………そういえば、そろそろ男子の風呂の時間だっけ？）

しおり、しおり……………あつた、えっと時間は……………

↓合宿所での入浴について↓

・男子ABCクラス…20:00～21:00 大浴場(男)

・男子DEFクラス…21:00～22:00 大浴場(男)

・女子ABCクラス…20:00～21:00 大浴場(女)

・女子DEFクラス…21:00～22:00 大浴場(女)

・Fクラス木下秀吉…20:00～21:00 個室風呂？

(何で秀吉だけ個室風呂……？まだ続きがある)

↳合宿所での入浴について↳

・男子ABCクラス…20:00}21:00 大浴場(男)

・男子DEFクラス…21:00}22:00 大浴場(男)

・女子ABCクラス…20:00}21:00 大浴場(女)

・女子DEFクラス…21:00}22:00 大浴場(女)

・Fクラス木下秀吉…20:00}21:00 個室風呂?

・Fクラス風見星…21:00}22:00 個室風呂?

私も!?

しかたがなく個室の風呂に入ることになった

結局、犯人についての手掛かりを掴むことができず
吉井たちは西村先生に捕まり、強化合宿一日目が終了した

第32話（後書き）

遅れた理由？・部活などを九時まで活動していた

次回の投稿はまた遅くなるかもしれませんが、待っていてください

第33話（前書き）

まず最初に一言……すみません、投稿が遅れました
作者がスランプ状態で中々書けなかつたです
そんな作者の駄作ですが……どうぞ

第33話

問 強化合宿二日目の日誌を書きなさい

姫路瑞希の日誌

『今日は少し苦手な物理を重点的に勉強しました、いつもと違ってAクラスの

人たちと交流しながら勉強もできたし、とても有意義な時間を過ごせました』

風見星の日記

『今日は苦手な教科である国語を勉強しました、わからないところや困ったところが

あると、Aクラスの人たちが教えてくれて、いろいろな人と勉強することができました』

教師のコメント

Aクラスと一緒に勉強することで得られるものがあつたようで何よりです

今度の振り分け試験の結果次第ではクラスメイトになるかもしれない人たちと

交流を深めておくと良いでしょう

土屋康太の日記

『前略

夜になって寝た』

教師のコメント

前略はそうやって使うものではありません

吉井明久の日記

『全略』

教師のコメント

あまりに豪快な手抜きに一瞬言葉を失いました

〈side星〉

「……………雄二、一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子

当然のように俺の膝に座ろうとするな、クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

強化合宿二日目、今日の予定はAクラスとの合宿学習

学習の内容は自習である、質問があれば周囲や教師に聞いても良いその為、机の並びも生徒同士が向かい合うような形になっている

「しかし、何故に自習なのじゃ？授業をやらないのかのう？」

私の前の机で勉強している秀吉がペンを止め、私に聞いてくる授業か、ん〜……………

「多分、授業をやらないんじゃない？」

「んむ？どづいつことじゃ？」

「予想だけど、AクラスとFクラスだと同じ授業を受けてもわからないでしょ？」

「うむ、否定できぬ」

「でしょ？合宿のしおりにも書いてあったけど、この合宿は各自のモチベーションの向上なんだよ？授業はあまりやらなくても問題ないんだ」

「なるほどのう、そうじゃたか」

秀吉は私の説明を聞いて納得したようだ

「それにしてものう……………」

秀吉が顔を横に向けたのでその視線の先を見ると…………

「なんていうか、いつもだよな？」

「うむ」

向こう側の机で吉井たちが騒いでおり
私から見たら少し静かにしてほしいです

「木下君に風見君」

「ちょっといいかしら？」

秀吉と二人で雑談してたら

姫路さんと島田さんが声をかけてきた

「どうしたの二人とも？」

「ちょっと荷物を運ぶのを手伝ってもらいたいんですけど？」

「荷物じゃと？どのような荷物なのじゃ？」

私たちに頼むからきつと重いものかな？

「少々石畳を」

「アウトなのじゃーっ!？」

いきなり秀吉からのアウト宣言

何故だろっ？姫路さんが言った石畳が原因なのかな？

「秀吉、石畳ってなに？」

「星は知らなくてよいのじゃ！」

気になる

「そ、それより明久たちのところに行くぞ

きつと、何かあったハズなのじゃ行くのじゃ！」

「えっ、待ってよ秀吉」

姫路さんと島田さんを置いて、秀吉が

吉井たちのところに行くので私も付いて行くことにした

……

……

……

…

そして、吉井たちのところに着いたけど……

「キミが　　僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！」

「……ぷっ、あははっ！吉井君はお尻が好きなの？」

それともボクの胸が小さいから気をつかってお尻にしてくれたのかな？」

吉井が工藤さんに斬新な告白をしている最中だった

「……………」

隣にいる秀吉の表情が固まっている、もちろん私もなんていか、タイミングが悪かったみたいだ……出直そう

「ご、誤解だよ！別に僕はお尻が好きってわけじゃなくて！

あつ、待って二人とも！誤解だから！僕を置いて行かないで！」

「流石だな明久、まさか録音機を目の前にそこまで言うとは」

「へ？」

……録音機？

「ごめんね、折角だから録音させてもらったよ」

ピッ、と電子音を上げて再生される吉井の声

《僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！》

「ひあああっ！？これは合成していない分

ダメージが大きいよ！？お願い工藤さん！今は消して下さい！」

なんて悪質な……工藤さん、録音機使うの上手いな

「吉井君って、からかい甲斐があつて

面白いなあ、つつい苛めたくなっちゃうよ」

ピッ 《お願い工藤さん！》 《僕にお尻を見せて》

「うああんっ！……どどん僕が変態になってる気がするよ！」

「元から変態じゃん」

「グハツ！」

今さら的な感じで言ったら吉井が口から血を吹いた

「ひ、酷いよ星！僕の何処が変態だって言っただよ！」

「お尻を見せと言ってる時点で変態でしょ？」

「酷い！……！」

「それより工藤さん、悪戯はダメだよ」

「ごめんねえ、つい苛めたくなっただ」

「あれ？僕のことは無視なの？」

「明久、お前には他に気にすることがあるだろ？」

「えっ？」

「後ろを見てみる」

坂本が吉井に後ろを見るように言ったので

吉井は後ろに振り返り、私も後ろを確認すると

「……今の、何かしらね？瑞希」

「……なんでしょね？美波ちゃん」

そこには、表情を変えない

姫路さんと島田さんが何かを設置している

もしかして、あれが石畳？

「まさか、ただでさえ問題クラスとして注意されているのに
これ以上問題を起こすような発言をしたバカがいるのかしら？」

「困りましたね

そんな人がいるなら敵しいオシオキが必要ですよね？」

最近、姫路さんがどんどん変わっていると思う

たしか姫路さんは体が弱いハズなのに石みたいなの平気に持つてるし

527

「二人ともこれは誤解なんだ！僕は問題を起こす気はなくて

ただ純粹に《お尻が好きって》だけなんだ　　待つて！

今のは途中に音を重ねられたんだ！お願いだから僕を後ろ手に

縛らないで！あとそっちの皆も笑ってないで助けてよ！特に雄二

！」

工藤さんの録音機の音声が入った瞬間に二人の姿が

一瞬ぶれたかと思ったら、既に吉井の関節を極めていた

姫路さんは本当に体が弱いのか？

その時、一人の救世主が現れた

「……………工藤愛子、おふざけが過ぎる」

「ムツツリーニ！助けてくれるの!？」

「……………うまくやってみせる」

そう言つて土屋が取り出したのは工藤さんと同じ録音機？
音に音を重ねて打ち消すのかな、大丈夫かな?……………心配だ

「姫路さん、美波、よく聞いて

さっきのは誤解で、僕は《お尻が好き》って言いたかつたんだ
《特に雄ニ》《の》《が好き》つてムツツリイニイーツ!
後半はキサマの仕業だな!?!うまくやるつて

「工藤さんよりも上手に僕を追い込むつてことなの!?!」

やっぱり、助ける気はなかつたんだ……………

「……………工藤愛子、お前はまた甘い」

「くっ!さすがはムツツリーニ君……………!」

二人はまるでライバル関係の様に睨みあっている
やるなら後でやってもらいたい、その後いろいろとあつたが

ピッ 《吉井》 《お尻を見せ》 《て》

「工藤さん!?!何さりげなく再生してるの!?!」

「風見君……………吉井君のお尻が好きなの?」

「木下さん!?!なに誤解してるの!?!違つよ!?!」

結局、この騒ぎは西村先生がくるまで続いた

そんなこんなで勉強時間や夕食の時間も終わり
入浴の時間、私たちは部屋で話し合いをしていた

「僕は工藤さんが犯人だと思うんだけど」

吉井の意見に坂本が頷く、それで吉井が取り押さえることを
提案するが土屋が否定、もし工藤さんが犯人でなかったら
真犯人を捕まえることができなくなるためであるからだ

「けど、どうでしょうか？何か作戦を練らないと

先生達のあの警備を突破するのは難しそうだよ」

「作戦とは言っても、正面突破しかないよ？」

「あの場所はただの広い一本道じゃったからのう」

女子の風呂場までは一本道で、障害物も何もない

「そうだな、作戦も立てる時間もないし

基本的な作戦は昨日と同じで行こうと思う」

やっぱり、それ以外ないか……

「だが、方法がないわけでもない」

「え？作戦があるの？」

作戦？正面突破以外に？

「作戦なんて立派なものじゃないがな

要するに、正面突破を成功すればいいだけだろう？」

「もしかして、仲間を増やすってこと？」

私の言葉に坂本はああ、と言って言葉を続ける

「そうだ、正面突破しか方法がないなら

それに成功するだけの戦力を揃えたらいい

質は向こうが上でも、数で上回れば勝機はある」

「それじゃ、すぐにでも話をしなきゃ

もうすぐお風呂の時間になっちゃうよ？」

「安心しろ

夕飯時に既に声はかけている、そろそろ来るはずだ」

坂本がそう言うと、タイミング良くノックの音が聞こえてきた

「坂本、俺たちに話って何だ？」

須川君を先頭に、Fクラスの男子がどんどん部屋に入ってくる

「よく来てくれた、実は皆に提案がある」

部屋に入りきれなくて廊下にいる人にも聞こえるように、坂本はよく通る声で告げた

『提案？』

『今度はなんだよ、正直疲れて何もやりたくないんだけど』

『早く部屋に戻ってダラダラしてえな』

全員がダルそうにしている、一日勉強漬けだったので無理もないざわめく皆を見ても坂本は話そうとせず、静かにするのを待って続きを口にした

「皆、女子風呂の覗きに興味はないか？」

『『『詳しく聞かせろ』』』

私はこのクラスが大嫌いです

「昨夜俺たちは女子風呂に覗きに向かったんだがそこで卑劣にも待ち伏せをしていた教師陣の妨害を受けたんだ」

『ふむ、それで？』

おかしい、誰もツッコミを入れない

「そこで、風呂の時間になったら女子風呂警備部隊の排除に協力してもらいたい、報酬はその後に得られる理想郷アガルタの光景だ、どうだ？」

『『『乗った!』』』

中身はともかく、仲間が増えたことで勝機が上がった

「ムツツリー二、今の時間は？」

「……………二一 時」

入浴時間は前半組が二 時だから
今から行けば丁度良いタイミングだろう

「今から隊を四つに分けるぞ、A班は俺に、B班は明久
C班は秀吉、D班はムツツリー二にそれぞれ従ってくれ」

『『『了解つ!』』』

「いいか、俺たちの目的は一つ!理想郷^{アガルタ}への到達だ!

途中に何があるうとも、己が神気を四肢に込め、目的地まで突き
進め!

神魔必滅・見敵必殺!ここが我らが行く末の分水嶺と思え!」

『『『おおおおつっ!』』』

「全員気合を入れる!Fクラス、出陣^でるぞ!」

『『『おっしやあぁーっ!』』』

「おーっ!」

とりあえず、私は昨日と同じ作業でもやるか

第33話（後書き）

次は、なるべく早く投稿しますので

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8818u/>

バカとテストと転校生

2011年12月25日01時52分発行